うつせみのあなたに

第６巻

星野廉

目次

はじめに
はじめに 2

第１部　09.06.03〜09.06.13
09.06.03　つくる（**1**）. 6
09.06.04　つくる（**2**）. 17
09.06.05　つくる（**3**）. 29
09.06.06　つくる（**4**）. 40
09.06.07　テリトリー（**1**）. 52
09.06.08　テリトリー（**2**）. 64
09.06.08　テリトリー（**3**）. 70
09.06.09　テリトリー（**4**）. 76
09.06.10　テリトリー（**5**）. 85
09.06.11　テリトリー（**6**）. 97
09.06.12　テリトリー（**7**）. 108
09.06.13　こんなことを書きました（その **10**）. 111

第２部　09.06.18〜09.06.26
09.06.18　なわ＝わな 118
09.06.19　台風と卵巣 125
09.06.20　出る 137
09.06.21　うんちと言葉 151
09.06.22　地と知と血（**1**）. 164
09.06.22　地と知と血（**2**）. 174
09.06.23　「あつい」と「わからない」. 183
09.06.24　ぼーっとする、ゆえに我あり 195
09.06.25　時の神＝あわいわあい（**1**）. 207
09.06.25　時の神＝あわいわあい（**2**）. 217
09.06.26　こんなことを書きました（その **11**）. 226

あとがき
あとがき 234
『うつせみのあなたに　　第１巻〜第１１巻』の各記事タイトル 235

奥付
奥付 254

はじめに

はじめに

本書を第 6 巻とするシリーズは、2008 年 12 月 19 日から 2010 年 3 月 11 日までの間に書いたブログの記事を再録したものです。初めて開設したブログのタイトルは「ネガティブに生きる」で、ハンドルネームは「パリス・テキサス」でした。ヴィム・ヴェンダースが監督した映画、“Paris, Texas”（文字通りには、米国の「テキサス州、パリス市」という意味ですね）から取りました。大好きな映画です。邦題は、なぜか「パリ、テキサス」ですね。

どうして「ネガティブに生きる」なのかと申しますと、うつとの闘いと共存をテーマ、あるいは目的にしていたからです。つまり。「ネガティブに生きる＝頑張らない」ほどの感覚で、名付けました。

私のブログは、当初の日記的な色彩が薄れ、徐々にエッセイや論考に近いものになっていきます。ブログにしては長めの記事をほぼ毎日書いていたので、データとしての全体の量はかなり大きいです。したがって、いくつかに分冊する形で電子書籍化していく予定です。

ブログで長文の記事を投稿していた時期には、パソコンや携帯電話で読まれる文章であることを意識し、読者がモニターや液晶の画面で読みやすくするための工夫をしていました。具体的には、各段落を短くし、段落間の改行を頻繁に行うようにしました。また、1 センテンスでの読点をなるべく多くし、中には読点を打つ個所で改行するといった少々乱暴な書き方もしています。

そんなわけで、今回の電子書籍化に当たっては、もとの文章がブログ記事であったことを、できる限り忠実に再現し、上述のような独特のレイアウトをそのまま反映させるように努めました。

＊

以下は、過去に開設したブログの記録です。

＊「ネガティブに生きる」2008-12-19～2009-02-27

＊「うつせみのあなたに」2009-03-01～2009-03-09

＊「でまかせしゅぎじっこうちゅう」2009-03-10～2009-03-15

＊「うつせみのあなたに」2009-03-26～2009-04-08

＊「でまかせしゅぎじっこうちゅう」2009-04-06～2009-04-08

＊「うつせみのあなたに」2009-04-17～2009-07-17

＊「でまかせしゅぎじっこうちゅう」2009-08-01～2009-08-08

＊「うつせみのあなたに・・・」2009-08-11～2009-09-01

＊「小品集」2009-09-04～2009-11-14（ハンドルネームとして「恵」を使ったブログ）

＊「うつせみのあなたに」2009-09-04～2009-11-19

＊「うつせみのあなたに」2009-11-27～2009-11-29

＊「うつせみのあなたに」2009-12-01～2009-12-11

＊「でまかせしゅぎじっこうちゅう」2009-12-02～2009-12-10

＊「ヒト観察記」2009-12-06～2009-12-10

＊「うつせみついたうつせみのおと」2009-12-08～2009-12-10

＊「うつせみのな」2009-12-12～2009-12-15

＊「うつせみのくら」（それまでに削除したブログ記事のバックアップを再ブログ化したもの）

＊「うつせみのあなたに」2009-12-16～2010-02-28

＊「うつせみのうわごと」2010-03-04～2010-03-11

ブログを作り、壊し、またもや、作り、壊し、の繰り返しです。お恥ずかしい限りです。とはいえ、以上の記事のバックアップは、ちゃっかりとすべて保存されています。実は、言霊が怖いのです。文章を捨てられない、消せない、つまり削除できないのです。冗談ではなく――。

このシリーズのタイトル、また現在もあるブログのタイトル「うつせみのあなたに」は、いろいろな意味に取れます。その意味の多重性については、本書で何回か触れています。そのため、意味の複数の解釈は保留にしておきますので、どうか想像してみてください。大きめの辞書で「うつせみ」と「あなた」を引いてみると、何通りかの意味に取れることが、お分かりになると思います。

本書は、『うつせみのあなたに』の第 6 巻です。このシリーズ全体に共通するのは、「代理の仕組み」、つまり「「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いる」という仕組みです。これをテーマに、さまざまな例を挙げたり、多種多様な素材を使いながら、話を展開していきます。

本書の読み方として、まず記事を読み解説は後回しにする方法以外に、第 1 部の最終記事「09.06.13　こんなことを書きました（その 10）」、そして第 2 部の最終記事「09.06.26　こんなことを書きました（その 11）」に収録されている各記事の解説に目をお通しになった後に、それぞれの記事をお読みになるのも、よろしいかと思います。

第１部　09.06.03～09.06.13

09.06.03　つくる（1）

◆つくる（1）
2009-06-03 08:44:13｜言葉

　冷蔵庫って、お母さんに似ていると思いませんか？ 幼児にもどった気持ちになって、しゃがんだり身をかがめ、目線を下に構えて、そばに立ってみると、そんな気がするのです。どっしりとしていて、幼児でなくても、小学生低学年くらいが抱きついて、ちょうどいい重量・体積・質感があります。

　エプロンみたいに白くて、いろんなものが貼り付けてあって、よく耳を澄ますとぶーんというやさしい音がして、熱を発していて温かく、扉を開くと、どんな望みもかなえてくれそうな、こころが静まる思いがします。そんな気分になっている自分は、たぶん幼児がえりをしているのでしょうね。

　コドモたちが帰宅すると、すぐに飛んでいくところが台所。そして、真っ先に冷蔵庫を開ける――。そんな話をよく聞きます。オトナも、そうみたいです。だいいち、この自分がそうです。帰るなり、まっしぐら。ネコまで、ついてきます。「衣食住」のうち、もっとも切実なものが「食」だという気がします。その人にとって基本的な欲求を、最初に満たしてくれた存在。お乳を与えてくれた存在。それがお母さん、あるいは、その代理を務めてくれた人なのです。ですので、

＊冷蔵庫は、お母さんに似ている。

と思います。

　ただし、マンガやアニメになっている、

＊「あたしンち」で出てくる、冷蔵庫に形が似ていなくもない、例の「四角っぽい」「お母さん＝母」に似ている。

という意味ではありません。一方でクレヨンしんちゃんの「お母さん＝母ちゃん＝みさえ」のようにスリムであっても、上で述べたイメージをいだく基盤となる状況＝背景＝事情に変わりはありません。

きのう、たまたま電気製品の量販店に、近所の人に連れて行ってもらいました。その人がエアコンを買い替えるので、声をかけてくれたのです。車の運転ができない自分には、助かります。蛍光灯やコンセントなど細々したもので欲しい物があったし、親の介護を手伝ってくれる人が家にいてくれるというので、喜んでついて行きました。

そういえば、以前に同じ量販店で、たくさん並んでいるテレビの画面を見ていたのがきっかけになって、「１人に２台のテレビ」2009-02-09、「人面管から人面壁へ」2009-02-10、「マトリックス」2009-02-11、「こんなマヨじゃいやだ」2009-02-12、「そっくり」2009-02-13と、立て続けにいろんな考えが浮かんできたのでした。

あの時に、

＊ヒトは、１度に１台のテレビ受像機の「画面＝意識＝スクリーン」にしか集中できない。

とか、

＊トリトメのない記号＝まぼろし

なんていう話を、でっちあげてしまいました。それなりに面白かったです。そういう、根も葉もない（※実は、本人は「根も葉もある」と思い込んでいるのですけど）こじつけが好きなんです。

で、その量販店で蛍光灯を買おうとしていたら、近所の人に「ホームセンターのほうが安いよ」と言われて、今度はホームセンターにまで連れて行ってもらいました。きのうは火曜日であまりお客さんはいなかったので、人混みが苦手な自分には嬉しかったです。電気製品の量販店と、ホームセンターで、いろいろなものを見て回ることができました。

家にあるもの以外の、家庭用品や電気製品を目にすると、すごく脳の刺激になります。脳がある種の興奮状態に陥ってしまい、家に帰っても、しばらくその状態から覚めることができませんでした。ふだんは、毎日ずっと家にいることが多いので、刺激が強すぎたのかもしれません。

＊

冷蔵庫の話にもどりますが、やっぱりお母さんに似ていると思えてなりません。でも、これは多分に個人的なイメージの問題ですから、どこかの家のお子さんに、

＊冷蔵庫って、お母さんに似てるよね。

なんて言えば、このオジサン、アホちゃうか？ と思われるのがオチでしょう。下手をすると、あのオジサンとは口をきいちゃダメよ、なんて、保護者の方がお子さんに小声で注意、いや警告しそうです。

で、きのう、さまざまなものを見ていて思ったことは、

＊ヒトがつくるものは、ヒトに似ている。

です。

冷蔵庫は、高度成長時代に、白黒テレビ、洗濯機とセットにされて「三種の神器」と呼ばれたもの１つです。自分はいわゆる「かぎっ子」でしたので、帰宅すると誰もないアパートの部屋のなかで、真っ先に向かったのが、やはり冷蔵庫でした。そばに行くと、安心したのです。

三種の神器は、文明の利器というやつで、高度に洗練化＝進化した「道具」であるため、「ヒトに似ている」というイメージは希薄です。でも、お茶わん、湯飲み、箸（はし）、スプーン、フォークといった「食」に関係のある物たち、椅子、テーブル、机、布団、ベッド、枕などの広義の「住」関連の物たち、そして、シャツ、上着、ズボン、スカート、下着、手袋、帽子といった「衣」に関する物たちをよく観察すると、ヒトに似ています。なかでも、手袋なんて、手と激似です。

器（うつわ）類は、水をすくう時の片手あるいは両手の形に似ています。口をつける湯飲みやグラスには、口があります。箸やフォークは指に似ています。椅子には背も足＝脚もあります。ふっくらとした座布団の感触は、どこかお尻に似ています。衣類は、からだに当てるわけですから、とうぜん、その当てる部分にそっくりにつくられています。

さらに、こじつけをするなら、自動車なんて正面から見ると、顔に見えてしかたがない方、いらっしゃいませんか？ 私がそう言うと、うなずいてくれる人が多いので、言えてるのではないでしょうか。これこそまさに、

＊人工の人面ＯＯ

ですよ。

もっと、こじつけます。機関車や電車も、そうですね。トーマス君とはちょっと違った意味で、ですが。テレビもそうですね。というか、そうでしたね。テレビ時代の初期には、受像機の上部にウサギちゃんのお耳みたいなアンテナが付いていたのをテレビで見たことがあります。

あと、こじつけると、銃なんて男性器に似てません？ ロケットもそうかな。口を開けたポスト、長針と短針が表情を刻々と変えるアナログ時計、先端に毛のついた歯ブラシ、鉛筆やペン（どういうこっちゃ）、チューブ入りのケチャップやマヨネーズ（ぐにゅっと出てくるさまを思い浮かべてください）、ケータイ（？）、ゲーム機のコントローラー、ガラス張りのパチンコ台.....。こじつけが、だんだん苦しくなってきましたね。

＊

話をもどしましょう。

太古にヒトが生活に必要なさまざまな物＝道具をつくりはじめたとき、その物は、身体の一部に直接触れる物だったはずです。文字通り、生活に密着していたにちがいありません。すると、どうしても、

＊ヒトの身体の一部に合わせる

わけですから、

＊身体のある部分に似る

ことになりそうです。

衣類がいちばん分かりやすいと思います。最初は、ただ毛皮、木の皮、葉っぱを組み合わせた物なんかで、からだを覆っていただけでしょう。そのうちに、いろいろ細工をしたり、素材を加工するようになり、身体にフィットするような物たちを、つくるようになったのではないでしょうか。

今述べたことは、ぜんぶ想像ですが、そんな感じだと思っています。

＊

視点を変えてみます。ラスコーやアルタミラの洞くつの壁に描かれた絵のことを、学校で習いました。ウマとかウシとかシカなんかの姿が、描かれていたらしいですね。狩の成功を祈るのだったか、祝うのだったか、忘れましたが、とにかく、あれは「食」と関係があることだけは確かではないか、と想像しています。

単なる「お絵かき」＝「落書き」＝「お遊び」ではなかったのではないでしょうか。あと学校で教わったことで思い出すのは、石器や土器のほかに、土偶や埴輪のたぐいです。前者は道具でしょうが、後者は宗教的な意味を持っていると習いました。

描くにしろ、材料を変形させてつくるにしろ、いっしょくたにして、

＊つくる

という言葉でくくって、あれこれ考えてみたいです。で、でまかせで思うのですけど、

＊「つくる」の基本は、「真似る」である。

と言えるような気がします。

おとといまで、「あらわれる・あらわす」というシリーズの記事を書きつづっていました。後半になるにしたがって、

＊「似ている」

という言葉が、すごく気になりはじめたのです。

＊「同じ＝同一である」

ではなく、あくまでも「似ている」に惹かれるのです。で、

＊「真似る」とは、「似ている」を「つくる」ことである。

と言えそうなのですが、その「似ている」を判断するのは、ヒトの「意識」だと思います。単純化すると、まず、

＊「世界＝他者」を「知覚する」があり、それを脳が「情報」として「処理する」を経て、「意識」が「認識する」。

となります。

きわめてテキトーですが、その線に沿って、話を進めさせてください。申し遅れましたが、このブログは、専門家と呼ばれる人たちのやっている学問ではなく、素人、そのなかでもアホの素人が、楽問＝ゲイ・サイエンス＝「楽しくやろうよ、お勉強ごっこ」をやっております。特に、初めて、このサイトに来ていただいた方には、その点をよろし

くご理解願います。ですので、楽しんでいただく、遊んでいただく、ちょっとあたまの体操をしていただく、そんな感じのサイトだと思ってくださいね。

＊

　で、

＊「似ている」

ですが、これは、ヒトが、とても優秀な五感と、もしもそんなものがあれば第六感をつかって

＊「知覚する」

ではなく、とてもぼんやりとした頼りない存在である「意識」が

＊「認識する」

ものだと考えています。冒頭で、

＊冷蔵庫って、お母さんに似ていると思いませんか？

と書きましたが、あの問いかけに対する、みなさんのご返事は、「うん、似ている」、「えっ？ どこが？」、「いや、ぜんぜん」、「あなた、だいじょうぶ？」、「似てると言えば似ているような気もするし.....」、「変なところに入ったぞ」（※このあとはクリックして他のサイトへ飛びます）といった感じでしょうか。

　つまり、

＊「似ているか」どうかの判断は、ヒトそれぞれ＝個人的なもの＝その時の気分にもよる。

です。言い換えますと、

＊「似ている」かどうかは、「イメージ」の問題である。

となります。実は、この「イメージ」についての話は、前回のシリーズのサブテーマを引きずっているのです。簡単に、できるだけ分かりやすく要約しますと、

＊「イメージ」は、ヒトが「いだく」＝「抱っこする」ものであるため、つい甘やかされ

て、自分勝手でわがままな存在になりがちである。その結果、テキトーで、不安定さを特性とする傾向が見られる。

です。

　このように書くと、「イメージ」の「イメージ」が悪くなります。白状しますが、ちょっとズルをしたから、そうなってしまったのです。かわいそうですから、「イメージ」の「イメージ」を良くしてあげましょう。

＊「イメージ」は、ヒトが勝手に「いだく」ものであるため、テキトーで不安定で、時にはいかがわしく、また、うさんくさい印象を与えるが、テキトー＝不安定＝いかがわしい＝うさんくさいのは、自分勝手でわがままなヒト自身のほうである。

　このほうが、正確な言い方だと思います。「そうなら、最初からそう書けばいいのに」と、お思いになっている方がいらっしゃるでしょう。ごもっともです。でも、今の書き換えですが、これって、わざとやったのです。つまり、

＊「だました」

のです。

　ごめんなさい。「まあ、なんて性格が悪いんでしょう」と、感想をお持ちになった方、これまた、ごもっともです。許してください。理由があるのです。どうか、説明させてください。

　この記事のタイトルをご覧願います。「つくる（1)」となっています。ということは、「つくる」という言葉をテーマにシリーズみたいなものをやるつもりだ、という意味です。で、そのテーマについて書く場合に、このブログでは、ちょっと変なやり方をするのです。

＊記事のテーマの内容を、「記事でつかう＝記事に書く」言葉たちに演じさせる。

という方法＝戦略を取るのです。

　少し話をずらしますが、「つくる」という言葉のつかい方の例として、

＊話をつくる（＝作り話をする）・泣き顔をつくる・笑い顔をつくる・顔をつくる（＝お化粧する）・声をつくる・若くつくる（＝若作りをする）・口実をつくる・嘘をつくる

という一連の用法がありますね。要するに、どれもが、

＊嘘をつく・偽る・ごまかす・だます・でっちあげる・化ける

という行為です。言葉には、「何とでも言える」という特性があり、それは、まさに、たった今述べた、「（ほぼ故意に）偽る・ごまかす」ことなのです。

　で、さきほどの、

＊「イメージ」は、ヒトが「いだく」＝「抱っこする」ものであるため、つい甘やかされて、自分勝手でわがままな存在になりがちである。その結果、テキトーで、不安定さを特性とする傾向が見られる。

を、

＊「イメージ」は、ヒトが勝手に「いだく」ものであるため、テキトーで不安定で、時にはいかがわしく、また、うさんくさい印象を与えるが、テキトー＝不安定＝いかがわしい＝うさんくさいのは、自分勝手でわがままなヒト自身のほうである。

へと、わざと書き換えた＝わざと言い換えた＝要するに偽った＝要するにごまかしたのは、「つくる」という、今回の

＊記事のテーマの内容を、「記事でつかう＝記事に書く」言葉たちに演じさせる。

つまり、

＊「つくる＝故意に偽らせる＝故意にごまかす」というテーマを、そのテーマをつづる言葉たちに「偽らせる＝ごまかさせる＝つくらせる」というふうに演じさせる。

を実践したのです。

　ややこしいですね。なんで、こんなことをするんでしょうね。好きだからなんです、とお答えする以外、申し開きができません。良く言えば、

＊記事に書かれている言葉たちの、表情・仕草・動き・めくばせまでに、目を配ってあげてください。

という願いなんです。悪く言えば、

＊おふざけ

ですが、決して悪意から出るおふざけではありません。たとえ、おふざけであるとしても、本気で＝マジでやっているんです。

　嘘くさく聞こえるかもしれませんが、

＊言葉たちを愛している。

からなんです。誤解を招きやすい表現ですが、この記事を書いているアホは

＊言葉のフェティシスト

なんです。言葉に愛着を持ち、言葉が好きで仕方がないんです。その意味では、ビョーキかもしれませんが、このブログを読んでくださっている方々に、嘘はつきたくないので、正直に告白します。本気です。正気とまでは申す勇気も自信もありませんが、本気です。

＊

　ここまでお話ししたので、付け加えて申しますが、このブログの文章では、

＊○○＝△△＝□□

という具合に、似たような意味の言葉や、ちょっとずれた意味同士の言葉や、場合によっては、正反対の意味の言葉を「＝」でつなぎます。あれも、方法＝戦略＝ビョーキの症状なんです。たった今、ここで話している最中のサブテーマを言葉に演じさせましたが、お気づきになりましたでしょうか？「方法＝戦略＝ビョーキの症状」が、そうです。で、どうして「＝」をつかうのかと申しますと、少しまえのところで書きましたように、

＊言葉には、「何とでも言える」という特性があり、それはヒトが故意に「偽る・ごまかす」さいに、よく用いられる。

ということを、「暴（あば）く」と同時に、話の方向が一方に傾いていったり、意味が固定＝固着＝断定＝「それ以外はなし」＝「これだけが正しい」となるのが、嫌いなので、それを避けようとしているからなのです。

　さらに申しますと、

＊○○＝△△＝□□

と並べることで、言葉に対する自分の愛着やこだわりや姿勢といった、きわめて個人的な考え方＝主張を読者の方々に「体感」してほしいと願っているからなのです。

＊

以上述べたような方法＝戦略は、確かに、ややこしいです。ですので、以前は、ほのめかすくらいに止（とど）めたり、あえて詳しく説明することまでは控えていました。

ところが、プロフィールに載せてあるメールアドレス宛に、複数の熱心な読者の方々から、「読みにくい」「なぜ、『＝』をつかうのかが分からない」「全体的には、言いたいことは分かるので、文章をもっと簡潔にしてはどうか」。といった意味の苦言とアドバイスを頂戴するので、

＊ややこしいけど、何とか分かっていただけるように説明しよう、

と決意したのです。

で、このところ、頻繁に記事のなかで、上述の方法＝戦略を実践したさいに、すかさず説明を加える、という弁解＝言い訳＝一種の種明かしをしているのです。ややこしいですね。くどいですけど、本気なのです。これが自分流の

＊言葉への接し方＝愛し方

だと信じて、マジでやっていることなのです。

＊

きょうは、新しいシリーズの初回であり、また、「偽る・ごまかす」という手段にもなり得る「つくる」というテーマを選んだことでもあるので、あえて、長めに説明＝弁解をしました。

このように、このブログは、読む人によって好き嫌いがはっきり分かれそうな、書き方＝文章＝文体＝「書くうえでのスタンス」を選択しています。こればっかりは、ご理解をいただければ幸いです、としか申せません。

この書き方をやめてしまったら、このブログには何も残りません。何だか、泣き言を述べているようになってしまいましたが、自分としては、自分に正直に書いている結果なので、へこんだり苦しみながら文章を書いているわけではありません。

文章を書くことが、しんどいことは事実です。でも、書くことは大好きです。さもなけ

れば、毎日、長めの記事など書けません。今後とも、よろしくお願い申し上げます。

＊

さて、話をもどします。「似ている」を基盤とする「イメージ」について話していたのですね。シリーズの第１回なので、ここで、このブログでよくつかうパーツ＝道具＝玩具を紹介します。これまでは、３つだったのですが、おとといまでやっていた「あらわれる・あらわす」シリーズの後半で「出てきた」＝「あらわれた」新メンバーである「イメージ」を加えた、４つを紹介します。

以下に挙げる４語は、別個のものであるというより、森羅万象（＝ありとあらゆる物、事、現象）を対象にした「切り口」＝「切り分け方」みたいなものだと考えてください。

１）「表象」:「何かの代わりに「その『何か』ではないもの」を用いる」という、代理＝代行という働き＝仕組みを利用したい場合に使用する。森羅万象が「表象」になり得る。

２）「トリトメのない記号＝まぼろし」or「記号」:「そっくりなものがずらりと並んでいる」and「そっくりなものが他の場所にも数多く存在する可能性がある」and「お母さんのコピーとして生まれたにもかかわらず、お母さんの権威や支配とは無縁で、いわばコピーのコピーとして存在している」という特性を強調したい場合に使用する。なお、通常、「記号」は、購入 or 入手され、消費 or 使用 or 保存され、用が済むと、廃棄＝処分される。森羅万象が「記号」になり得る。

３）「ニュートラルな信号」or「匿名的な信号」or「信号」:「ノイズと熱が常に存在する環境において、「まなざし＝合図＝メッセージ」の発信と受信が、一方的、または双方的に行われる」というメカニズムを問題にしたい場合に用いる。森羅万象が「信号」になり得る。

４）「イメージ」: 個人レベルで、ある物・事・現象・言葉などについて、それと「似たもの」＝「真似たもの」を、ヒトの「意識」が勝手に＝きままに＝テキトーに、「認識する」＝「いだく」というメカニズムに注目したい場合に用いる。「イメージ」には、「何かに似たもの」だけでなく、ヒトが勝手に「捏造（ねつぞう）した」＝「でっちあげた」ものもある。森羅万象が「イメージ」になり得る。

以上の４つは、あらゆるものについて、こじつける＝たとえる＝説明する時につかいますので、冷蔵庫も、お茶碗も、スカートも、この４つを切り口に説明する＝こじつけることが可能です。

たとえば、冷蔵庫は、

１）あるヒトにとっては、文明の「利器」＝「表象」であったり（※この惑星には、冷蔵庫が、かつてのこの国の「三種の神器」の１つであったように、財力の象徴＝ステータス・シンボルである地域がたくさんあるでしょう）、

２）大量生産され、そっくりなものと一緒にお店に並び、購入され、消費され、いつかは廃棄されるという意味では「記号」であり、

３）一人暮らしの高齢者にとっては、食料を保存する機械であると同時に、プレゼントしてくれた孫からの愛というメッセージを担った「信号」であったり、

４）あるアホなオジサンにとっては、それを見ると「かぎっ子」だった過去を、個人的レベルで「何となく＝勝手に」思い出すことから、母親に似た「イメージ」をいだかせる電気製品の１つだったりするわけです。

＊

シリーズ初回のきょうは、いろいろ道草をしましたが、あすもまた道草をしながら（※道草も、このブログの特徴です）、「つくる」について考えていることを、つづっていきたいと思います。

ぜひ、遊びに来てくださいね。お待ちしております。

09.06.04　つくる（2）

◆つくる（2）
2009-06-04 08:46:54｜言葉

ちょっと前の自分の写真を見るのは、恥ずかしいものです。かなり前とか、コドモや赤ちゃんの頃に撮ってもらったものなら、居直れます。3、4、10 年くらい前の写真が、いちばん恥ずかしいです。

このあいだ、親のかかりつけの医院へ、付き添っていったさいに、免許の更新を前日に

したばかりらしい女性の看護師さんが、同僚に新しい運転免許証を見せていました。パンチされて無効となった前の免許証の写真と、更新したての免許に載っている写真とを見比べているみたいでした。

自分は難聴者なのでよくは聞こえなかったのですが、「このお化粧、今じゃできないよね」とか言っていたような気がします。免許証ですから、3 年か、5 年前の写真について話していたのでしょう。で、納得しちゃいました。

よくテレビの歌番組なんかで、ある歌手の過去のヒット曲をメドレーで次々と紹介し、さびの部分だけを聞かせることがありますね。あれを見ていると、特に女性の場合には、

＊服装、お化粧、髪型の変化

が非常によく目立ちます。

ありゃ、あんなに眉が濃い＝太いとか、何てすさまじいヘアスタイルなんだろうとか、あの肩パッドは今は見かけないなあ、なんて驚くことがあります。歌番組だけでなく、バラエティー番組でテレビドラマの一部を再放送する企画なんかでも、その時代の風景＝風俗＝流行が、よくあらわれますね。

で、さきほどの看護師さん同士の会話を間近に耳にして、ああいうテレビの企画を見ていて覚える違和感の正体が、何となくリアルに納得できたような感じがしたのです。

男性の歌手やタレントさんの場合にも、メークや流行にすごく気を使うだろうと想像できます。ただ、一般の男性の場合には、

＊髪型、眼鏡のフレーム、スーツやネクタイの形

に微妙な変化が見られますね。もちろん、お化粧をしない分だけ、

＊年齢

が露骨に顔にあらわれる場合があります。そういう意味では、容姿、特に顔が命の俳優さんなんかは、メークをするにせよ、テレビの画質が良くなれば良くなるほど、「受難」となる方たちもいるのではないでしょうか。

容姿端麗を売りにするのではなく、性格俳優とか、個性派とか、呼ばれている俳優さんなら別ですが、「かわいい」や「美形（※死語ですか？）」みたいに「見てくれ＝見場

（みば）」が命のタレントさんは、うかうかしていると、きのうのご紹介した、

＊「トリトメのない記号」

として、消費され、じきに処分されてしまいます。

＊取り換え可能＝使い捨て可能な「記号」

としての運命をたどらないように努力して、イメチェンや、何かの偶然による「化ける」とか「再ブレーク」で、

＊自己差別化＝特化

をしない限り、「賞味期限」が切れてしまいます。そう思うと、歌手やタレントさんの世界も大変ですね。個人的には、あの種の職業は、

＊きわめて運＝運命＝偶然性に左右されやすい

のではないかと思っています。なぜなら、きのうの記事で触れたように、タレントさんは、見も知らない多数の他人である人たちが、勝手に＝きまぐれに＝テキトーにいだく、

＊自分自身のイメージ（＝１人のタレントさんに対して、多数の人たちが、それぞれ勝手にいだくイメージ）

を相手にしなければならないからです。

　きのう説明しましたように、このイメージというものが難物で、しかも、まことに

＊いかがわしい

のです。もちろん、芸能人として成功し続けるには、自分自身のイメージだけでなく、世渡りのうまさも、重要な要因でしょうけど.....。

＊

　みなさんは、どうですか？ 自分の 3、5、10 年くらい前の写真くらいを見ると、何か

＊恥ずかしい＝気後れがする＝照れくさい＝正視できない

という複雑な心境を覚えませんか？

　自分の場合には、あまり写真を撮ってもらう機会がありませんが、いちおう、運転免許証（※難聴が悪化しつつあり運転はできませんので、身分証明書代わりです）と障害者手帳の写真はありますので、それで数年前の自分と「対面」することができます。確かに、見るのは、とても恥ずかしいし、だいいち、がっくりきます。

　まわりに誰もいなくても、ちょっと正視できません。というか、したくありません。心理的には、

＊トホホ

です。なかには、そういう複雑な思いとは無縁の人もいるにちがいありません。現在の自分の写真、3、5、10 年くらい前の写真、コドモ時代の写真、どれを見ても、何の抵抗も違和感も覚えなかったり、それどころか、うっとりと眺め入ることのできる人たちが少なからずいるだろう、と想像しています。

　いずれにせよ、

＊イメージとは、きわめて個人的なものである。

と言えそうです。

　これも、きのう書きましたが、ヒトは自分自身の外見を、ある程度、

＊つくる

ことができます。お化粧、エステ、ジム、美容整形などの手段があります。また、カウンセリングや癒やしや自己改善といった類のメンタルな方法を用いることで、外側に表れる自分を

＊つくる

ことも可能でしょう。多分、経済的な余裕がないと、難しい手段ではないかとは思われますが、結構なお話だと存じます。

＊

＊ヒトがつくるものは、ヒトに似ている。

ときのう書きましたが、きょうも、きのうに引き続き、

＊つくる

の前の段階である、

＊似ている

に徹底的にこだわってみたいです。

　これを片付けないと、「つくる」に話を移せない気がするのです。「似ている」について考えるさいには、自分自身の実体験や、自分が体感できる経験を材料にするのが、いちばん分かりやすいと思います。何と言っても、世の中でもっとも関心があるのは自分自身であり、もっとも信頼できるのは、自分自身の感性や感覚ではないでしょうか。

＊

　では、質問します。あなた自身のことを、考えてみてください。自分に似たものって何でしょう？

　外見の話です。写真や鏡に映った自分の姿ですか？ 鏡の場合には、左右が逆であることを忘れてはなりません。ケータイのカメラで即、液晶に映し出すことができる自分の映像も、自分に激似なはずです。視点を変えて、親、兄弟姉妹、親戚の人たちのなかにも、自分と似た人がいませんか？ 赤の他人でありながら、自分とよく似ていると言われたことがある人もいそうですね。

　以上は、外見、つまり、視覚的イメージです。

　あと、声があります。家とか、会社とかで電話に出たとたん、相手がいきなり訳の分からないことをしゃべり出し、途中で、「あれっ、あなた、〇〇さんじゃないの？」なんて、言われた経験がありませんか？

　とか、ケータイにかかってきた通話で、こちらが「もしもし？」と声を出したとたんに、「ごめん、ごめん」と相手がとつぜん謝り、続けて「うそー。□□さんに間違えて掛けちゃったと思ったよ」と、液晶に表示されている番号を確かめているらしき相手が言い、さらに「きみって、□□さんと声が激似」なんて失礼な発言を耳にした経験がありませんか？「お父さんと声が似てきたね」と他人に言われて、むっときたと、ある知り合いが言っているのを聞いたのを覚えています。

　そのほか、体つき、背格好、かもし出す雰囲気なんていう、

＊曖昧なものが似ている

と言われることがあります。さらに、誰かと、

＊匂い（or 臭い）が似ている

なんて言われた方、いらっしゃいませんか？ 意味深ですねー。どういうシチュエーションを指すのでしょう？「匂い」に関してそんな会話をした経験がある人がいるのなら、ちょっと、うらやましい気もします。でも、よく考えてみると何の匂いなんでしょう？匂いではなく、臭いなら、嫌ですね。なにしろ、「臭（にお）い」と「臭（くさ）い」は同じに書けるんですもの。

　あと、

＊肌触りや手触りが似ている

もあり得ます。ちょっとやばそうなので、これはパス。みなさん、ご自分で想像なさってください。きっと、楽しいと思います。

　あと、

＊味が似ている

も、あり得ないとは言い切れません。世界には、いろんな人がいますからね。これは、超意味深。というより、こわいですよー。ハンニバル・レクター博士を、思い出しちゃったじゃないですか。

　あと、

＊オーラが似ている

ですか？ 個人的に苦手な分野ですので、これもパスさせていただきます。

　だいたい、出そろいましたよね。これだけあれば、「似ている」を考察するのに、十分だと思います。

＊

　さて、視覚に絞って話を続けましょう。

＊自分に「似ているもの or ヒト」を見て、恥ずかしい＝照れくさい＝何となく気おくれがする＝ぎごちない気がするのは、その対象と自分とを「比較する」「優劣を問う」「ズレを認識する」からである。

と考えられないでしょうか。なかでも、

＊比較する

というのは、両義的＝諸刃（もろは）の剣（つるぎ）的＝「良いところも悪いところもある」と言えそうです。比較されて、こっちが勝っていると思えば嬉しいし、負けていると思えばへこむ、という感じです。

　で、きょう、特にここで問題にしたいのは、

＊ズレを認識する

です。ズレ＝違い＝落差＝差異を、いくつかに分類してみましょう。

１）時間的なズレ：「遠い過去」、「近い過去」、「若さ／老い」がキーワードです。

２）他者とのズレ：「ほんもの／にせもの」、「優劣」が問題になります。

３）場面のズレ：「状況」、「背景＝文脈＝コンテクスト」が重要な役割を果たします。

　以上を順に検討してみます。

＊

★１）時間的なズレ

　これは、冒頭から見てきた過去の自分と現在の自分との落差に、戸惑い、恥ずかしさを感じる心理の原因となります。繰り返しになりますが、

＊「遠い過去」の自分、

つまり、赤ちゃんや幼児期の自分と、オトナ、あるいはほぼオトナである自分とを比較する場合には、

＊「居直り」という「年の功＝厚かましさ＝図々しさ」

の心理が働きますから、あまり、大きな動揺を感じることはないでしょう。動揺するとすれば、幼い時期に、何らかの衝撃的な出来事を、意識的あるいは無意識に経験し、それが

＊こころの傷＝トラウマ

となって、現在、自覚されているか、こころの奥に潜んでいるという状況が考えられます。これは、心理学・精神分析・精神医学が扱う領域なので、深入りはしません。

　他の生き物と同様に、ヒトも年齢を重ねていく存在ですが、ヒトの場合には、

＊「老い」に対し、とてつもなく大きな恐怖を覚える

特性があるように思われます。生き物としては、珍しい心理です。その恐怖に対処するために、医療と経済という分野で、どれだけのお金が動いているかを想像する or 調査することで、その恐怖の大きさが実感できそうです。

　一方、ヒトは、

＊「若さ」に対する恐怖＝「こりゃ、何とかせんとアカんわ」＝「ったく、いまどきの若いやつは.....」

と、

＊「若さ」に対する羨望（せんぼう）＝「うらやましーい」＝「くやしーい」

をいだきます。

　ケータイ、ゲーム、小学生のお化粧に対するオトナのうろたえ振りを観察 or 自省すれば、これも、分かりやすい現象だと思います。なお、この点にご興味をお持ちの方は、ケータイを題材にして、オトナのコドモに対する「ビビり」を論じた「なぜ、ケータイが」2009-01-22 をご一読願います。

　で、もっとも興味深いのは、

＊「近い過去」の自分に対する「恥ずかしさ」

の感情だと考えられますが、これは、

＊一種の「近親憎悪」

ではないかと個人的に想像＝妄想しております。上述の、3、5、10 年くらい前の写真を見るのが、とても恥ずかしいという心理は、

＊「ライバル意識」の変形＝変種

ではないかとにらんでいます。

　つまり、ちょっと前の自分を「ダサい」と罵倒して馬鹿にしたいのです。なぜなら、

＊ちょっと前の自分は「ちょっと若い」

からにほかなりません。さきほど触れたように、ヒトは「老いる」ことを内心ですごく恐れています。その恐怖心を、そらすために、無意識に、「ちょっと前のちょっと若い」自分を標的にして、

＊いじめて気を晴らしている＝気を紛らわせている

のです。ただし、その一方で、「ちょっと前の自分」への嫉妬もあるかもしれませんね。

　また、いずれやってくる「ちょっと後の自分」が「今の自分」を小馬鹿にして見るであろう、という予感を無意識に感じている。そんな複雑な心理が働いていないとも限りません。たぶん、ですけど。

＊

★２）他者とのズレ

　これも、

＊一種の「近親憎悪」

だと想像＝妄想しています。ヒトは誰でも、

＊自分がいちばんかわいい

ですし、

＊世界は自分を中心に回っている

と、無意識、あるいは意識的に感じています。言い換えると、

＊自分こそが「ほんもの」であり、自分に似たものは全部「にせもの」である

となります。ですから、

＊「ほんもの」には、「にせもの」を馬鹿にする＝非難する＝罵倒する、当然の権利がある

と信じて疑っていません。そう信じるからには、結論が、

＊ほんものである自分のほうが、にせものよりも、優秀であり偉い

となるのは当然です。

　個人のレベルで例を挙げると、上述の「声が似ている」と言われてむかつく心理が、身近で分かりやすいと思います。「こんちくしょう」とか、「失礼しちゃうわ」という感じです。この悪態を翻訳すると、「こっちのほうが、いい声だ。声だけじゃない。性格も、頭も、顔も、こっちのほうが上だ」となります。

＊「他者とのズレ」は、似たもの同士のあいだで起こる

わけですから、個人レベルだけでなく、国内の諸問題として、ひいては、世界的規模で頻繁に起こっています。新聞やニュースなどを見ていると、その例は、枚挙にいとまがありません。

　たとえば、この国のある大都市の首長などは、

＊自分の理想とする、自分を中心としたファシズム体制 or 王朝とよく似た政治体制を成し遂げている国家を、仮想敵国として憎悪しています。

　簡単に申しますと、「くやしーい。ボクちゃんも、あんなふうになりたい」という心理です。また、与野党の国会議員にも、同様の心理を共有する人たちは多いです。これも、みなさん、ご想像するなり、ご調査ください。ここでは名指しはいたしません。そういう血の気の多い人たちは、たいてい、威張り腐っていますから、テレビの画面を通しても体感できると思います。なお、蛇足ながら、補足しますと、仮想敵国というのは、たいてい、隣国です。

この点について、これ以上書きますと、「つくる」という、このブログのシリーズが、同じ発音の定期刊行物に似てまいりますので、ここでストップします。

また、その定期刊行物の名にある文字を冠する全体主義的組織を、なぜか連想＝イメージし、気分が悪くなりそうなので、やはり、ここでストップしたほうが賢明だと思われます。とにかく、きな臭い＝生臭い話は、大の苦手なのです。

【全体主義＝ファシズムと近親憎悪の関係について関心のある方には、「最後のとりでを守る」2009-02-25、「続・09 年 3 月 11 日をギャグる」2009-03-11 のご一読をお勧めします。】

＊

★３）場面のズレ

みなさん、究極の自分に似たもの・ヒトとは、何でしょう？ そうです、自分自身です。「そんなの当たり前だろう」、とおっしゃるお気持ちは十分にお察ししますが、それほど簡単でもないような気もするのです。

ヒトは「ワシって何？」とか、「自分探し」というものを、大昔から続けてきたようです。物理学や生物学の最先端の考え方のなかには、

＊「自分」というものが、きわめて曖昧＝不安定＝「テキトーな存在」＝「いかがわしい見方」である

と説いているものが散見されます。

どうやら、生物学的レベルでも、物理学的レベルでも、

＊自分は常に動きつつある＝自分は常に変化しつつある＝自分を同一のものとして特定することはできない

みたいな意見＝見方＝感想＝妄想が、優勢になりつつあるようなのです。ただし、これもまた、この記事を書いているアホの誤解＝思い込み＝曲解である可能性がきわめて高いので、そこのところを、どうぞご了承願います。

＊

で、簡単な例を挙げます。

コドモの場合を考えてみましょう。みなさんご自身の経験を思い出していただくのも、よろしいかと思います。保護者向けの授業参観日や運動会って、嫌じゃなかったですか？ 嫌じゃなくても、照れくさくはなかったですか？ もし、照れくさかったのであれば、その感情です。もちろん、照れくさいどころか、誇らしく感じたというヒトもいるにちがいありません。

ここで強調したいのは、家で保護者といっしょにいる自分と、学校の教室という場にいる自分は、同じというより、似ているのという点です。つまり、

＊異なる場面＝状況＝コンテクストに置かれた自分は、複数である。言い換えるなら、ＴＰＯにより、似ている自分が複数存在するのである。その「自分たち」は、「同一である」というより、「似ている」のである。

と言えそうな気がします。だから、

＊ある人から見て、いつもとは違った「場」にいる自分は、「似ている自分」であるために、恥ずかしいと感じる。

のです。

これは、オトナでも同じです。たとえば、職場で働いている自分、上司から叱られている自分、トイレでひとりでいる自分、酔っ払っている自分、ひとりでこころおきなく眠っている自分を、自分のコドモや配偶者や親や友人や知人に見られて、恥ずかしく思う気持ちを想像 or 思い出してみてください。恥ずかしいだろうと思えば、今、問題にしているのは、その感情です。

今挙げた例ですと、なかには、恥ずかしくない人もいるとは思います。むしろ、自分の働いている姿を家族に見せて、誇らしく感じる人もいるはずです。

肝心な点は、見られてまずいとか、やばいとかは別にして、ある自分以外の人を基準にし、その人によって、いつもとは異なる時と場所と背景＝コンテクスト＝場合＝機会における自分が見られているという状況があるということです。そんな状況を想像してみてください。恥ずかしい、ぎこちなく感じる、ちょっと気後れする。もし、そんな感情をいだけば、そのことなのです。確かに、これはかなり個人差があると思います。

また、「見る／見られる」は、見るほうが見られるほうに感情移入するという側面があるため、たとえば、親が働いている姿を一度も見たことがないコドモが、親が働いているの姿を初めて見たときに、自分に見られている親の気持ちを想像してしまい、一種の気後れや戸惑いやぎこちない感情をいだくということもあるかもしれません。それにも似ています。

いずれにせよ、微妙で複雑な感情だと思います。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

以上見てきた３種類の「似ている」＝「ズレ」は、（Ａ）きわめて優秀な知覚器官によって情報＝データとして知覚され、（Ｂ）次に、その情報＝データをきわめて優秀な脳が処理し、（Ｃ）最後は「意識」という少々ぼけーっとした頼りないものが、勝手に＝きままに＝テキトーに「認識する」という経路をたどります。

その「認識する」の結果が、「イメージ」です。「イメージ」は、ヒトが勝手にいだくものですから、ヒトそれぞれ＝個人差があります。言い換えると、

＊きわめて曖昧でテキトー

ということになります。

ですから、上の３つのズレを説明する言葉たちも、当然のことながら、頼りなげで、曖昧で、テキトーな身ぶりと仕草を演じたわけです。

「似ている」については、これ以上深い入りしても大した収穫は得られないという、トホホな結果となりました。でも、言葉たちがテーマのトホホ振りを見事に演じてくれたという点では、収穫はありました。何ごともプラス思考でいきましょう。

次回は、「つくる」の一種である「フィクション＝話をつくること」へと話をつなげたいと考えています。フィクションもまた、「真似る＝似たものをつくる」が出発点になります。また、あしたも、このサイトに遊びに来てくださいね。お待ちしております。

09.06.05　つくる（3）

◆つくる（3）
2009-06-05 08:40:17 | 言葉

無人島で１人だけで生きるのなら別ですが、ふつうヒトが生きていくうえで、絶対に免れないし避けることができないものがあります。今、自分が考えているのは、医療、法律、天変地異です。ほかの考え方もあるでしょうが、とりあえず、この３つのものに「お世話」になったり、「拘束」されたり、影響を受けずに生きることは、難しいのではないでしょうか。ここでの天変地異は、広い意味にとって、天気と天候も含めましょう。

たとえば、道を歩いていて、急に猛烈な腹痛に襲われて、倒れてしまう。交通事故に巻き込まれてしまう。突風が吹いてきた。あるいは、かなり大きな地震が起きた。今、挙げたような災難に見舞われる可能性は、高いです。その結果として、病院に運ばれたり、警察官に身元を尋ねられ確認されたり、場合によっては、何らかの行政組織とかかわることを余儀なくされる。こうした事態は、拒める性格のものではありません。

この国だけに限定して、話を続けさせてください。

＊仙人、世捨て人、隠者、遁世者、隠遁者、隠棲、潜伏

という言葉があります。それに近い生き方をしているヒトもいます。でも、この国で生きてきた限り、そのヒトには戸籍というものが、あるはずです。その戸籍は、法律によって定められた制度です。戸籍に基づき、戸籍を持ったヒトは、多種多様な司法・立法・行政上の制度とかかわらざるを得ない宿命を背負うことになります。

在日外国人であれば、どこかの市区町村役場で外国人登録をしているか、いったん登録はしたものの、滞在許可の期限が切れて「不法滞在者」となっている場合もあるでしょう。でも、登録の原票は存在するはずです。どこかの国から送られてきた工作員なら、戸籍を「買う」なり、あるヒトの戸籍を「盗む」というケースも考えられます。一種の「偽装」です。

また、

＊「住所不定無職」

と分類されるヒトでも、どこかの役所や役場に戸籍があるのがふつうです。

ところで、

＊孤独死、あるいは、孤立死

という形で最期（さいご）を遂げる方々がいらっしゃいます。また、

＊野垂れ死に、または、行き倒れ

という亡くなり方をされるヒトたちも珍しくはありません。

　こうしたヒトたちに共通するのは、

＊１人である

と

＊人生の最後に、そばに、身寄り、あるいは、知人ないし目撃者がいない

という点です。それでもなお、

＊医療と法律だけはつきまとう＝医療と法律からは逃れることができない

のです。

　具体的に言えば、司法解剖あるいは行政解剖、埋葬、身元の確認、行政・司法機関による書類作成です。さきほど触れた、不法滞在者も、対象となります。身元不明の場合には「身元不明」という言葉で、然るべき処理をされます。例外はありません。話題が暗くなってきましたので、話を変えます。

＊

　みなさん、嘘はどこまで許されるとお考えですか？ 唐突に、漠然とした質問をしてしまいました。ごめんなさい。質問を少し変えます。あなたは、きょう、または、きのう何か嘘をつきましたか？ ついたとすれば、それは、まあまあ許される嘘でしたか？ それとも、かなり罪の意識を感じる嘘でしたか？ その嘘は、たとえば、家族や親しい人を相手に、

＊「.....しちゃった」

なんて軽い口調で白状して、下をぺろりと出して許される程度の嘘でしたか？

＊罪・罪悪感

という言葉があります。罪を辞書で引くと説明されていますが、

１）社会的ルールや道徳などに反する罪

２）法律上の罪

３）宗教的な掟（おきて）を破った罪

くらいに分けられそうです。ほかの分け方も可能でしょうが、以上の分類をもとに話を進めます。

　さて、さきほど、あなたがついた嘘は上の３種類のなかでは、どれに当てはまりますか？　２つくらいにまたがるかな？　とお考えの方もいらっしゃるかもしれませんね。ご存知の方も多いと思いますが、家族間での「盗み」は法律的には成立しません。このことを、かつて初めて知った時には、びっくりしました。

　いい加減なことは書けないので、電子政府のサイトで確認しましたが、要約すると、

＊親族間、つまり家庭内の窃盗（※他人の財物を盗むこと）に関しては、その刑を免除されるという意味のことが、刑法の 244 条に記されている。

とのことです。

　法は家庭に立ち入らないという趣旨らしいです。だから、コドモが親の財布から、こっそりお金を盗んでも、窃盗罪には問われない。でも、そのコドモは、罪の意識を感じるでしょうね。その場合の罪とは、上の１）と３）の中ほどでしょうか。罰（ばつ）を受けることはなくでも、ルール違反なだけでなく、神様か、仏様から、罰（ばち）を与えられそうな気もしますね。

　さきほど

＊掟（おきて）

という言葉を出しましたが、

＊タブー＝禁忌（きんき）

という言葉を思い出しました。多分に宗教的色彩の濃い、禁止を表す言葉です。現在では、宗教とは無関係の社会的 or 共同体内でのタブーの意味でも用いられますね。ここで、かつての記事から、自己輸血＝コピペをさせてください。

＊司法の目的は、人を逮捕することではない。まして処罰をすることでもない。書類を

作成することだ。

＊大切なのは、身柄の拘束や、刑の執行ではなく、書類作り。＝ヒトじゃなくて、紙。

＊すべては、ハンコのためにある。

以上は、「あなたなら、どうしますか？」2009-01-16 からの引用です。続けて、ちょっと長めの引用をさせてください。

＊

★法律とは何でしょうか？「法律」については、いろいろな定義が可能でしょうが、てっとり早く言えば、「権威」だと理解しています。「国家の権威」と言い換えても、それほど的外れではないのではないか、とも思います。そうだとすれば、

やっぱり、ハンコは偉い。

無力な市民は、そうつぶやくしかない。なぜなら、ハンコは「国家の権威」の「表象」だからです。

それが、ハンコが「偉そう」にしている、理由です。「偉そう」は伝染します。ポンポン押すだけが仕事の、役人や官僚に伝染します。要するに、

伝染るんです（＝「うつるんです」と読みます、念のため）。

恐ろしい言葉が出てしまいました。

タミフルなんかじゃ、太刀打ちできませんよ。吉田シゲルの孫も、役には立ちそうにありません。いくらマンガ好きであっても、です。戦車で踏みつぶすほかありません。いや、それでも、無理でしょう。ただでさえ、恐ろしい「表象の働き」（＝表象作用）が、うつるんです。これ以上、ヒトにとって、恐ろしいことが、あるでしょうか？

＊

★から以上までは、「やっぱり、ハンコは偉い」2009-01-17 からの引用です。要するに、

１）法律、掟、ルール、タブーといったものすべては、言葉である。

２）その言葉は、ヒトがつくった＝発したものであるにもかかわらず、ヒトが「何か」の代理人を装って、代弁した形をとっていることが多い。

３）国家の重要な役割の１つは、国民およびテリトリー内に居住するよそ者を、「言葉によって管理する＝書類を作成し記録する」ことである。

４）国家による書類の作成では、ハンコや署名が、「権威」の印、および、「権威」から「権限」を委託＝委譲＝請負＝丸投げされた or 奪った＝勝手に拝借した or 偽造した or 捏造した代理人の印として、その作成された書類の有効性を保証する機能を果たす。

５）官僚主義＝官僚支配＝権威の代行者による「事務＝ほとんどペーパーワーク」が、制度化され、長期にわたって存続すると、事務自体が目的化され、制度は形骸化する。

という点が、きわめて大切な意味を持ちます。

　王様ごっこや、お殿様と家来ごっこや、お姫様と家来ごっこや、こども銀行に代表される「.....ごっこ」ときわめて似ていながら、権力の後ろ盾がありますから、この形骸化は怖いです。違反したり、反抗すると、マジで罰せられます。簡潔に述べますと、

＊反抗 ⇒ 犯行 ⇒ ハンコと番号にいじめまわされる

となります。書類の作成と整理＝ペーパーワークに、番号は欠かせません。拘置所や刑務所に入れられると、名前の代わりに番号で呼ばれるそうです。

　冒頭で挙げた、無人島で１人だけで生きるのなら別ですが、

＊ふつうヒトが生きていくうえで、絶対に免れないし避けることができないもの

のなかに、

＊法律

が含まれるのは、そうした前提に立っての

＊怖い現実

なのです。これは、たぶん、実際に経験してみない限り、実感＝体感できない性質のものだという気がします。

　身近で、それほど深刻ではない例を挙げましょう。自動車を運転していて軽い接触事故を起こして、警察に事故証明書を作成してもらった。夜、１人で歩いていて警察官に職務質問され、最寄りの署へと同行を求められた。他の自治体へ引っ越すさいに住民票

を移動させようとしたら、職員がコンピューターの端末で入力ミスをしたために、申請した本人が訂正を申し出る必要が生じた。納税について、身に覚えのない「お尋ね」を記載された書類が郵送されてきたので、管轄の税務署に出頭しなければならなくなった。裁判員に選ばれたという通知を受け取った。

以上のような場合には、否応なしに、然るべき役所に出向いて、然るべき係の人に会い、然るべき法律に沿って、然るべき措置＝作業を行わなければならないのです。たいていの場合には、ハンコ＝印鑑が必要です。本人の署名でもオーケーの場合も増えてきましたが、やっぱり主役はハンコです。もし、何らかの事務的な手抜かりがあれば、それがどんなに些細なものに思われても、やり直しを命じられます。そうです。

＊命令される

のです。

＊法律とは、命令集＝「『.....しなさい』or『.....してはいけない』のかたまり」なのです。

端的に言って、

＊法律とは、「言葉のかたまり」なのです。

ということは、言葉ですから、温泉やある種の虫のようにわいて出てきたもの＝自然発生したものではないのです。

＊ヒトがつくったもの

にほかなりません。誰が、どのようにしてつくったのかについては、もう何度も引用して、気が引けますが、次のおとぎ話＝紙芝居＝作り話がいちばん分かりやすいと思いますので、再度、コピペさせてください。

＊

★「 ひな壇」とピラミッドは、司法・立法・行政には付きもの。代理、代行、代議士、代表、総代が、うようよ。ハンコぺたぺたのペーパーワーク。このへんが不明の方は、当ブログのバックナンバー、「あなたなら、どうしますか？」2009-01-16、「 やっぱり、ハンコは偉い 」2009-01-17 を参照、願います。面倒な方は、このまま、引き続き、どうぞ。「ひな壇 」は「 虎の威＝衣」とセットで、クラス分け、棲み分けして、暮らすわけ。これが代々続けば、２世、３世、そして、世襲。仲間うちで譲ったり、譲り合えば、天下り、渡り、渡る天下に鬼はなし。

蛇足ながら、「 虎の威＝衣 」は「 虎の位」、ピンからキリまで、枚挙にいとまなし。フェイクファーのパンツから、スマトラ産の超高級品の上下一式の被り物のまで、多岐にわたる。引退後は、民間人をさておいて、真っ先に褒章、勲章までもらえる。ワッペン張って、大威張り。首から下げて、涙腺を緩めるのが、最後のご奉公。なんでこれがご奉公？ 公僕、最後のご奉公？ ここまで来ると、もうめちゃくちゃではないか？ それなのに、庶民が一揆を起こしたり、騒がないのも、究極には「 表象の働き」の奥深さがあるのではなかろうか？ もっと考えてみたいけど、きょうは、それ以上考える暇なし。貧乏暇なし。なぜか、突然、なるほど、

「 タモちゃんのお代理様 」

は、やっぱり言えている、と思う。言えてるどころか、きっと、そうに違いない。「でまかせ 」ではなく、「 言えている 」とか「 きっとそうだ」にしてもいいでしょうか、偶然と必然のオーソリティー（＝ 権威）だったマラルメさん？ ここで権威にすがる自分が、情けない。それはともかく、ヒトよりも、もっともっと偉い存在がいて、ヒトはその代理を務めたいという、願望、欲求、祈り、野望、をもっているのではないでしょうか、マラルメさん？ Ａにはなれないから、Ａの代わりを演じます。Ａみたいな顔をしてみます。Ａの仮面をかぶり、表情をまね、ときにはお化粧もし、かつらも付けたりもしてみます。

どうです、似合うでしょう？ 様になるでしょう？ だって、これだけ化ければ、〇〇様なんて、呼ばれるんですもの。偉く見えるんですもの。いいじゃないの。

という具合に、偉く見えるから、崇め奉られる。ちやほやされる。甘やかされる。

「 どうか、雨が降って豊作になりますように 」「作物が駄目にならないように、大雨が止みますように 」「ニワトリとブタが増えますように 」「 隣村の馬鹿どもが攻めてきませんように」「 今度の戦（ いくさ ）に勝てますように 」「あいつとの賭けに勝てますように 」「 おとうさんの怪我が早く治りますように」「 娘がいいところにお嫁にいけますように 」「亡くなったあとに天国に行けますように 」「 元気が出ますように 」

「お任せあれ。任せとき。だいじょうぶ。ところで、あれは、ちゃんと用意しているかな？ このあいだは、ちょっと少なかったぞよ 」

万が一、でまかせが当たらなかったり、何かとんでもないことが起きて、都合の悪くなったときには、仮面を外し、お化粧を落とし、表情をしおらしくして、かつらもとって、わたしは代理ですと言って責任を転嫁すればいい。または、「あんたの信心がたりんからじゃ 」と、これまた、責任を転嫁すればいい。「代理人 ＝ 代行者 」は、気楽で、いい商売だわい。

これは便利。超便利。魔法みたいに便利。呪術みたいに便利。イッツ・ア・マジック。マジでマジック。マジで絶句。ヒューマニズムよりも、シャーマニズム。コミュニズムよりも、キャピタリズム。デモクラシーよりも、ビュロクラシー。

＊

★から以上までが、「１カ月早い、ひな祭り」2009-02-03 からの引用です。自己輸血＝自己引用ばかりで、申し訳ありません。当ブログは、１巻の絵巻物のように、ブログを書きはじめた頃から、ずっとつながっているのです。「徒然なるままに」というより、「くだくだと」という感じでしょうか。とにかく、つながっています。ですので、ある意味で、エコなやり方が可能です。リユース、リサイクル、継ぎはぎ、という具合です。単なる、無精＝横着＝ワンパターン＝マンネリ＝ネタ切れだ、と言われれば返す言葉もありませんが.....。

今、思い出したのですが、２、３年前でしたか、新聞の第１面か第２面の下にある書籍の広告で、「司法」、あるいは、「裁判」、という言葉と、「再現」、または「フィクション」という言葉がタイトルか、サブタイトルか、解説にあった著作を見かけたような気がするのです。自分には、本のタイトルや解説を読んだだけで、その内容をひとり合点して満足するという、とんでもない悪い癖があります。きっと、それだと思うのですが、司法の世界にも、

＊司法および裁判という制度を「再現」「フィクション」という思考のフレームワーク＝考え方の枠でとらえる

スタンスの学者がいたり流派があるのだな、などという「のん気な＝能天気な＝脳天気な」「想像＝妄想」をした記憶があるのです。この記事を書くのを中断して、ネットでキーワード検索をしてみましたが、どうもうまくヒットしないので、やはり妄想なのだと思います。もっとも、「フィクション」（＝ fiction）には法律用語として「擬制」という重要な意味＝考え方があるので、そちらの方面の専門書だったのかなとも思われます。

＊

いずれにせよ、「妄想」というものは、「イメージ」と同じく、ヒトが個人レベルで勝手にいだくものですから、「妄想」をいだいている本人にとっては、きわめてリアル＝本当＝ほんまものなのです。まさに、坂田利夫さんがよく口にする、

＊「あんた、ほんまもんやから、こわいわー」

的状況なのです。それにしても、

＊裁判はフィクションである

とは、言えてるなあ、と個人的には思います。だって、

＊言葉で、事件を再現する

んですよ。これをフィクションと呼ばずに、何と呼ぶのでしょう。ノンフィクションですか？ ドキュメンタリーですか？ 厳密に事実関係を検証した法的根拠に基づく公文書、あるいは、記録ですか？ どんなに「忠実」だの「厳密」だの「正確」だの「緻密」だの「事実に基づく」だのと言葉を並べ立てても、

＊「言葉」が、自分自身を「言葉でない」と否定することはできない。

はずです。

＊言葉は言葉である。

を否定することができる

＊言葉の魔術師

なら、たくさんいそうですし、哲学史、思想史などの教科書を斜め読みすると、そんな

＊言葉の魔法使い

たちが、実際にいたみたいです。

　言葉は何とでも言えますから、そういう器用なヒトたちがいても、ぜんぜん不思議ではありません。現在ですと、法曹界や検察以外に、グローバルなビジネス展開をしている広告代理店やコンサルタント会社（※ほとんどが欧米に本社があります）などに、そんな魔法使いが多数いるそうです。

　何しろ、そういう企業は最新のメディアやツールやスキルを用いたり、依頼者側が出す資金＝契約金次第では、かなり上層の政治力まで利用して、プロパガンダ＝宣伝＝情報操作を行い、たとえば国家の元首を決める選挙の後ろ盾になったりしている＝裏工作をしていることは、よく知られていますね。ある地域で紛争＝戦争が起きた場合にも、大活躍したというドキュメンタリーのテレビ番組が放映されたり、それを書籍にしたものがベストセラーリストに載ったことを覚えています。

とはいえ、そうした「言葉の魔術師」が存在する「らしい」という「こと＝話＝フィクション」自体が、

＊印刷＝コピー＝複製された記事や書物という形態の「言葉」のかたまり

として、あるいは、

＊「写真」「複製された音声」「テレビ放送の映像・音声」「ネット上に流通する画像・音声」という「再現されたもの」＝「再演されたもの」＝「コピー」＝「複製」

という形でしか、ヒトは「知覚」したり、「認識」する手段＝方法＝戦略を持ち得ないわけです。何でも、そうです。だから、何でも、

＊そう「らしい」

としか言えないのです。

当たり前と言えば、当たり前。驚くべきことと言えば、驚くべきこと。恐ろしいと言えば、恐ろしい事態です。この事態をどう受け止めるかは、もう、例の

＊きままでテキトーな「イメージ」

の問題でしょう。つまり、人それぞれ、カラスの勝手状況です。みなさんは、どう受け止めていらっしゃいますか？ こういうことって、ややこしいですよね。話を変えましょう。

＊

＊ヒトがつくるものは、ヒトに似ている。

と、おとといの記事に書きました。それは、

＊ヒトは、自分の身体や都合に合わせてものをつくる。

からなのですが、その現象をいちばん体感しやすいのが、玩具です。

「きかんしゃトーマス」なんかは、ヒトがつくった機関車という乗物を、キャラクター化しているわけですが、汽車とか自動車って、正面から見ると、ヒトに似ていませんか？ おとといは、冷蔵庫が「お母さん」に似ている、とも書きました。あれこそ、まさに、個人的なレベルでいだいているイメージですから、そうお思いにならない方が圧倒的に多いでしょう。

汽車や自動車の場合には、目や鼻や口がついた形で、キャラクター化され、玩具として製造されたり、絵本になったり、アニメやゲームで映像化されています。多数の人に「共有されたイメージ」と言えそうです。

絵本、アニメ、ゲームですと、コドモは、物語＝フィクションを受動的に受ける側に立ちます。一方で、物体としての玩具の場合には、コドモがその物体を手で持ち、物語＝フィクションを演じる側に立つことになります。

これって、すごい現象だと、個人的には思っています。ヒトが、表象というものの働きを、身体で演じる萌芽だと感じるからです。あすは、その「フィクションの萌芽」について考えていることを、書いてみようと思っています。

ここまで辛抱して付き合っていただいた方に、こころより感謝いたします。また、あす、遊びに来てくだされば嬉しいです。

09.06.06　つくる（4）

◆つくる（4）
2009-06-06 08:33:48｜言葉

また、趣味が１つ増えました。カー・ウォッチングです。カラスの観察ではありません。車のほうです。「また、.....増えました」と書いたのは、前のシリーズを書いているあいだに、赤ちゃんに興味を持ち、赤ちゃんウォッチングが趣味＝楽しみの１つになったからです。赤ちゃんウォッチングは、今も続いています。それに、自動車ウォッチングが加わったというわけです。

きのうの記事の最後のほうで書いたことがきっかけで、やたら車、特に、正面からの車の「顔」を見るのがおもしろくなってきたのです。買い物のついでに、歩道から車道に目を走らせ、

＊「おお、あの顔はなかなかチャーミングだ」「あれは、強面だな」「ありゃー、なんてブサかわいいのだろうか」「ん？ 誰かに似ている」「こいつは、意地が悪そうな表情をして

いる」「How sweet!」「うへっつ！」

なんて具合に、自分の顔を棚に上げて、他人様のオクルマを拝顔するようになりました。ネットで中古車関連のサイトに入って、にやにやしてもいます。ちょっと、いや、かなり不気味ですね。そのせいか、きょう書く記事用の走り書きメモが激減して、困っている最中です。

　とはいえ、だいたいが、

＊即興＝アドリブ＝でまかせ＝なりゆきまかせ＝風まかせ

で、毎日の記事を書いていますので、

＊ま、いっか、

の精神でいきます。

＊

　さて、自動車ですが、真正面から見ると、どうしても人面を連想してしまうのです。目、鼻、口、耳に相当するパーツが必ずあります。髪型まで連想させる車種もあります。会社名や車種名には、まったく関心はありません。その表情だけに惹かれるのです。これって、ひょっとしてビョーキ＝あやういでしょうか？

＊ま、いっか

にしておきます。それほど、おもしろいのです。ちょっと止められそうにありません。

　きのうの記事で触れましたように、自動車の玩具はたくさんあります。本物のミニチュアもどき。自動車や消防車やパトカーやダンプカーの、

＊ほぼ一般化された＝共有化されたイメージ

をプラスチック、木、金属を使用して製造したもの。キャラクターグッズ。というふうに、いろいろありますね。大きさも、幼児が乗れるようにつくられたものから、グリコのおまけよりも小さなものまであります。形も、完全に顔や表情が浮き出ているもの、つまり、

＊人面を模倣したもの

もあれば、

＊あえて人面を模倣する作為が認められないもの

もあります。で、個人的には、後者にさえ、人面を認めてしまう＝見てしまう＝あらわせてしまう＝出させてしまうわけです。言い換えると、

＊イメージの問題であるため、個人レベルの勝手＝ヒトそれぞれ状況になってしまう

わけです。

　オトコの子、オンナの子という区別は、あまり好きではありませんので、以下の話は、そういう区別を前提としているのではなく、そういうふうに玩具がつくられて、販売されて、購入されている、とだけ理解してください。

　どういうことかと申しますと、自動車の玩具は主にオトコの子用、リカちゃん風のお人形さんは主にオンナの子用という、暗黙の了解みたいな区別があるということです。それにちょっと似ていますが、話を進める便宜上、玩具を、

＊乗物、および、無生物

と

＊ヒトに似せた人形、および、生き物、および、架空の生き物

の２つに分けて考えてみます。くどいですが、性差は考慮に入れていないと理解してください。

　大切なのは、

＊コドモが、玩具を手に取って、動かしたり、音声を発することにより、ストーリーや、ストーリーの断片を演じる

ことです。

　あるいは、

＊フィクション＝お話＝物語＝ストーリーテリングや、動き＝ダンス＝仕草＝表情＝シチュエーションを演じる

と言ってもかまいません。こうした「お遊び」＝「戯れ」＝「.....ごっこ」をするということは、たとえ、まだ話し言葉を流ちょうに使用できない乳児や幼児であっても、

＊表象の働き（＝「何かの代わりに「その『何か』ではないもの」を用いる」という、代理＝代行の仕組み）

を

＊学習する以前に体得している

からではないか。そんな気がするのです。

一方で、

＊「体得している」は「学習している」と重なる部分もあれば、重ならない部分もある＝「体得している」と「学習している」とはグレーのグラデーションを成している

のではないか、とも考えています。「学習する」の前に「体得している」があるというのは、個人的には、すごく「衝撃的であると同時に魅力的な〕＝「１つ間違うときわめて危険 or うさんくさい」考え方なのです。このことについては、のちに触れます。

以上のことをまとめると、

＊乳幼児は、玩具を使用することで、表象の働きを身体で演じる。これは、物語＝フィクションを演じる萌芽とみなすことができる。

のではないか、となります。

＊

で、話を少しもどしますが、玩具には、オトコの子用、オンナの子用を想定した、と想像できるものがあります。たとえば、消防自動車の形をした木製の玩具を、親なり親戚の人が男児に与え、金髪で青い目をしたオンナの子の形をした人形を、オトナが女児に与えるケースのことです。

個人的には、オンナとオトコも、コドモとオトナと同様に連続していると考えています。ですので、男児と女児とを、故意に＝恣意的に＝オトナの都合で＝人為的に区別・分類する傾向を助長する風潮には、加担したくありません。

小児科のある医院の待合室なんかに、多種多様な玩具が置いてありますね。ああいう

ところで、乳幼児を遊ばせ、その子が興味や執着を示した玩具を、おうちで与えてはどうでしょう？ その子の感情や意思や好みを、尊重してあげてはどうでしょう？

育児も子育てもした経験もなく、現にコドモもいないアホオヤジが、無責任＝勝手＝テキトー＝アホなことを言うな、と言われれば、返す言葉はありませんが、そう思っています。で、大切なことは、あくまでも、

＊フィクションの萌芽

です。その萌芽のほうが、断然おもしろいです。玩具に限らず、

＊ヒトに似せてつくった人形

については、「１カ月早い、ひな祭り」2009-02-03、「ひとかたならぬお世話になっております」2009-02-07 で、詳しい考察を行っていますので、ご興味のある方は、ぜひ、ご一読ください。

＊

ここで思い出したのですが、旧約聖書の「創世記」では、確か、

＊神に似せて

土（＝アダーマー）から最初のヒト＝オトコ＝アダムをつくり、アダムのあばら骨で最初のオンナ＝エバ（＝イブ）をつくった、と書いてあったと記憶しております。

別に記憶に頼らずに、書棚に収めてある英語と日本語でそれぞれ２種類の「聖書＝ the Bible」を参照すればいいようなものですが、聖書が昔から苦手なのです。恥ずかしい話ですが、「読んだ」ことがないのです。必要に迫られて、必要な個所だけを「調べた」ことはありますが、「読んだ」ことはありません。

愛用の辞書のなかには、「調べた」り「引いた」だけでなく、「読んだ」こともある、と言えるものがあります。でも、聖書は「読めません」。

そんな分際で、西洋の文学や哲学を大学で学んだなんて、いけしゃあしゃあと他人様に言ったり、ブログで書いたりしているのですから、身の程知らずの極致です。それは、若い頃から百も千も承知なのですが、

＊読みたくない

んですよー。読もうとしたことはあります。でも、

＊おもしろくない

んですよー。そんなざまで、マラルメだの、バルトだの、デリダだのと、言ったり、書いたりしてきたのは、ルール違反であることは痛いほど分かっております。たった今、

＊「このいかさま野郎めが」

という、幻聴（※対話するさいには「ゲンチョーさん」と呼んでいます）らしき声が聞こえたような気もします。

　でも、やっぱり、

＊おもしろくないし、読みたくない

んです。勘弁してくださいよ、ゲンチョーさん。これまで、自分はわりと、自分に正直に＝わがままに＝自己中心的に＝やりたい放題に＝きままに＝テキトーに、生きてきたほうだと思っております。だから、やりたくないことは、やらずに、ここまで「生きて＝息て」来ました。ですので、これから先も、できれば、そんなふうに「生きて＝息て」行きたいのです。

　とういうわけで、聖書は、これから先も読まないと思います。

　姑息な言い訳を申しますと、こころを込めずに「聖なる書」を読むなんて、キリスト教の信者および信徒の人たちに失礼だと思います。キリスト教の神様は信じていないので、神様に失礼だとは思いませんが、他人さまには、自分なりの形で、誠意をもって礼儀を尽くしたいと考えております。

　したがいまして、軽々に聖書を読むことは差し控えさせていただきます。ご理解をいただければ、幸いです。えっつ？ 誰も、あんたに聖書を読んでくれなどと頼んではいない、ですか？ 安心いたしました。いずれにせよ、ありがとうございます。

＊

　で、さきほどの記憶に話をもどします。旧約聖書によると、神が、

＊神に似せてヒトをつくった

らしいという点に興味を引かれます。いちばん関心があるのは、

＊どの部分を似せてつくったのか

という点です。形なのか、こころなのか、仕草とか表情なのか、顔だけなのか、といったディテールを知りたいのです。創世記を読めば書いてあるのでしょうか？.....

　とにかく、

＊神に似せた

ということだけは確かなようです。記憶が間違っていなければ、ですけど。

　なぜ、その点にこだわるのかと申しますと、

＊つくることは、似せること＝真似ること、あるいは、コピー（※複製）すること＝そっくりにすることである。

のではないか、に関心があるからなのです。言い換えると、

＊「つくる（作る・造る・創る）」前に、「まねる（真似る）＝まなぶ（学ぶ）＝まねぶ（学ぶ）＝ならう（習う・倣う・慣らう）＝なれる（慣れる・馴れる・生れる・熟れる）」がある。

のではないか、となります。この考え方を前提にすると、上述の

＊学習する以前に体得している

という言い方は、きわめてうさんくさいものに感じられます。今のところは、謎＝不思議＝「どうなんだろう？」としか言えません。

＊

　話を、

＊作品をつくる＝創作する

というヒトの行為に絞ります。あたまに浮かべているのは、広範囲にわたるものでして、

＊言葉による構築物、つまり、小説、詩歌＝韻文、散文、あるいは、実用文、公文書、記

録、報告書など

です。

　こうなると「何でもあり」ですね。言葉で言ったり書かれていれば、ぜんぶ、それはフィクション＝作り話だ、という個人的な思い込み＝信念があるからでしょう。その思い込み＝信念を前提とすれば、簡単に、

＊創作する前に、模倣する＝模作する＝模索する。

とも言えそうです。よく、裁判中に、弁護側が検察側を批判するさいに、検事調書＝検察官面前調書を、

＊検事の作文

と呼ぶことがありますね。あれって、罵倒＝悪態のつもりらしいのです。

　でも、言えてます。というか、検事の作文であることに間違いはありません。検察官は、事件の起きた最中に現場に立ち会わせていないのが普通です。証拠物件と伝聞（＝ほぼ「なあ、そうなんだろ？ そうだと言えよ」）をもとに作文する以外に、調書を作成する方法はありません。ですから、調書が作文であるという点に、何の論理的矛盾もありません。

　きのうの記事のテーマに関連しますが、

＊司法機関・捜査機関はもちろん、お役所の書類のすべては、「雛形＝お手本＝例文」に（or を）「沿った＝踏襲した＝真似た」「作文＝物語＝フィクション」である。「雛形＝お手本＝例文」から逸脱すると、上司からのハンコ＝認証＝了承＝ＯＫはもらえない。その上司は、そのまた上司からのハンコ＝認証＝了承＝ＯＫはもらえない。以下同文が続く。

と言えそうです。

　以上述べてきたことは、「かく・かける（5）」2009-05-17 で、書きました、

＊詩作＝思索＝試作

という考え方にも似ています。つまり、

＊何かを「つくる」にあたっては、何らかの「制約＝枠組み＝約束事＝ルール」がある

ため、それを学習する必要がある。

という、きわめて当たり前のことを指摘しているだけだとも言えます。少し話を変えます。

＊

団体で行う競技である、バレーボールを例にとります。生まれて初めてバレーボールをしようとする人たちがいる、とします。バレーボールのルールブックを入手して、それを１ページめから読みながら、練習をしていく方法をとる人たちもいるでしょう。ボールをつかっての基礎的なテクニックの練習なら、１人か２人でもできないことはありません。

でも、試合を前提とする練習ならば、ルールに沿った人数以上を確保し、できれば、対戦の練習をするのに十分な人数がほしいところですね。いずれにせよ、いいチームをつくるためには、既存のチームの練習や試合を間近にみて、そのチームのヒトたちの動きを真似て、その人たちから手取り足取り教えてもらうのがベストでしょう。

コンピューターを使用したゲームでも同じです。もちろん、器用な人だと、新しいゲームにいきなり手を出し、ちょっといじっている間に、すぐに基本的なルールや操作を覚え、比較的短期間で、徐々に実戦＝実践できるようになっていくこともあるでしょう。でも、たぶん、その人は、その前に、似かよった、または、似ていなくても、同ジャンルのさまざまなゲームをやった実践経験＝蓄積があるにちがいありません。

で、言葉をつかった創作に話をもどします。「かく・かける（6)」2009-05-18 に、俳句を例にとって、創作について説明した部分があるので、そこを自己輸血＝コピペさせてください。

＊

★みなさんは、俳句を詠む場合、まずどうなさいますか？ 今まで俳句を詠んだことのないヒトが、俳句を詠もうとするとき、５・７・５という規則だけをあたまに入れて、いきなり、森羅万象に目を向けるなんてことをするでしょうか？ そのまえに、既存の俳句を読むだろうと思います。

＊俳句は、いきなり詠むのではなく、まず読む。

のです。

和歌であっても、ヨーロッパの言語の定型詩でも、状況は同じだと思います。さらに

言うなら、韻文だけでなく散文でも同じことが言えるような気がします。たとえば、基本的に何を書いてもいい、

＊小説は、小説を読んでから書ける（＝掛ける＝賭ける）。

のです。話を一気に飛躍させますが、ヒトの赤ちゃんは、いきなり言葉をしゃべりません。

＊赤ん坊は、話し言葉を聞いてから話すようになる。

のです。

＊

★から以上までが、引用です。

俳句に限らず、さきほど触れた小説にしろ、エッセイ、歌の歌詞でも、同じことです。つくる＝書く前に、まず、あるお手本を読んで、それから、いろいろな他のお手本を読み続けながら、「じゃあ、そろそろ１つ書いてみよう」なんて感じで、練習、あるいは、いきなり本番に入るわけです。音楽は詳しくありませんが、曲つくりも、似たようなプロセスをたどるのではないかと想像＝妄想しています。

ところで、

＊あの人は、勉強していないのに 100 点が取れる。

という言い方がありますが、あれは正確ではないと思います。基本的に、無から有は生じません。

＊あの人は、１回だけ勉強しただけで 100 点が取れる。

というべきでしょう。確かに、そういう情報処理能力や記憶力を持った人がいます。実際に、見たり会ったことも何回かあります。教科書を１度読んだだけで、その内容を理解したり、暗唱できる人って、確かにいました。そういう人を、そうではない人が、

＊あの人は、勉強していないのに勉強ができる。

などと思い込むのでしょう。ここにも、そういう思い込みだらけのお手本が１匹います。そのアホの経験を振り返っても、「あの人は、勉強していないのに勉強ができる」が、単なる「思い込み＝錯覚＝嘘」、あるいは、単なる「ジョーダンか言葉の綾」であることは

確かなようです。

＊

＊創作する前に、模倣する＝模作する＝模索する。

と、

＊何かを「つくる」にあたっては、何らかの「制約＝枠組み＝約束事＝ルール」があるため、それを学習する必要がある。

については、こんな感じです。ただ、気になることが１つだけ残っています。

繰り返しになって恐縮ですが、この記事の冒頭近くで書いた、

＊

★こうした「お遊び」＝「戯れ」＝「.....ごっこ」をするということは、たとえ、まだ話し言葉を流ちょうに使用できない乳児や幼児であっても、

＊表象の働き（＝「何かの代わりに「その『何か』ではないもの」を用いる」という、代理＝代行の仕組み）

を

＊学習する以前に体得している

からではないか。そんな気がするのです。一方で、

＊「体得している」は「学習している」と重なる部分もあれば、重ならない部分もある＝「体得している」と「学習している」とはグレーのグラデーションを成している

のではないか、とも考えています。

＊

★から以上の部分が、非常に気になります。

簡単に申しますと、ひょっとして、

＊ヒトには、生得的な＝先天的な、フィクション、および、表象の働きを学習するために不可欠な、骨組み＝回路と素子＝器が備わっている。

のではないでしょうか。ここで思い出すのが、「言語能力（linguistic competence）」という考え方＝物語＝フィクションです。またもや、コピペさせてください。

＊

★おそらく、チョムスキーは次のようなことを考えていたみたいなのです。

＊ 森羅万象＝「世界 or 宇宙」⇒ 人間機械＝言語能力 ⇒ 正しい文＝言語運用

ヒトには言語を習得する能力がそなわっている。その能力は、ヒトという種に共通の属性をもっているらしい。その証拠に、ヒトの子（特に乳幼児）であれば、人種・民族・出身地に関係なく、どんな言語でも習得させることができる。その能力を「言語能力（linguistic competence）」と、とりあえず呼ぼう。さらに、ヒトが言語能力（抽象的なもの）を発揮して見えるあるいは聞こえるかたちで表出 or 産出した結果＝話し言葉・書き言葉（見聞きできる具体的なもの）を「言語運用（linguistic performance）」と、とりあえず呼ぼう。みたいな話＝考え方が前提としてあるようなのです。

＊

★から以上は、「「人間＝機械」説（2）」2009-04-24 から引用しました。もっとも、以上は、チョムスキーが大の苦手なアホが勝手に思い込んでいる可能性の高い考え方＝物語＝フィクションなので、チョムスキーに詳しい方が、「チョムスキー様 or 師は、そんなアホなことは考えたことがないぞよ」とおっしゃるのであれば、ご面倒ですが、引用部分の「チョムスキー」を「あるアホ」にあたまのなかで置き換えてください。

話をややこしくしたくないので、「あるアホ」の考え方＝物語＝フィクションでいきますが、個人的には、とても魅力的な＝便利な＝使い勝手の良さそうなお話なのです。この惑星のコドモたち、および、その成れの果てのオトナたち、つまり、

＊ヒトには、共通したフィクションの骨組み＝回路と素子＝器が、生来備わっている。

とするなら、何て、ロマンチックなお話なんでしょう。さきほど、謎であり、うさんくさくもあると指摘した、

＊学習する以前に体得している

と激似ですが、このさい、とりあえず（＝いちおう＝やむをえず＝「ま、いっか」）「ロマ

ンチック」のほうに加担しておきます。

世界中のコドモたちが、いろいろな言語でおとぎ話を聞かされ、はらはらどきどきしたり、時には、しくしく泣いたり、またある時には、うっとりとした目でほほ笑む。そんな光景が目に浮かびます。夢があっていいですね。

＊

と、落ち着いたところで、この４回続いたシリーズも一段落ついたもようなので、４という数字で終わるのはちょっと抵抗があるのですが、「いちおう」打ち止めにします。次回からは、新しいテーマで書きます。

きょうも、ここまで目を通していただいた方に、お礼を申し上げます。今夜、夢の中で、幼い頃に「読み聞かせ」をしてもらったお話に再会できるといいですね。では、また。

09.06.07　テリトリー（1）

◆テリトリー（1）
2009-06-07 08:30:57｜言葉

村上春樹の新刊が、すごい売れ行きを見せています。個人的にはあまり相性のいい作家ではありませんが、どんな本なのか、興味津々です。同じ村上の、村上龍の小説は、かつてはよく読みました。『コインロッカー・ベイビーズ』なんて、愛読書の１冊だと言ってもいいほどです。

村上龍と村上春樹とは、同じ文芸誌の新人文学賞出身です。龍のほうが、数年先にデビューしました。ある年少の知り合いが、２人が兄弟だと思い込んでいたのを知ったのには唖然としました。で、思い出したエピソードがあります。

かつて、ある雑誌で、文壇の話題を扱ったコラムか、座談会形式の記事の連載がありました。村上龍が文芸誌の新人賞と芥川賞とをデビュー作でダブル受賞して、何年か経ったころの話です。受賞作の『限りなく透明に近いブルー』の売れ行きは、事件と言って

いいほど驚異的なものでした。村上龍はペンネームで、本名は村上龍之介。芥川龍之介にちなんで名づけられたと聞いた覚えがあります。

　で、その雑誌で、村上春樹のデビュー作について、ある作家が触れたさいに、作品の批評・評価をそっちのけにして、

＊とにかく、あの名前をどうにかしたほうがいい

といった意味のことを発言していたのです。

　正確には覚えていないのですが、確か、その作家は、村上春樹という氏名をペンネームだと勘違いしていて（※ネット検索するとペンネームだとする説もありますが、ここでは本名として話を進めさせてもらいます、どっちでもいいんですけど.....）、当時は「押しも押されもせぬ大型新人作家」だった村上龍の「村上」と、当時有名人および俳人でもあった（＆でもある）、ある出版社の社長の名前「春樹」をミックスしたと思い込んでいたみたいなのです。そこで、「おふざけは止めたら？」の乗りで、上の発言が出てきたのではないかと思っています。

　今、思うと、笑い話ですね。その発言をなさった芥川賞受賞作家の氏名を挙げるのは、ご本人の名誉のためと、こちらの勘違い＝思い込みの可能性があるため、控えさせていただきます。苗字が両村上氏と同様、イニシャルがMであるとだけ、書いておきます。なお、その雑誌は廃刊 or 休刊になったはずです。

　Mさん、村上春樹が

＊世界の Haruki Murakami ＝ Murakami Haruki

となった今、人生の汚点とは言わないまでも、決して名誉ではない過去のエピソードをほじくり出して、ごめんなさい。

＊

　きょう、テーマにしたいのは、たった今話題にした

＊名前

です。

＊ペンネームやハンドルネームや偽名やあだ名も含んでの名前

です。むしろ、そうした本名以外の名前について書いてみたいのです。

　ちなみに、このブログのプロフィールにある、パリス・テキサスはいわゆるハンドルネームです。ご存知の方も多いかと存じますが、

＊ヴィム・ヴェンダース（※ Wim Wenders）

が監督した、

＊ Paris, Texas（文字通りには、米国の「テキサス州、パリス市」という意味ですね）

から取りました。大好きな映画です。邦題は

＊「パリ、テキサス」

ですね。

　あれって、誤解を招きやすいタイトルです。自分も最初、邦題を雑誌か何かで目にしたとき、そのタイトルにつられて、勝手にストーリーとイメージを膨らませてしまいましたもの。フランスのパリと、米国のテキサスに別れて住む、わけありの２人の物語か？うむうむ、なんて。

　でも、邦題のイメージの喚起性＝妄想を喚起するパワーには、感心し、密かに気に入ってもいるのです。「正しい」「正しくない」、「ほんもの」「にせもの」という２項対立が嫌いな自分は、「悪役」のほうの＝疎外されているほうの、いわゆる「正しくない」「にせもの」に加担したくなるという、習性があるみたいです。

＊

　で、

＊ペンネームやハンドルネームや偽名やあだ名も含んでの名前

ですが、分類の仕方次第では、

＊固有名詞

とも言えます。

＊名は体を表す ＝（ 名＝実体 ）

とか、そのほぼ逆バージョンの

＊名は実（じつ）の賓（ひん）＝（ 名（誉）＜実際の徳 ）

なんて慣用句がありますね。

　とかく、名前はもめごと＝トラブルのもとにもなります。ご存知のように、シェークスピアの劇『ロミオとジュリエット』は、キャピュレットという名前の家の娘ジュリエットと、モンタギューという名前の家の息子ロメオが、名門でライバル関係にある両家の板ばさみになるという悲劇です。例の有名なバルコニーのシーンで、

＊ What’s in a name?

ではじまる名セリフをジュリエットが口にします。「名前が何だっていうのよ。バラって呼んでいるものを、別の言葉で呼んだって、いい香りがするのは同じじゃん」と嘆くのです。

＊

　そのほか、事務所を移籍したタレントの名前（芸名）を、その事務所の別のタレントが使用して、裁判沙汰になったなんて話もありました。

＊ブランド＝商標＝トレードマーク、商品名、作品名

＊著作権、商標権、特許権を含む、知的財産権

という具合に、現在では名前は法律と密接にかかわっています。知らないうちに、自分が名前がらみのトラブル＝事件＝もめごとに巻き込まれる公算は大だと言えます。いったん、トラブルの当事者となれば、

＊ What’s in a name?（直訳：名前のなかに何があるというの？ 意訳：しょせん、名前なんてただの言葉。中身は空っぽじゃないの。）

という具合に、受け流すわけにはいきません。

＊ name には、きわめて大きなものが含まれているから、要注意だ。

と言わざるを得ません。まさに、「なめ」んなよー、です。で、まず、各種ある名前のなかでも、

＊商標

について考えてみたいと思います。横着を決めこんで恐縮ですが、ここで、長めの自己輸血＝自己引用＝コピペをさせてください。

＊

★特に過去 10〜20 年間の科学技術の発展は、「書く」と「文字」の形を飛躍的に広げました。これから先も、その範囲はさらに拡大するでしょう。とはいうものの、基本は、

＊しるす・しるし

ではないかと思っています。「しるす・しるし」の語源は、手元の辞書を引いても分かりません。こういう場合、きのうも書いたように、素人は、

＊「今、ここにある」ものに注目し、手もちの知識と情報で間に合わせる

という方法も取れるわけです。気取っていえば、クロード・レヴィ＝ストロース「印」の「ブリコラージュ」もどき。これって、カーネル・サンダースおじさん手製のフライド・チキンっていうのと、似た響きがありませんか？ ブランド（＝商「標」＝焼「印」＝烙「印」）ぽいという意味です。

ちなみに、レヴィ＝ストロースという、フランス式の発音を英語風に言えば、リーバイ・ストラウス、つまり、リーバイスという商「標」をもつ会社名＝創業者名になります。ユダヤ系です。いずれにせよ、もちろん、ほかの選択肢もありそうですが、身の程をわきまえ、無精者は無精なやり方で楽問します。

「正しい」vs.「正しくない」ごっこを職業としているわけではないので、「正しくなくていいんだよ」or「正しくなくていいじゃんか」のスタンスでいく、という意味です。

で、思ったのですが、辞書で「しるす・しるし」のあたりを見ていたら、「しる・知る・領る・痴る・汁」なんていうものもあって、そのうちの

＊「しる・知る・領る」

に言い知れぬ魅力を感じ、その項を読み耽っているうちに、糟汁（かすじる）を口にしただけで足元がふらつくほどの下戸である自分が、その魅力に酔い痴れてしまったのです。あとは推して知るべし。神のみぞ知る。知らぬが仏。Don’t be silly. ＝ silly ＋ ass ＝ serious（「なぜ、ケータイが」2009-01-22 の自己パクリです）というわけで、マジで、

＊「これって、もしかして、つながっているのとちゃうか」

と思い込んでしまったのでした。どういうことかと申しますと、辞書によれば、

＊かつて、「しる・知る・領る」とは、何かを目にしたときに、「これは全部、わたしのものだ。わたしにまかせとき」と主張する、という意味だった。

ようなのです。

　実に欲深くてジコチュー。いかにもヒトらしい。人間らしい。ヒューマン（human）かつヒューメイン（humane)。この発見＝見解には、少々、不満（「ふまん」）はあるが、犬のフンを「踏まねー」でも済みそうだ。こりゃあ、ウンがいいワイ。ハウ・ラッキー・アイ・アム！ ＝ワイはなんてウンがいいんや。きっとそうだ。そうに違いない。間違いない。言えてる。言えすぎ。お家（おうち）はやっぱり杉で建てるといい――。

　簡単に申しますと、「ワイ＝私＝わたくし」ならぬ、ワンちゃんやネコちゃんの

＊マーキング行動

を思い出したのです。

＊おしっこ（＝「しる・汁）をかける（＝「かける」）

ことで、「ここはわたしのテリトリー」と主張＝意思表示する。ネコちゃんの場合には、おしっこ（＝「かける」）以外に、あちこち、

＊「引っ掻く」＝「かく」

こともあります。いずれにせよ、「おしっこ」が出てくるくらいだから、辞書に「知る・領る・痴る」といっしょに並べてあった

＊「汁」

も、つなげて、仲間に入れてやっても、罰は当たらないのではないか。そうすると、おやおや、ワラ・コインシデンス＝ What a coincidence! ＝「何という偶然であろうか！」となります。駄洒落を通り越して、ばればれのヤラセですね。牽強付会（けんきょうふかい）とも言いますよね。はい。

　で、念のために、

＊マーク＝ mark

を英和辞典で調べてみたのです。図星でした。楽しみは独り占めしたくないので、みなさん、中型以上の辞典で、mark を引いて、そのいろいろな意味を斜め読みし、語源の部分にちょっとだけ目を通してみてください。やっぱり、ヒト＝人間様も生き物のはしくれだったのです。文字通り、お里が「知れた」わけです。

＊テリトリーを持ちたがるし、いったん持ったと決めたなら、ぺぺっと唾をつけて、自分のものだという「しるし」をつけておきたい。

＊

★から以上までは、「かく・かける（4)」2009-05-16 からの引用です。

もっとも重要な部分は、

＊かつて、「しる・知る・領る」とは、何かを目にしたときに、「これは全部、わたしのものだ。わたしにまかせとき」と主張する、という意味だった。

と、

＊マーキング行動

つまり、

＊おしっこ（＝「しる・汁」）を、かける（＝「かける」）

と、

＊しる（＝知る・領る・痴る）を、かける（＝掛け算する・一か八かで賭ける・欠ける）

という掛詞（かけことば）＝ダジャレ＝オヤジギャグです。しかも、それに根拠があるということになると、只事と済ますわけにはまいりません。きょうから始めようとしている「テリトリー」シリーズは、以上の引用部分がきっかけとなったものです。

ヒトは、ワンちゃんやネコちゃんときわめて近しい＝親しい行動をとって、物や土地やヒトに名前をつけたり、開発した商品や製品をもとにブランド＝商標（※「標す」行為）を立ち上げたり＝構築したり＝登録したりしているようです。こうしたマーキング行動を束ねる言葉として、

＊テリトリー

をシリーズのタイトルにした次第です。

＊

　で、テリトリーは、日本語の

＊縄張り

に相当しますが、何だか品のない響きをお感じになりませんか？ まだ、

＊領分

のほうが、お上品に聞こえません？ とはいうものの、よく考えてみると、そもそもテリトリーって、「品のない」ものではないか、もっと率直に言うなら、

＊「はしたない」「見苦しい」「厚かましい」「ジコチューである」「迷惑である」.....

と、悪態のオンパレードみたいに、次々とネガティブな言葉やフレーズが、あたまに浮かんでくるのです。「テリトリー」などと外来語のオブラートに包むのではなく、「縄張り」でいいのではないか、とも思えてくるのです。

　一方で、ワンちゃんやネコちゃんや、その他の生き物たちのマーキング行動やテリトリーつくりには、そうしたネガティブな印象をいだきません。

＊身の程をわきまえている

ように感じられるからです。また、

＊一定の線を越えないという、おそらく本能的なつつましさ

も感じられます。

　正直申しまして「本能的」というと、何やら「はあはあ」と息を荒くしているさまが目に浮かんで、「えげつない」というか、ネガティブなニュアンスを感じなかったわけではありません。でも、反省＝自己批判した今では、「本能的」とは、「きわめて自然体である」、または、「自然の摂理に忠実である」のではないか、とさえ思えてくるのです。

おそらく「本能が壊れた」ヒトという種のほうが、むしろ、変だ＝ヤバい＝あやうい＝「危険だ！」なのではないでしょうか。それは、ヒトの過剰とも言えるテリトリーの「拡大」現象、並びに、とちくるったとしか言いようもないヒトのマーキング行動が、現時点で念頭にあるからに他なりません。

ヒトに対して、ものすごく好意的な見方をすれば、かわいそうに、

＊ヒトは脳内でズレが起きたために、ズレまくっている

とか、かわいそうに、

＊ヒトは本能が壊れたために、壊れまくっている

とか、かわいそうに、

＊ヒトは、狂わないために必死に狂っている

とか言えそうですが、いやしくも「 homo sapiens ＝ 知性を備えた人 ＝人間様」と自称するのなら、そのような「心神耗弱者云々」的な弁護はやめましょう。

要するに、この惑星で、

＊ヒトは、やりすぎている

のではないでしょうか。そう申し上げたいのです。もちろん、自分を含めての話です。棚に上げたりはしません。脇に置くどころか、ど真ん中に据えて、この問題を論じる覚悟でおります。ですから、お説教をしているなどとお取りにならないことを願っています。みなさん、ごいっしょに、考えてみませんか。

＊

21 世紀に入り、10 年ほどになりました。ヒトという種（しゅ）にとってのさまざまな問題が、とりわけ、去年の後半あたりから「見える化」しはじめてきているのを感じます。

もう、メディアでのお決まりの文句になりつつありますが、地球温暖化、金融危機・信用危機が発端らしきグローバルな大不況、この惑星のリミットを越えた人口増加、いわゆる文明の衝突、個人レベルおよび国家・地域レベルでの貧富の格差、資本主義経済・市場経済への懐疑、ミツバチの世界的規模での激減という不吉とも言える現象.....といった問題が、この数年、いや数十年単位で解決できそうだとは、とうてい考えられな

いのです。

　その

＊根っこに、ヒトのテリトリー意識、つまり、マーキング行動がある

というのは、言いすぎ＝杞憂＝取り越し苦労＝妄想＝戯言＝危険思想＝ビョーキでしょうか？

　英語に、

＊ doomsayer

という単語があって、縁起でもないことをよく口にする＝場をシラケさせる＝せっかくのいい雰囲気やお楽しみをぶちこわす＝へそ曲がりで偏屈でクラい性格の人を、非難するさいに、よく用いられます。どうやら、そんなレッテル＝ラベルを貼られそうなことを書いています。せっかくの日曜日に、不快な気持ちになられた方も、いらっしゃるに違いありません。ごめんなさい。話題を変えます。

＊

　みなさん、ご自分の「氏名」をお好きですか？ 苗字と名前の両方を含めての話です。満足していないとしても、こればっかりは、家庭裁判所の判断を仰ぐ以外に、方法はないみたいですね。今もその傾向が続いているのかもしれませんが、一時期に、すごく読み方の難しい名前（※苗字ではないほうです）をお子さんにつけることが流行っていた記憶があります。

　あれは何年くらい前でしょう？ ある時期にかなりエスカレートして、今では徐々に収まってきているように感じるのは、自分だけでしょうか。現在の中学生前後にまたがる年齢のコドモたちに多い、という漠然とした印象があります。間違っていたら、ごめんなさい。新学期に教師が苦労するのではないか、などと余計な心配をしてしまいます。

　このブログでは、感字、当て字大好き、というスタンスをとっていますので、抵抗はないのですが、「オジサンの老婆心＝オジンバ心」が働くのも事実です。お子さんご自身が苦労することもあるんじゃないかなあ、という感じです。その年代のお子さんたち、あるいは、その親御さんたちと接する機会がほとんどないので、実情は知りませんが、やっぱり「オジンバ心」がしゃしゃり出てきます。

＊

ここでまた、このブログ恒例の、

＊記事のテーマやサブテーマを記事で用いる言葉に演じさせる

という、言葉のお遊び＝アホ芸＝ア・ゲイ・アート＝「愉しき何とかごっこの１つ」を、やってしまいました。

自己解説＝自己注解＝自己注＝「ジコチュー２世」をします。最近は、新シリーズの初回に、「How do you do?」＝「はじめまして、このブログでは、こんなアホやっています」という意味で、あることを紹介しております。万が一、ご興味をお持ちになった方は、「つくる（1）」2009-06-03 を、お読みください。「このブログは何だかヤバそうだな」とお感じの方は、パスして結構です。その代わり、今、ほかのサイトに、ひゅーっとお飛びにならないでくださいね。

で、何をしたのかと申しますと、今、話題にしているのは、

＊名前をつけること、つまり、ネーミング

ですよね。もっとも、お子さんに、ちょっと変わった漢字の読み方をする名前をつける話ですけど。で、たった今、

＊「オジサンの老婆心＝オジンバ心」

なんて、言葉を書きました。これって、正確に言えば造語なんですが、一種のネーミング＝名付けと言えないこともないと存じます。で（※「で」はこのブログの口癖です、初めてこのサイトに訪問された方に、How do you do?）、

＊ネーミングをサブテーマにしながら、「オジンバ心」というネーミングされた言葉にサブテーマを演じさせた

のです。ややこしい＝込み入っている＝アホみたい。でも、これ、本気でやっているのです。正気だと言う自信も勇気も、まったくありません。とはいうものの、本気なのです。これが、

＊自分なりの言葉の愛し方＝接し方

なのです。

「やっぱ、ここから出るわ」とお思いの方、もう少し我慢してください。で、こういう新語のようなものが出来ちゃった場合には、いちおう、ググります。ちゃんと“オジンバ

心” みたいに “〇〇” でくくります。

＊「 “オジンバ心” との一致はありません。」

と出ると、やっぱり嬉しいです。ちなみに、“オジンバ” だけだとヒット数が出ます。つまり、「使用中＝ occupied 」です。

　以前に、重度の抑うつ対策の一環として、

＊ “西松する”

なんて、アホな言葉をつくった時の名残が、まだググれますので、お時間のある方はお試しください。

＊

　で、実は、話はこれだけではないのです。この記事のメーンテーマは何でしょう？ タイトルにある

＊テリトリー

ですよね。で、よく考えてみると、“オジンバ心” にしろ、“西松する” にしろ、マーキング行動を「いけしゃあしゃあ」とやっているではありませんかー。つくった言葉に、ぺっぺっなんて唾をつけているんです。散歩中のワンちゃんが、気になる木の根っこにおしっこをするのと同じです。

＊ヒトは、やりすぎている

＊根っこに、ヒトのテリトリー意識、つまり、マーキング行動がある

と偉そうに書いたばかりのアホが、その「やりすぎ」と「テリトリー意識」と「マーキング行動」を、

＊自分なりの言葉の愛し方＝接し方

なんて書いた直後に、愛（いと）しき言葉たちに演じさせているのですよ。とんでもないとお思いになりませんか？

　でも、みっともないと重々承知しながら、言い訳＝弁解させていただきますと、これって、いちおう、

＊このブログの戦略＝方法＝企み＝お遊び＝おふざけ

なのです。

　ややこしいとは存じますが、こういうことを、本気でやっているのです。なんで、そんなアホなことをやるのかと尋ねられれば、「好きなんですよー」とか、「アホだからなんですよー」としか、お答えできないのです。

　少しかっこうをつけて弁解しますと、書かれている言葉たちが、「おまえら、自分たちを棚に上げて偉そうなことを言うんじゃない」と言われないように、言葉たちに語っているテーマを演じさせることで、テーマを棚上げしないようにかばってやっているのです。自分の書いた言葉たちが、いとおしいのです。

　とはいうものの、ふだんは、こんな、オヤジギャグのみっともない種明かしなどせずに、みなさんの目ざわりにならないように、「お遊び」は、ひっそりとやりますので、どうか、ご安心ください。えっつ？「ぜんぜん、安心できない。ヤベーよ、このブログ」、ですか？ そこのところを、どうか、大目に見てくださいませ。

　シリーズの初回ですので、ＰＬ法＝製造物責任法を遵守し、「当ブログの使用上のご注意」を申し上げた次第でございます。あっつ！ もう１つ、お断りしなければならないことがありました。平均して、このブログの記事は長いですので、みなさんの目に負担をかける恐れがあります。レイアウトを工夫して、＊のついた行だけを、拾い読みするだけでも、ほぼ（※あくまでも「ほぼ」です）全体の意味は取れるようにしてあるつもりなので、どうか、お試しください。

　よろしければ、あす、またこのサイトに遊びに来てくだされば、嬉しいです。テーマは、「テリトリーとしての名前」みたいになる予定です。お待ちしております。

09.06.08　テリトリー（2）

◆テリトリー（2）

2009-06-08 08:48:09｜言葉

あなたは村上春樹を知っていますか？ と尋ねられたとします。その時には、たぶん、すかさず「もちろん」と誇らしげに、あるいは、「馬鹿にしないでよ感覚」でお答えになるのではないでしょうか。

では、次の質問だったら、どうお答えになりますか？ あなたは村上春樹さんを知っていますか？ ちょっと、間を置いて「ええ」とか、「まあ」とか、返事をなさる方がいらっしゃっても、おかしくはないのではないか、と想像します。「もちろん」と即答するには、ためらいがありませんか？

つまり、「さん」をつけたことにより、

＊個人的に知り合いである

という意味にも取れる、と申し上げたいのです。英語の

＊ know

でも、同様の混乱が起こる可能性があるみたいで、

＊ know ～ by name（sight）

とすることにより、「（名前だけを）知っている」「（顔だけを）知っている」と、正確さを期する方法がありますね。

ちなみに、英語の know には、聖書でつかわれている、ある特殊な意味もありまして.....。おとっとと、話が脱線しそうになりました。こちらの意味のほうは、ご面倒でも辞書でお調べください。Oh, no! なんて、面倒くさがらずに、よろしくお願いいたします。一方で、I know, I know! などと、にやにやしながら叫んでいる方も、いらっしゃるに違いありません。

＊

で、きょう、問題にしたいというか、考えてみたいのは、その know、つまり、

＊知る・知っている

という言葉なのです。

英語の know の語源が、ほぼ「知っている、知る、知らせる、知覚する」どまり、なの

に対し、日本語の「知る」の場合には、

＊かつて、「しる・知る・領る」とは、何かを目にしたときに、「これは全部、わたしのものだ。わたしにまかせとき」と主張する、という意味だった。

となることは、きのうの記事で書いたとおりです。つまり、「汁＝しる＝おしっこ」を引っ掛けるワンちゃんやネコちゃんなどの、

＊マーキング行動＝テリトリーつくり＝縄張りつくり＝まったりした仁義なき戦い

と同じ行動らしいのです。ただし、ヒトという種（しゅ）についていえば、

＊「まったりした＝本能という身の程の枠内での＝つつましい＝ごく自然体な」仁義なき戦いではなく、「マジで怖い＝常軌を逸した＝とてつもない＝過剰きわまる＝もう超ビョーキとしか言うほかない」仁義なき戦い

みたいなのです。

　しかも、そうした尋常ではない事態をヒトがあまり意識していない、危機意識がきわめて希薄であるようだ、と言えそうなんです。これって、かなり、いや大問題ではないでしょうか。

　で、思ったのですが、この

＊「マーキング行動＝テリトリーつくり」と、「名前＝名づけること」は、密接にかかわっている。

という気がします。

　このあたりの事情については、屁理屈をこねるより、おとぎ話＝紙芝居＝アレゴリーを利用して、ほのめかすように訴えるほうが、分かりやすいと思われます。で、これから、ちょっとした馬鹿話をしようかと考えております。紙芝居をご覧になるつもりで、気楽にお読み願います。

＊

★な、いいだろう？

　大昔のことです。尻尾のないおサルさんたちが、たくさん森に住んでいました。なぜ、

森に住んでいるかというと、手先がとても器用で、木登りや、木から木へと飛び移ったり、枝にへばりついた木の実をとったりするのが得意だったからです。その手の器用さは、木登りが上手な、クマさんや、リスさんたちとは比べものにならないほど、すごいのです。尻尾のないおサルさんたちのなかには、小枝や、葉っぱを細工するものまでいました。

その尻尾のないおサルさんたちのなかで、体毛が薄く、あんまりぱっとしない感じの種類のグループがいました。手先は抜群に器用なのですが、力がとても弱くて、おとなしく、またうじうじした性格なので、ほかの尻尾のないおサルさんたちや尻尾のあるおサルさんたちから、かなり馬鹿にされていました。

そのうだつのあがらない種類の尻尾のないおサルさんたちのグループに、変なことが起きました。馬鹿にされてグループのメンバーの数が減ってきたのですが、その残ったメンバーたちが、やたらずるいのです。それにすることなすことが、とっても変なのです。やることが変で、しかも、ずるいメンバーの血を引くものたちだけが残ってしまった。そんな感じです。「ずるい」と「賢い」は似ています。「ずる賢い」なんていい言葉もありますね。どうして、そのうだつのあがらない種類の尻尾のないおサルさんたちを、このお話で「ずる賢い」と言っているのかと、不思議に思っている方もいらっしゃるにちがいありません。

その理由は、さきほども少しお話ししましたように、このうだつのあがらない種類の尻尾のないおサルさんたちが、ちょっとというか、そうとう変だったからです。ほかの種類の尻尾のないおサルさんたちや、尻尾のあるおサルさんたちや、おサルさん以外の生き物たちに比べると、することなすことが、どう見ても変なのです。ふつうじゃないことばかりするのです。ちなみに、なぜ、尻尾の「ある」と「ない」にこだわるのかというと、一般的に「ある」ほうより、「ない」ほうがずる賢いからです。からだも大きいです。英語で尻尾の「ある」ほうをモンキー（monkey）、「ない」ほうをエイプ（ape）といって、区別するくらいです。たぶん、趣（おもむき）がちがうんですね。

さて、うだつのあがらない種類の尻尾のないおサルさんたちの、変な行動のなかでもいちばん変なのは、何やら口なかでもごもごやることです。木の実や草の実なんかを食べている音とはちがうのです。その変なもごもごを仲間同士でやりあって、森のなかでのいろいろなルールに反することを、はじめるようになってきたのです。前代未聞というやつです。どうやら、もごもごは、仲間うちの合図のようなのです。その合図によって、かなり込み入った連絡をとれるみたいなのです。

もごもごによって、連携プレーをして、ほかの生き物たちの食べ物を横取りする。もともと手がすごく器用ですから、連携プレーで、棒切れをつかって、ほかの生き物たちをいじめたり、殺しちゃう。そのうち、石をつかったり、土や泥をこねて悪さをしたり、わざと森で火事を起すまでになりました。火は、ほかの生き物たちが、もっとも苦手と

するものでした。どうやら、その火を手なずけはじめたようなのです。１つ忘れてはならない、大切なことがあります。もごもごをするようになってから、このグループのおサルさんたちの外見に大きな変化があらわれたのです。どういうわけか、恥しがりやさんになっちゃったんです。

もともとが、このグループのおサルさんたちは、体毛が濃いほうではありませんでした。ほかの尻尾のないおサルさんと並ぶと見劣りがする。ぱっとしない。華奢（きゃしゃ）。そんな感じだったからかどうかは分かりませんが、もごもごがはじまった頃から、からだ、特に腰のあたりを、覆うようになったのです。これも、森のルール違反の１つです。木の葉や、枯れ草をつないだり、半端じゃなく器用な手先を利用して草木の茎なんかを編んで腰みのみたいなもので、腰を中心に覆う。これは目立ちますよ。みなさん、腰みのやパンツを身につけた野生の動物さんがいるってお話を、聞いたことがありますか？

もう、うだつのあがらない種類の尻尾のないおサルさんたち、とは言えなくなってしまいました。元うだつのあがらない種類の尻尾のないおサルさんたちは、森から草原まで出て行き、もごもごをフルにつかって、さまざまなルール違反をするようになっていきました。うじうじした性格など、影も形もなくなりました。草原では、何と後ろ足だけで立って歩いたり、たったったたー、どころか、さっさっさーと走れるようになりました。ここまで来ると、ルール違反が増えすぎて、もう「ずる賢い」とは言えません。「ずる」を取って「賢い」と言っても、ま、いっか、になりました。

また、長い長い年月が過ぎました。年月と言いましたが、半端じゃなく長いんですよ。千年とか万年単位で考えてください。その半端じゃなく長いあいだに、半端じゃない変化が起きました。何と、例のずる賢い、じゃかった、賢い、うだつのあがらない種類の尻尾のないおサルさんたち、じゃなかった、元うだつのあがらない種類の尻尾のないおサルさんたちは、ものすごいでかい顔をして、森、草原、川原、海辺、湖畔、砂漠といった、ありとあらゆるところに出没し、木や石や粘土や干した植物やほかの生き物たちの皮なんかをつかって、それは見事な巣をつくっているのです。外見も、腰のあたりだけでなく、いろんなところにいろんなものをつける、つまり、お飾りなんてこともするようになりました。

なお、ここから、元うだつのあがらない種類の尻尾のないおサルさんたちを、ヒトと呼びます。短くてチャーミングな名ですよね。な、いいだろう？ って感じです。また、もごもごも、もごもごって呼ぶのは、言いにくいのでやめます。言葉って名をつけましょう。な、いいだろう？ って感じです。「賢い」は「賢い」でいいでしょう。「悪賢い」って言いたい気持ちもしますが、ま、いっか、って感じです。

さて、賢いヒトが言葉をつかって、森だけでなく、草原、草原、川原、海辺、湖畔、砂漠などで、数えきれないほどのルール違反をするようになったのですが、このルール違

反に共通する大切な「ヒトだけのあいだのルール」ができはじめてきたのです。それは、何かを目にしたときに、「これは全部、わたしのものだ。わたしにまかせとき」と主張する、というルールです。森だけでなく、草原、草原、川原、海辺、湖畔、砂漠などのルールは、もう、ルールでなくなってしまったのです。だから、これからは「ヒトだけのあいだのルール」を、単にルールと名づけます。な、いいだろう？ って感じです。

もう、ヒトは怖いものはだんだんなくなってきました。なにしろ、悪賢い、じゃなかった、賢いうえに、言葉をつかうことで、いろいろ覚えたことを、代々伝えてきています。すごい勢いで賢くなっていきました。ここで、１つなぞなぞを出します。

ヒトがどんどん賢くなるとともに、だんだん増えてきたものがあります。それは、何でしょうか？

みなさん、よーく考えみてください。みなさんも、知っているし、つかっているものです。みなさん１人ひとりに、ついてもいます。あっつ！ 今のは、大ヒントです。今の「ついている」で答えが分かっちゃったかな？ もう、１つおまけの大ヒントをあげましょう。

な、いいだろう？

そうです。大当たり。答えは、名、つまり、名前です。ヒトは、自分が何かを目にしたときに、「これは全部、わたしのものだ。わたしにまかせとき」というと同時に、もごもごの子孫、言い換えると言葉をつかって、名前をつける癖というか、ルールを知らず知らずのうちに身につけていたのです。

ヒトは、「これは全部、わたしのものだ。わたしにまかせとき。な、いいだろう？」と言ったあと、「これを△□○ Œ と呼ぶ。な、いいだろう？」と付け加えるのが習慣になりました。名前のないものに名前をつけることで、自分のものになる。

これが、ルールとなったのです。名って、なんて、すてきな、ルールなのでしょう。いったん、名をつければ、その名はどこへでも、持って行けます。ほかのヒトたちに、「これは、わたしのものだ」という印（しるし）みたいなもの、にもなります。この印（しるし）で、知る、つまり、知識を得たり、蓄えたり、伝えたりすることができるのです。自分が死んでも、子や、その子や、またその子たちへと、えんえんと残すことができます。ヒトって、賢いですね。すごいですね。まるで魔法じゃないですか。これって、半端じゃないですよ。な、いいだろう？ いやー、名前って、本当にいいものですね。って感じですね。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

以上です。

蛇足ではありますが、このおとぎ話＝紙芝居＝アレゴリーは、単なる与太話＝フィクション＝でたらめです。したがいまして、いかなる科学的、および、学問的根拠に基づくものではありませんので、その点をどうか、よろしくご理解並びにご了承願います。

ちなみに、上の与太話のタイトルが「な、いいだろう？」となっていることに、ちょっとでも興味がおありになる方は、広辞苑で「な」を引いてみてください。「なあ」も含めると、20 くらいの「な」があります。その意味をざっと流し読みしてください。あ「な」どれ「な」い、ですよ。な、すごいだろう？ って感じです。

【※きょうの記事は、かなり長くなるもようです。間借りしているブログサイトの文字数制限に引っかかることは、確実です。いつもより短いですが、内容的に区切りがいいので、ここでいったん、中断させていただきます。この続きは、「テリトリー（3)」として、本日の次の記事に書きます。ご面倒をおかけしますが、よろしくお願い申し上げます】

09.06.08　テリトリー（3）

◆テリトリー（3）
2009-06-08 08:54:20｜言葉

【※以下は、本日掲載の「テリトリー（2)」の続きです。】

さて、おとぎ話＝紙芝居＝アレゴリーの次には、屁理屈をこねさせてください。このブログでは、新しいシリーズをはじめるさいには、よくつかうツール＝道具＝玩具＝用語の説明を、初回にするのですが、きのうは忘れちゃいました。で、きょう、ご紹介しようと思います。説明の仕方は、少しずつ変わってきています。以下は、もっとも新しいバージョンで、「つくる（1)」2009-06-03 から、コピペしたものです。

★以下に挙げる４語は、別個のものであるというより、森羅万象（＝ありとあらゆる物、事、現象）を対象にした「切り口」＝「切り分け方」みたいなものだと考えてください。

１）「表象」:「何かの代わりに「その『何か』ではないもの」を用いる」という、代理＝代行という働き＝仕組みを利用したい場合に使用する。森羅万象が「表象」になり得る。

２）「トリトメのない記号＝まぼろし」or「記号」:「そっくりなものがずらりと並んでいる」and「そっくりなものが他の場所にも数多く存在する可能性がある」and「お母さんのコピーとして生まれたにもかかわらず、お母さんの権威や支配とは無縁で、いわばコピーのコピーとして存在している」という特性を強調したい場合に使用する。なお、通常、「記号」は、購入 or 入手され、消費 or 使用 or 保存され、用が済むと、廃棄＝処分される。森羅万象が「記号」になり得る。

３）「ニュートラルな信号」or「匿名的な信号」or「信号」:「ノイズと熱が常に存在する環境において、「まなざし＝合図＝メッセージ」の発信と受信が、一方的、または双方的に行われる」というメカニズムを問題にしたい場合に用いる。森羅万象が「信号」になり得る。

４）「イメージ」: 個人レベルで、ある物・事・現象・言葉などについて、それと「似たもの」＝「真似たもの」を、ヒトの「意識」が勝手に＝きままに＝テキトーに、「認識する」＝「いだく」というメカニズムに注目したい場合に用いる。「イメージ」には、「何かに似たもの」だけでなく、ヒトが勝手に「捏造（ねつぞう）した」＝「でっちあげた」ものもある。森羅万象が「イメージ」になり得る。

以上の４つは、あらゆるものについて、こじつける＝たとえる＝説明する時につかいます。

＊

★から以上までが、引用です。

で、きょうの、記事のテーマを、

＊テリトリーとしての名前

と名づけるとすれば（※この辺できのう述べた、言葉の遊びを「密かに」やっています、忘れていただいても結構です・・・）、次のようにも言えます。数ある「名前」から「人名」を例にとります。その場合には、

＊「人名」は、

１）「あるヒトの代わり」という意味では「表象」であり、

２）言葉のなかでは「相対的に短め＝凝縮度が高い＝濃密である」という特性があるため、入手、消費、保存、コピー、廃棄といった作業に適した、使い勝手のいい「記号」であり、

３）ヒトびとに記憶させやすい、コンパクトさと簡潔さという特徴を利用し、あるメッセージを強烈に伝え発信するための「信号」にもなり、

４）３）で共有されたメッセージを、強化することによって、「個人レベルでの勝手で気ままなイメージ」を駆逐し、多数のヒトびとのあいだで「共有化されたイメージ」として束ねることも可能である。

と言えそうです。

　ここで注目していただきたいのは、４）です。人名に限らず、

＊固有名詞には、きわめて強いイメージの喚起力がある。

という点は、このシリーズで強調したい、また、ぜひ追求＝追究＝探求＝探究してみたい特性でもあります。簡単に申しますと、

＊名前には、半端じゃないパワーがある。

ということです。なお、ちょっと考えている＝企んでいることがありまして、このシリーズでは「名前」に「短めのフレーズ」も含めさせてください。で、上述の、

＊「マーキング行動＝テリトリーつくり」と、「名前＝名づけること」は、密接にかかわっている。

という考えを前提とするなら、

＊名前の半端じゃないパワーを利用して、縄張りつくりや、縄張りの拡大を、イメージ操作＝情報操作によって実行することも可能である。

となります。非常にきな臭い＝生臭い＝恐ろしい＝不穏で物騒な＝危険きわまる＝「うかうかしていると大変なことになる」と言っても過言ではない事態を、予期させます。名前＝ name をなめたらあかん、ということです。

　実は、こういうきな臭い話は大の苦手なのです。真剣になりすぎてしまう傾向があるみたいです。

＊当ブログの過去の記事を集めた「倉庫」である「うつせみのうつお」【注：現在は、この「倉庫」はありません。】

には、

＊「うつせみのうつお（詳細もくじ）」という、各記事のダイジェスト版集のページ

があります。そのうちの、「おいしくない社会」2009-02-23、「あきらめない」2009-02-24、「最後のとりでを守る」2009-02-25、「やっぱり CHANGE なのだ」2009-02-26、「イエス・アイ・キャン」2009-02-27 という記事の要約を斜め読みしてください。その要約の直後に、「コメント」が付け加えてあります。

　うつ対策のつもりではじめたブログに、はまってしまい＝深入りしてしまい、とんでもない目に遭った＝うつのどん底に落ちた、のです。自業自得ですけど、忘れられません。その後、いったん、持ち直したかに見えましたが、少しして「息切れ状態」になって、「でまかせしゅぎじっこうちゅう」なんて、かなりあやうい精神状態でブログを書いたりしています。

　というわけで、アホでも、アホなりに「学習」できると信じ、自戒しながら、このシリーズを続けようと思っています。内容的には、ある程度きな臭くなるのは避けられないという予感はあります。でも、ニュース報道を通じて、昨今の国内および世界の情勢を見聞きしていると、

＊アホにも、アホとして書かなければならないことがある。

と思わざるを得ない世の中になってきているような気がするのです。前シリーズと前々シリーズがきっかけになって、赤ちゃんウォッチングが習慣になりました。他人様の赤ちゃんたちの顔を見ていると、そのたびに「オジサンの老婆心＝オジンバ心」が働いて、

＊このままでは駄目だ。何とせねば。

と、無意識のうちに握りこぶしをつくってしまうのです。何だかシリアスになってきたので、話題を変えましょう。

　みなさんのなかには、何かの形で、

＊「プレゼンテーション」

をした経験がおありの方がいらっしゃると思います。学校での研究発表、修学旅行の報告、会社での社内のプレゼン、顧客へのプレゼンといったものが、考えられます。でも、それだけでなく、親にお小遣いのアップをねだるとか、ある物が欲しいので、臨時のお小遣いを要求するとか、友達や恋人に何かをお願いするとか、合コンあるいは路上でナンパするとか、

＊広義の説得＝プレゼンテーション＝おねだり＝お願い＝意思表示＝アッピール

をするさいには、

＊プレゼンの鉄則

と呼ばれているものが役に立つそうです。どんなプレゼンの指南書にも書いてある鉄則は、簡単に言うと、

＊大切なのは、内容ではなく、イメージだ！

です。もちろん、極論です。内容がおろそか＝お粗末では、イメージもついてきませんよね。ということは、内容はそこそこでいいから、強烈なイメージで、相手を落とせ！でしょうか。それなら、分かるような気がします。で、よく考えてみてください。

＊大切なのは、内容ではなく、イメージだ！ ⇒ 内容はそこそこでいいから、強烈なイメージで、相手を落とせ！ ⇒ 名前 or 短いフレーズで、相手を落とせ！

　たった今書いた、３種類の短いフレーズこそ、まさに、「イメージ（＝名前 or 短いフレーズ）で相手を落とせ！」じゃあないですか？

＊プレゼンの教科書自体が（※「著者が」と考えてもかまいません)、教科書のテーマを、教科書に書いてある言葉に演じさせている。

のです。ぶっちゃけた話、

＊すべてのプレゼンの教科書は、プレゼンである。

という、当たり前＝ペテン＝当然＝まやかし＝なるほど＝「よっしゃ！」的事実が明らかになったと思います。

＊手品大会やマジックショーは、だまされに行くためにある。

のです。だまされるために、お金を払うのです。それに似たことって、世の中にあふれ

ています。これは手品なんだ、マジックなんだ、と意識している＝分かっているのなら、まだ救いがあります。それなのに.....。

　ところで、きょうは月曜日。今週の始まりです。みなさん、くれぐれも、上のようなペテンに引っ掛からないように、どうかお気をつけてください。僭越ではございますが、１つ、アドバイスをしてもよろしいでしょうか？ 耳に快い言葉をささやかれたり、元気の出るような威勢のいい言葉を耳にしたら、

＊そっと、右手の親指と人差し指の爪で、左手の親指の付け根あたりをつねってみてください（※必ず、爪で挟んで、痛いと感じるほど、つねってください）。

で、痛いと感じたところで、目を覚まし＝興奮を冷まして、

＊「今聞いたのは、ジョーク」

とこころのなかでつぶやくのです。

＊「ジャスト・ジョーク」

と念を押してもいいです。深く考えることはありません。

＊目を覚ます＝一時的な興奮を冷ます

　それだけで、十分です。あとの行動は自己責任ですよ。ケースバイケースですよ。相手の言葉に乗るか乗らないかは、自分で考えてください。そうです。

＊考える余裕をつくる

ことが、さっきのおまじないの目的です。

＊甘い言葉を快く感じたり、威勢のいい言葉で奮起した時には、「考える余裕」がなくなっているから、快いのであり、奮起しているのです。特に、「名前＝短いフレーズ」は怖いです。

　だまされないためには＝後悔しないためには、「考える余裕をつくる」のが第１歩です。だまされる時には、たいてい、

＊「思考停止＝ぜんぜん考える余裕がない状態」

に陥っていると言われています。だから、「今聞いたのは、ジョーク」「ジャスト・ジョー

ク」とこころのなかでつぶやいて、

＊聞いた話を、いったん、白紙に戻す

のです。これがコツです。ぜひ、試してみてください。

　では、よい1週間をお過ごしください。あすも、このサイトに遊びに来てくだされば嬉しいです。待っています。あすのテーマは、「名前は進化する」みたいになる予定です。では、また。

09.06.09　テリトリー（4）

◆テリトリー（4）
2009-06-09 08:31:45｜言葉

　クイズです。次に挙げる言葉は、何でしょう？ 波止場、コルト45、慕情、にがい米、天国と地獄、探偵物語、凱旋門、落ちた偶像、昼下がりの情事、アメリカの悲劇、ガラスの城。そうです。映画のタイトルです。しかも、全部が洋画です。第2次世界大戦後の10年間ほどに、この国でヒットした映画ばかりです。もう1つ、クイズを出します。以上の洋画の邦題に共通する点がありますが、何でしょう？ さらに、例を追加します。

　カサブランカ、心の旅路、ガス燈、断崖、ブルックリン横丁、美女と野獣、旅路の果て、大いなる幻影、甦える熱球、仔鹿物語、自転車泥棒、無防備都市、ヨーク軍曹、虹を摑む男、女相続人、黄色いリボン、アニーよ銃をとれ、わが谷は緑なりき、紀元前百万年、バンビ、サンセット大通り。

　どれもが大当たりした、つまり興行成績のよかった映画ばかりですね。なんて、偉そうなことを書いていますが、どれもが自分の生まれる前に製作されたものです。名前だけで知っているだけか、見たとしてもテレビかレンタルビデオで見たものです。で、答えですが、発音すると分かります。もう少し、例を挙げます。声に出して呼んでみてください。

　邪魔者は殺せ、疑惑の影、風と共に去りぬ、殺人狂時代、欲望という名の列車、天井

桟敷の人々、第三の男、地球最後の日、雨に歌えば、禁じられた遊び、見知らぬ乗客、地上最大のショウ、ローマの休日、帰らざる河、エデンの東、暴力教室、必死の逃亡者、傷だらけの栄光。

そうです。共通点は、発音すると、どこかに「濁点」が入るということです。なお、カサブランカみたいに、原題をそのまま邦題にしただけで濁点が入るものは、なるべく除きました。

でも、どうしてなんでしょう？ これは、かなり前に、何かで読んだか、聞いたことなのですが、当時映画を輸入して配給していた会社が、原題を邦題に直すときに、

＊縁起をかついだ ＝邦題に濁点の字を混ぜれば当たると信じた

というのです（※この記憶が正しくなく、「カサブランカ」みたいに全部がカタカナの邦題だったかもしれません、間違っていたらごめんなさい)。なぜ「" 」、つまり、濁点を邦題に入れると、縁起が良くて、興行成績が良くなるという「神話＝伝説」が生まれたのかは知りません。大切なことというか、ここで考えてみたいのは、

＊名前に祈り・願いを込める。

とか、

＊名前、あるいは、言葉には、パワーがある。

と、ヒトが信じる現象です。

上の例は洋画の邦題ですが、例外もあるわけです。荒野の決闘、町の人気者、哀愁、赤い靴、白い恐怖、肉体の悪魔、花嫁の父、ライムライト、恐怖の報酬、理由なき反抗、王様と私、戦争と平和、誇り高き男、赤い風船、追想、やさしく愛して。

こうした映画がヒットした以降は、洋画も邦画も下火になります。映画自体がテレビに屈する時代が、到来するわけです。

映画でも、テレビドラマでも、小説でも、歌の題名でもいいです。自分が、

＊いちばん楽しかった、苦労がなかった、単に若かった、輝いていた

なあ、と現在思い出される時期に流行ったものの

＊タイトル＝名前

って、懐かしいし、口にしてみると心がなごむし、不意にそのころの記憶が、ばあーっという感じでよみがえったり、思わず目が潤んできませんか。名前よりは、ちょっと長いものである、

＊流行語、標語、キャッチフレーズ、ＣＭの文句、歌詞

なんていうものも、いいですねー。

＊記憶の断片を放出する＝発する「不思議な力」がこもっている

という気がします。知覚器官や皮膚だけでなく、脳、神経、そして知覚をつかさどる以外の器官や内臓に染み入ってくるような、パワーが感じられる時があります。こうなると、

＊からだの全細胞で信号を受け取る

なんていう、大げさな言い方を肯定したくなります。

＊

きのうの記事のなかで、次のように書きました。

＊固有名詞には、きわめて強いイメージの喚起力がある。

＊名前には、半端じゃないパワーがある。

＊ちょっと考えている＝企んでいることがありまして、このシリーズでは「名前」に「短めのフレーズ」も含めさせてください。

＊名前の半端じゃないパワーを利用して、縄張りつくりや、縄張りの拡大を、イメージ操作＝情報操作によって実行することも可能である。

＊大切なのは、内容ではなく、イメージだ！ ⇒ 内容はそこそこでいいから、強烈なイメージで、相手を落とせ！ ⇒ 名前 or 短いフレーズで、相手を落とせ！

以上が、きのうの記事からの引用ですが、こうしたフレーズを書いて、何を言いたかったのかと申しますと、

＊名前＝短いフレーズは、こわいよー。

ということなのです。これに尽きます。固有名詞に限って言えば、ブログを初めて間もない頃に、「あえて、その名は挙げない」2009-12-24、「遠い所、遠い国」2009-12-25 で、わりと正面から取り組んで書いています。今から思えば、このシリーズの芽みたいな記事でした。ご興味のある方は、ご一読ください。短めで文章も読みやすいと思います。

で、きょうも屁理屈とゴタクを並べる前に、きのうみたいに、おとぎ話＝紙芝居＝アレゴリー＝与太話をさせてください。「またかよー」ですか？ ごめんなさい。ちょっとだけ、付き合ってくださいよー。きのうのおとぎ話、

＊「な、いいだろう？」の続編

なんです。タイトルは、「テラ取り物語」です。「ったく、もう、くだらない」なんて、おっしゃらずに、どうかお読み願います。縁起をかついで、ちゃんと題名には、濁点を入れておきました。

＊

★テラ取り物語

名って、なんて、すてきな、ルールなのでしょう。いったん、名をつければ、その名はどこへでも、持って行けます。ほかのヒトたちに、「これは、わたしのものだ」という印（しるし）みたいなもの、にもなります。この印（しるし）で、知る、つまり、知識を得たり、蓄えたり、伝えたりすることができるのです。自分が死んでも、子や、その子や、またその子たちへと、えんえんと残すことができます。ヒトって、賢いですね。すごいですね。まるで魔法じゃないですか。これって、半端じゃないですよ。な、いいだろう？ いやー、名前って、本当にいいものですね。って感じですね。

そんなふうに名前という魔法のようなものを手にしたため、ヒトは、名前のついた場所、つまり、自分たちの土地をどんどん拡大していきました。もちろん、簡単に土地を広げていくわけにはいきませんでした。ヒト同士のあいだで、争いが絶えないのです。「わたし」が次々と現れるのです。

「ここは、わたしのだ。だから、ここにあるものは、ぜんぶ、わたしのもの」。「いや、ここに名をつけたのは、わたしのほうが先。だから、ここにあるものは、ぜんぶ、わたしのもの」。「おまえたちは、何を言っているのだ。わたしのほうが、先に名づけたんだ。だから、ここにあるものは、ぜんぶ、わたしのもの」。「わたし」「わたし」「わたし」……、とにかく、きりがないのです。

ヒトは、仲間、つまり、ヒトや、ほかの生き物を殺（あや）める天才です。石、弓、刀、先のとがった棒切れ、場合によっては火。ヒト同士で戦うため、そして、猟や漁をするために、いろいろな武器を手にしていきました。ヒトは、たいていのものなら、何でも食べちゃうのです。とにかく、きりがないのです。

たくさんの血が流れました。たくさんの首が飛びました。あちこちで、ジュージューと、ヒトの肉のこげるにおいもしました。ヒト同士、または、ほかの生き物たちを相手に、ヒトは、戦い、殺める方法を覚え、だんだん上達していきました。手先が、半端じゃなく器用なのは先祖譲りです。親指１本で、相手を倒せるつわものまでいます。みぞおちとか、喉のあたりを狙うらしいですよ。ああ、こわい。

一方、名づけは、えんえんと続いていました。たくさんの「わたし」たちが、次々と「わたしのもの」だと言って、ゆずらないのです。ちなみに、それぞれの「わたし」は自分の名前を持っています。でも、とっても大切なものなので、めったに、口にしないなんてルールをもっているグループもいたみたいです。とにかく、きりがありません。アイ、アイ、マイ、マイ、ミー、ミー、マイン、マインって言う、言葉の違う、よそのヒトたちまで出てくるのです。

縄を張って、「わたしのもの」というヒトたちもいれば、どこからともなく現れて、てりてりとりとり、とりてりとりてり、てりとりてりとり、なんてわけの分からない言葉でわめく、よそのヒトたちが後を絶ちません。とにかく、きりがないのです。たくさんの「わたし」たちが、「これは、わたしのものだ」と言い張る土地のことを、ここからは、ぜんぶ、ひっくるめて、縄張りと呼びます。これで、すっきりしましたね。

あっつ。ちょっと待ってください。「縄張りなんて言葉、いやだ、いやだ」と、いう声が聞こえました。このおとぎ話に出てくるキャラクターさんの１匹、いや、１ケ、というより、１名ですか、とにかくそのキャラクターさんの声です。縄張りって、ぴったりで、いい言葉なのに、なぜなんでしょうね。「もっと、格好いい言葉がほしい」なんて、言っていますよ。ひょっとして、さっきのわけの分からない言葉でわめく、よそのヒトたちのしゃべっていた言葉ですか？ えっつ？ あっちのほうがいいなんて、キャラクターさんが贅沢を言っています。てりてりとりとり、とりてりとりてり、てりとりてりとり、でしたっけ？ 早口言葉みたいで言いにくいです。でも、何か意味深ですね。

そういえば、テラって言葉があります。てら銭の「てら」ではなくて、ラテン語で土、土地、陸地、大地って意味らしいです。ということは、地球もテラってことです。なんかそんな言葉の出てくる、ＳＦがあった記憶があります。じゃあ、テラを取り合うのだから、テラトリなんてどうでしょう、キャラクターさん。えっつ？「テラ取り」って、専門用語があるのですか？ じゃ、ちょっと訛って「テリ取り」はどうでしょう？ えっつ？ どうせなら、「テリトリー」まで訛ってくれ、ですか？ はい、承知いたしました。では、これからは、「わたしのもの」って叫んだ土地は、テリトリーと呼びます。この名前で、

よーござんすか？

いやー、名前って、本当に便利ですね。今、名前って呼びましたが、名前の数はすごく増えました。どうやら、種類もいろいろ出来てきたみたいなのです。ものの名前、ことの名前、動作の名前だけではありません。見た目、聞こえ、におい、味、手触り、雰囲気、不思議な感じ、いろいろな名前ができました。とにかく、きりがないのです。品詞？ そんな難しい言葉は、ここではつかいません。

こうしたいろんなものを、ぜんぶ、ひっくるめて、前からつかっている言葉という言葉で、呼ぶことにします。いやー、言葉って、本当に便利ですね。今度は、言葉って言葉で、ヒトが何をやってきたのかを説明しましょう。祈りの言葉。これは、天とお話ができるヒトが独り占めしていました。ヒトが定めてきた、たくさんのルールを表す言葉。これは、掟（おきて）と呼ぶようになりました。まだまだ、あります。とにかく、きりがないのです。

たとえば、火のおこし方、天とお話ができるヒトをおだてる方法（これって、切実な問題なのです）、ウシの育て方、シカの狩り方、料理の仕方、武器のつくり方、薬草から薬をつくる方法、敵と戦う方法、亡くなったヒトを葬るしきたりの手順、天とお話ができるヒトに頼らずに天にお願いする方法、言葉が通じないよそのヒトとやりとりをする時のコツ、馬鹿話、祖先が何をしてきたかの話、不思議な体験をしたヒトが語った話、昼間に眠ってもいないのに不思議な夢を見たというヒトの語った話、仲間を癒やす時の言葉、仲間を励ます時の言葉、ルール違反をした仲間をいじめたり懲らしめたりする時の言葉、男女を結びつけ家を持たせる時の段取り、これから先どうなるかを知る時にやる秘密めいた儀式、こうしたことぜんぶが、言葉になったのです。とにかく、きりがないのです。

あまりにも、たくさんの言葉や話や掟やおまじないがあるので、それを覚えきれるヒトはとても尊敬されていました。いるんですよ、みなさんのなかにも、100 人いれば、1 人か 2 人は、たいていいるんです。脳の働きがほかのヒトと違うのでしょうか。ところが、そういうすごい脳の持ち主がいなくても、だいじょうぶになりました。

大発明があったのです。話している言葉を、板や土のうえに印（しるし）をつけて、思い出す方法を考えついたヒトたちがいたのです。掻く、つまり、引っ掻いたり、彫ったり、色を着けて塗ったりするんです。あー、びっくり。これを文字という言葉で呼びます。いやー、文字って、本当に便利ですね。あの、うじうじ、もじもじしていた、うだつのあがらない種類の尻尾のないおサルさんたちが、もごもごを言いはじめたと同時に、とちくるい出し、数々のルール違反をするようになり、ながーい時が過ぎ、とうとう文字というすごいものを発明したのです。大したものです。

もっとも、こうした文字を持たないままで暮らし続けたヒトたちのグループも、たく

さんありました。文字なんて、あえて持たなくても、そんなに不自由するものではありませんから、当然です。結果的には、文字を持つグループが、テラ取り、じゃなくて、テリトリーをいちばん広げましたので、文字があって当たり前みたいになっていますが、話はまったく逆なのです。文字があるほうが、当たり前じゃない、つまり、変だったんです。最初の頃ですけど、「かなり変」だったのです。

でも、ヒトの歴史を見ていると、どうやら、「かなり変」なことが優勢になっていく傾向が見られます。徹底的に「とちくるう」ことを決意した種（しゅ）、あるいは、そんな遺伝子を持った種、それがヒトみたいですね。さて、文字のことは、これくらいにして、さきほどちょっと触れました、掟（おきて）とおまじないのお話にもどります。

テリトリーを維持し運営するためには、掟とおまじないが、とても大切な役割を果たします。何しろ、ヒトという生き物は、「変」が基本ですから、放っておくと、どんどん「変」になっていきます。そのことに、ヒトは大昔から、薄々気づいていた節があります。良く言えば、自制心とか歯止めという言葉が、それに当たります。悪く言えば、テリトリーを独り占めしたい一部のヒトが、つくりだした脅迫です。自分や、自分のごく少数の仲間たちだけにとって都合のいいようにつくった、脅迫文集です。

「○○○しちゃだめよ。したら、ただじゃ済まないよ。たとえば、△△△しちゃうからね」。「□□□する時には、必ず、▽▽▽するんだよ。これを守らなかったら ŒŒŒ しちゃう。分かった？」

掟は、こんな感じでした。つくったのはヒトなんですけど、例の天とお話できると言い張る、ごく少数のヒトがからんでいる場合も、珍しくありませんでした。掟の作者を分類しましょう。まず、やたら何でも仕切りたいヒトたちがいますけど、これは支配者と呼びましょう。次に、自分はただのヒトのくせに、天とお話ができると言い張って、本当かどうかは知りませんが、そのお話の報告だと称する言葉を吐くヒトたちがいますけど、これはシャーマンって呼びましょう。カメさんの甲羅や、シカさんの骨を火であぶると、パチンなんて、ひびが入りますね。そのひびを眺めながら、これから先に何が起きるかを当ててやる、なんて言い張る癖があるヒトたちがいますけど、これは占い師と呼びましょう。

ちょっと、黒板を利用させてください。チョークあります？ あった、あった。で、「預言者」とか、「予言者」って、両方とも「よげんしゃ」なんですけど、区別しろといってうるさいので、こういうヒトたちもいますと、ご紹介しておきます。いいですか、よげんしゃさん？ 気が済みました？ よかった。シャーマンとは違うんだって言い張る、よげんしゃさんも、いるんですよー。そんなのどっちだって同じだよ、なんて言う、テキトーなヒトもいますけど。

今、ご紹介しましたヒトたちは、言葉にはパワーがあると口をそろえて言い張ります。

言葉はみんなのものですから、みなさん、毎日、おつかいになっていますね。その意味では、みなさん、ひとりひとりが言葉の専門家であり、言葉の達人なんです。だから、自信を持ってください。今、ご紹介したヒトたちは、言葉を独占しようとしています。意図はさまざまでしょうが、これだけは確かです。動かせない事実というやつです。

ですから、みなさんは、上で紹介したヒトたちの言葉を鵜呑みにするのではなくて、言葉にパワーがあるのかどうか、あるとしたら、どんなパワーなのか、自分にとってプラスになるものなのか、そんなふうに、自分の力、つまり、自分のパワーで考えてください。安易に、他人に頼るのではなく、まず、自分の体と頭に尋ねましょう。最後は、自分しか頼りになるヒトはいません。いっしょに、頑張りましょうよ。プロとか、師とか、〇〇の神様、なんていう偉そうな言葉で自分自身を呼んだり、ヒトから呼ばれても、呼ばせておいて何とも感じないヒトは「変」です。

勘違いしないでくださいね。今しているのは、言葉に限ってのお話です。大工さんやお茶碗をつくるヒトみたいに、物と真剣に取り組んでいる職人さんには、プロとか、神様のようなすばらしいスキルを身に付けたヒトたちがいます。そういうヒトの言葉に、耳を傾けましょう。ぼそっと、すばらしいことをつぶやくことがありますよ。そのヒトたちのしていることは、言葉だけじゃありませんもの。

さて、テラ取り、つまり、この惑星を奪い取ってしまったヒトという種は、これから先どうなるのでしょう？ そのヒトたちにも、赤ちゃんがいたりします。本当に、その赤ちゃんたちのためになることをやっているのでしょうか？ 何かを言葉で名付けたために、その何かが見えなくなっている。そんな気がするのです。名付けたものは、ぜんぶ自分のもの、ぜんぶ知っているはず。ぜんぶ分かるはず。今のところはちょっと分からないものもあるけど、いつか絶対に分かる。ひょっとして、ヒトはそんな思い込みをしているのでは・・・。そんな気がするのです。また、機会があったら、このおとぎ話の続きをします。みなさん、お元気で。さようなら。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

以上です。蛇足ではありますが、このおとぎ話＝紙芝居＝アレゴリーは、単なる与太話＝フィクション＝でたらめです。したがいまして、いかなる科学的、および、学問的根拠に基づくものではありませんので、その点をどうか、よろしくご理解並びにご了承願います。

おとぎ話は、せいぜい改行を多くして、段落の間を１行空けにするくらいしか、レイアウトの工夫ができないので、目が疲れたのではありませんか？ ごめんなさい。お疲れ様でした。では、今度は、屁理屈＝ゴタクを並べさせてください。

「＊」をつかって、レイアウトに工夫を凝らします

ので、いくぶん、おとぎ話よりは、読みやすいと思います。とちくるった内容は別にして、ですけど。で、

＊名前（＝言葉）は進化する。

　これが、きょう、強調したいことです。今書いたセンテンスにある「名前」は、言葉＝言語の初期的な形態だと、あくまでも「比喩的に」ご理解願います。

＊言語の始原＝起源＝誕生＝萌芽

などという、うさんくさいテーマを、

＊楽問＝ゲイ・サイエンス＝「マジにならずに楽しくやろうよ、お勉強ごっこ」

としてジョーダンでやるのなら、かまわないのですが、

＊マジで学問

しようとするとなると、

＊タイムマシーンの発明と製作

から取り組んだほうが、賢明です。要するに不可能だということです。もしも、

＊マジで

上述の問題に取り組んでいる試み＝学問？ ＝研究？ を見聞きした場合には、注意しましょう。きっと大嘘です。日本語や英語など、個々の言語の変遷なら、ある程度はたどれるかもしれません。言語一般というレベルでは、発生や起原を検証することは無理でしょう。だって、

＊言葉で言葉を扱うのには、限界＝「テリトリーの枠」＝「縄張りを囲う縄」＝「線引きの線」がある。

からです。

＊言葉＝表象＝記号＝信号＝イメージ

を用いて、ああでもないこうでもない、ああでもあるこうでもある、しかできそうでない以上、マジで学問なんて不可能だからです。とはいえ、その一方で、

＊言葉は、ヒトを動かすさいに利用される。

という、言葉に備わっている「現実的な側面＝現時点でもあらゆる場所で行われつつある現象」を忘れてはならないと思います。

＊ヒトを動かす

とは重い言葉なはずです。ヒトを動かすことで、場合によっては、その

＊ヒトの行く先＝前途＝運命を大きく左右する

ことができます。たとえば、政治家、ミュージシャン、作家、コピーライター、広告代理店、宗教家、官僚組織、司法組織、広義の有名人などは、長い言葉＝演説＝マニフェスト＝公約＝作品＝キャンペーン＝マーケティング活動＝イベント＝プロパガンダ＝教義＝教え＝法律＝判決＝演技＝主張などといった、

＊長期にわたる戦略＝運動を展開する

高い能力と、おおぜいの援助者＝スタッフをかかえています。手強いですよー。

＊名前（＝言葉）は進化する。

とは、そうした現象のことです。ありゃー！ 話が大きくなってきましたので、きょうは、ここでストップして、あたまを冷やしたいと思います。

　この行まで辛抱して読んでくださった方に、こころから感謝いたします。また、あす、このサイトに遊びに来てくださることを願っています。お待ちしております。

09.06.10　テリトリー（5）

◆テリトリー（5）
2009-06-10 08:52:21｜言葉

　物心がついた頃から、親やまわりの人たちから、よく注意されていたことがありました。自分を一人称で呼べなかったのです。「〇〇ちゃん」という具合に、自分の名を略して「ちゃん」をつけた愛称で、自分を指していたのです。「野原しんのすけ」なら、自分を「しんちゃん」と呼ぶようなものです。「おら」と言えなかったのです。

　いつの間にか、自分を一人称で呼ぶようにはなりましたが、どうして当時、あのような言行をしていたのか、今振り返ってみると、何となく分かる部分があるので、はっとします。つまり、あの性癖の根っこにある気持ちが、現在、

＊「分からない」のではなく、むしろ「分かる」気がする。

のですが、それは、たぶん、

＊「分かる」というより、「共感できる」

に近い気がします。今、そう考えて、

＊はっとする＝緊張感を覚える＝ビビる

のは、おそらく、

＊今もそうしたい願望＝欲求が自分のなかに潜んでいる

からではないか、と思うからです。こんな年になって、自分のことを「〇〇ちゃん」なんて呼びたい気持ちがこころの奥にあるとしたら、ちょっと「恥ずかしい」です。他人様から見れば、きっと「気味が悪い」でしょうね。

　そうした屈折した思いがあるからなのか、よく分からないのですが、書き言葉、特に、私的な書き物、たとえば、日記、身辺雑記、ブログなどでは、一人称を省いた文章を書いています。これは意識的な行動です。このブログでも、せいぜい、

＊自分 or こちら

という言葉をつかっています。この２つは、「広義の一人称」だという見方もできるでしょう。「自分」や「こちら」のほかに、

＊.....しているこのアホ or このブログの開設者

みたいに三人称っぽく、自分自身を指す場合もあります。

＊私、わたし、わし、ワシ、おれ、あたし、あたい、ぼく

が出てくるとしたら、記事に出てくる登場人物の発言の中か、かつて、「架空書評」を書いてくださっていた詩人の孟宗竹真（もうそうだけまこと）氏のブックレビューにおいて、でしょう。「でまかせしゅぎじっこうちゅう」では、確か、「ワシ」か「わし」をつかっていたと思いますが、あれは、自分の分身というより、記事に登場させたキャラクターのセリフみたいなものです。

絶対とは言い切れませんが、ブログのなかで、自分自身のことを、上で挙げた「私、わたし.....」という一人称を用いて指したことはないと思います。けっこう、毎日、そのことには気をつかっているのです。

なぜかは、分かりませんが、そうしています。もっとも、メールや手紙や、そのほか他人様に当てた文章では、いわゆる一人称を用いて書いています。そうしなければ、やりにくくて生活できません。もちろん、話し言葉では、頻繁に一人称をつかっています。

＊

人称にかぎらず、言葉に対するこうしたこだわりは、何らかの形で、みなさん、お持ちではないでしょうか？ 自分はこの言葉は絶対につかわない。この漢字はつかわない。これは漢字でなくひらがなで書く。これはひらがなではなくカタカナで書く。あのような言葉遣いは決してしない。という具合に、です。意識してそうしている場合も、無意識でしている場合もあるでしょう。こうしたこだわりが、エスカレートすると、

＊□□さんらしい言葉遣い or 文章 or 文体

なんて言われたりするのではないでしょうか。

別に、プロアマの別を問わない話です。他人様のブログを拝読すると、そうした思いを強くします。なかには、すごく個性的だなあ、と感心する文章にめぐりあうことがあります。ある年代、または、ある種の趣味や傾向を共有する人たちに特有なものらしい言葉遣いも見られます。その意味では、

＊ネット上の掲示板やブログは、文章表現上の自由度がきわめて高い「媒体＝伝達の手段」だ。

と言えそうです。

このブログでも、かなり好き放題な書き方をしています。また、メールとブログという手段が登場したことにより、定期的に文章を書く人たちが飛躍的に増えたという気もします。個人的には、好ましい現象だと思っています。だから、ケータイやネットの利用に対する、一部の現象を理由にした国家による規制には反対です。詳しくは、「なぜ、ケータイが」2009-01-22 をご一読願います。

手紙を利用した犯罪が置きたから、手紙の利用を規制する。道路でトラブルが起きたから、道路の利用を規制（※検問の大幅な増加、関所の設置、道路の頻繁な封鎖・使用禁止という意味です）する。今、そんなことを国家がはじめたら、国民の猛反対にあうことでしょう。

手紙の検閲は、明治・大正・昭和には、対象を絞って行われていました。第２次世界大戦中は常時ありました。道路の規制は、戒厳令、夜間外出禁止令という形でありましたし、江戸時代には関所なんてありましたね。

何か新しいものができると、規制しようとする、または仕切ろうとする。それが国家です。または、社会＝共同体です。現在は、ケータイやインターネットが過渡期にありますから、国家の標的にされがちです。

いろいろな規制が提案されています。一部、実行されてもいます。でも、近いうちには、その規制も笑い話になるかもしれません。あくまでも、「かもしれない」ですけど。歩行者天国みたいに、いったん規制されたら、もうアウトみたいなものも、きっとあるでしょう。

＊

話を一人称にもどしますが、日本語では、会話も地の文も含め、一人称をまったく用いないで、小説を書くことが可能です。顕著な例を挙げると翻訳です。故人ですが、田中小実昌（たなかこみまさ）という作家、エッセイスト、映画評論家、哲学者で、翻訳家としてもよく知られた人がいました。昔、「11 ＰＭ」という名の夜のバラエティ番組で、なぜかレギュラーのように出ていたこともありました。

＊「なぜか出ている」

そんな存在感をかもし出す、希有な個性の持ち主でした。翻訳家としては、抜群に自然な日本語を書く人でした。小説も、とぼけた文体で深いことをさらりと書く、そんな人でした。タイトルは忘れましたが、田中氏が、英語の原文では一人称で語られている小説を、一人称を用いずに翻訳したものがあるというのは、翻訳家の世界では有名な話だそうです。

小鷹信光（こたかのぶみつ）という現役というかベテランの翻訳家・作家がいらっしゃいますが、その方がロス・マクドナルド原作の一人称で書かれた短編を、一人称を使用せずに訳したというのも、その業界ではよく知られた話だということです。日本語では、そういうことができるんですね。これが翻訳となると、名人芸です。

＊

ところで、冒頭で書いた、

＊自分を一人称で呼べなかった

幼い頃の自分の心理を分析したくなりました。図式化すると、次のような感じです。

＊恥ずかしい ＝/or 嫌だ and/or 分かんない ≒ こんなんでいいのかなあ

という具合です。

要するに、気持ちが整理できなくて、

＊ぐちゃぐちゃ、ごちゃごちゃ

って感じですね。

で、ふと思ったのですが、もしも「〇〇ちゃん」と自分を呼ぶことを禁止されたとしたら、

＊こわい

という気持ちも強かったような気もするのです。禁止されたと想像しただけで、その「こわい」という思いが、今でもリアルに全身を貫きます。

以前にも、書いたことがありますが、自分 or この記事を書いているアホは、公衆トイレなどで他人がそばにいると、おしっこができません。すごく緊張するのです。意識しはじめたのは小学校の高学年くらいでしょうか。

これって、とても困るんです。かなり不自由します。自分がここまで生きてきたうちで、行動範囲が極端に狭かったり、人付き合いがきわめて苦手なのは、この傾向＝性癖＝ひょとして病気？ が大きく影響しているからではないか、と思うほどです。一時は、そうとう真剣に悩んだものです。

小説家を志していた頃の複数の習作に、そうした性癖の登場人物が出てきます。主要なキャラクターでも、ちょい役でも、出てきます。つい書いちゃうんです。で、いろいろな不自由や都合の悪いことがあって、悩んでいた頃、ＴＩＭＥという米国の雑誌で「Fear（恐怖症）」とかタイトルの特集があり、そのなかで、ずばり自分と同じ悩みを持つ人たちがいると書かれていたのを読み、ずいぶん勇気づけられたし、励みになったことを覚えています。

＊

「〇〇恐怖症」という言葉があります。グーグルなんかで検索すると、びっくりするほどの数のサイトがヒットし、また、びっくりするほどの多種多様な「恐怖症」をかかえている人たちがいるらしいことが、分かります。詳細については、痛々しい部分がたくさんあるので触れません。興味のある方は、ぜひ、ググるなり、ヤフってください。自分と似た人たちがいるかもしれませんよ。

「恐怖症」についてのサイトを覗いてみて、自分なりに感じたことを書いてみます。具体的に、２つだけ例を挙げます。

＊ xenophobia ＝外国人（or 未知の人や物）に対する恐怖・憎しみ・嫌悪、ゼノフォービア ；xenophobe ＝外国人（or 未知の人や物）嫌いの人、外国人恐怖者、外国嫌いの人、ゼノフォーブ

＊ homophobia ＝同性愛恐怖、同性愛嫌悪 ；homophobe ＝同性愛嫌悪者、同性愛恐怖者、同性愛恐怖症の人、同性愛に恐怖心（or 嫌悪感）をいだく人

なぜ英語から紹介してあるのかと申しますと、以上の傾向や傾向を示す人が、この国にも数多くいるにもかかわらず、それが名詞として話し言葉や書き言葉に登場する頻度が、たとえば、英米に比べてとても低いからです。上の日本語訳をご覧ください。あまり聞いたり読んだりした覚えがないのはありませんか？

正確に言えば、日本語では、「わたしは〇〇が、嫌いだ or 苦手だ」「〇〇なんてくそくらえ」みたいに言うのがふつうだと思います。でも、英語では、上の４つの単語を非常によく目にします。大切なことは、表現の仕方ではなく、とにかく、

＊上記の傾向＝現象が、この国でも少なからず見られる

ということです。

上記の２つの例を挙げた理由が、もう１つあります。「〇〇恐怖症」＝「〇〇-phobia」

を検索すると、さきほど述べましたように、たくさんの種類の「恐怖症」があると分かります。要するに

＊「〇〇が怖い」

というヒトがたくさんいるということです。ただし、上の xenophobia と homophobia の２つには、ほかの「恐怖症」にはあまり見られない、きわだって目立つ特徴があるのです。それは、

＊「怖い」「恐怖」といった言葉だけでなく、同時に「嫌い」「嫌悪・憎悪」という言葉も出てくる

という点です。とりわけ注目すべき点は、「憎悪＝憎む」です。これは、「攻撃」にまで通じる心理です。

＊「怖い」「恐怖」＋「嫌い」「嫌悪・憎悪」は、ほかにあまり見当たらない。

とも言えそうなのです。上記の２例には、さらに特徴的な傾向が見られます。

＊「怖い」「恐怖」といった言葉に加えて、「嫌い」「嫌悪・憎悪」という言葉だけでなく、「恥ずかしい」「羞恥心」という言葉もまた出てくる。

みたいなのです。言い換えると、

＊「怖い」「恐怖」＋「嫌い」「嫌悪・憎悪」＋「恥ずかしい」「羞恥心」は、ほかにあまり見当たらない。

となります。

ここで、お断りしておきますが、以上は個人的な感想です。xenophobia（or xenophobe）と homophobia（or homophobe）という英語が出てくる英語のサイトや雑誌・新聞・書籍を読んでいると、前後関係から、そんな感じがする。そんなニュアンスがあるようだ。という意味です。

＊

信じるに値する根拠があるのかどうかは、知らないのですが、次のよく知られた例を挙げると、分かりやすいと思います。

ヒトラーです。短絡的な言い方になり恐縮ですが、以下のようになります。

＊自分にはユダヤ人の血が混じっているかもしれない。or 自分にはユダヤ人の血が混じっているという噂がある。（＝羞恥心・不安・動揺）⇒ 自分のなかにあるかもしれない「内なるユダヤ人」が怖い。（＝恐怖）⇒ ユダヤ人一般は国家および社会にとって脅威である。（＝恐怖・憎悪・敵対）⇒ ユダヤ人を排除しよう。（＝恐怖・憎悪・敵対・攻撃）

以上の図式を、外国人（or 未知の人や物）一般に対する、恐怖・憎しみ・嫌悪に当てはめてみると、そうした現象の構造＝仕組み＝メカニズム＝動きが、よく分かると思われます。少し変えなければならないところもありますので、実際にやってみますね。

＊自分も海外に出ればよそ者つまり外国人だし、島のまわりは全部外国だ。（＝羞恥心・不安・動揺）⇒ そんな立場に置かれた自分が怖い。（＝恐怖）⇒ この国を含めてどの国でも外国人は国家および社会にとって脅威である。（＝恐怖・憎悪・敵対）⇒ 外国人を排除しよう。（＝恐怖・憎悪・敵対・攻撃）

こんな感じでしょうか。今度は、「未知の人や物」の変種である、変人で試してみましょう。

＊自分はまわりから変人だと思われているかもしれない。or 自分が変人だと思われている節がある。（＝羞恥心・不安・動揺）⇒ 自分のなかにあるかもしれない「変人」が怖い。（＝恐怖）⇒ 変人は国家および社会にとって脅威である。（＝恐怖・憎悪・敵対）⇒ 変人を排除しよう。（＝恐怖・憎悪・敵対・攻撃）

さっき英語を読んでいると、前後関係から、ある種のニュアンスが感じられるという意味のことを書きましたが、その「ある種のニュアンス」という曖昧なものを、以上のような図式をつかうことにより、表す＝「見える化」することができます。

こうした現象の背後＝根底にある心理は、

＊自分に似たもの（者・物）を感じ取る ⇒ その自分に似たもの（者・物）を恐れる＝憎む＝ビビる＝パニクる

と単純化できると思われます。それが、閉所恐怖症、高所恐怖症、クモ恐怖症、先端恐怖症などポピュラーな恐怖症と大きく異なるところです。欧米の文献で homophobia について書かれているものを読むと、特にその点が強調されています。「自分が〇〇の傾向があるから、そうでないという証（あかし）に攻撃する」というわけです。

＊恐怖と憎悪の対象に、自分に似たところ＝共通点を見いだすことが原点

なのです。

＊外国人（or 未知の人や物）or 異形（いぎょう）の者 or よそ者 or 変わり者 or 少数者 or マイノリティー or 異端者 or 反体制派 or 新しい考えの持ち主などに対する、恐怖・憎しみ・嫌悪・敵対・攻撃・迫害

について言うなら、

＊日本では、上述の単純化された図式は、「見える化」されていないため、「見にくい」。その見にくさが巧妙に隠されているからだと考えるならば「醜い」。

と言えそうです。要するに、

＊この国は、個性的なもの（者・物）＝目立つもの（者・物）＝変わったもの（者・物）＝新しいもの（者・物）＝よそのもの（者・物）＝出るくい＝一時的な成功者＝異質な現象に寛容ではない。

ということです。

　いやー、きな臭いお話になってきましたね。きな臭い＝生臭い＝物騒だ＝不穏だは、大の苦手なのです。抑うつ状態で、こういうことを書くことは、ぜんぜん良いことではないのは分かっています。でも、

＊書かなければならない

という思いのほうが、強いので、このまま続けさせてください。

　日本語で書かれた、

＊「〇〇が怖い」＝恐怖、「〇〇を排除すべきだ」＝嫌悪・憎悪・敵対・攻撃・迫害

は、実際には、このように直接的には表現されません。

＊見えにくい

のです。もちろん、直接的に言葉にする人たちもいます。でも、そうした言動は、はしたないとか、短絡的だとか、差別的だとか、言い過ぎだとか、やり過ぎだとか、「本音は隠せ」だとか、アホだとか、いろいろな罵倒を浴びせられます。そういう、

＊直接的な言動を避けたがる社会 or 共同体 or 国家

なのでしょう。

なにしろ、以心伝心、阿吽の呼吸、沈黙は美徳、出るくいは打たれる、長い物には巻かれろ、なんていう、わけの分からなかったり、窮屈であったりする言葉が珍重される社会 or 共同体 or 国家なのです。奥ゆかしいと言えば奥ゆかしい、ずるいと言えばずるい、陰湿と言えば陰湿、みにくいと言えばみにくい、と言えそうです。

その背景には、この国が島国であることが大きく影響している、という説もあります。ただし、以上述べてきたようなことは、この社会 or 共同体 or 国家に対するイメージの問題ですから、

＊人それぞれが違ったイメージをいだく

でしょう。

みなさんは、どうお感じになりますか？

＊

さきほどのヒトラーの図式とその応用例の図式は、かなり使い勝手のいいツールになり得ます。外国人や外国の物だけでなく、同性愛、政治、宗教、信条、好み、グループ、派閥という具合に、いろいろなものに当てはめてみると、そうした

＊言葉をめぐるさまざまなトラブルや問題の仕組み＝メカニズム

がよく理解できるのではないでしょうか。できれば、みなさん、試してみてください。

ここで、ヒトラーの図式の、別の「変種＝ちょっと違うけど似てるバージョン」を紹介します。

＊自分は王様＝絶対的支配者になりたいけど（＝願望・野心・下心・「こんちくしょう」）、ヤバいから直接的に言葉で表すわけにはいかない（＝都合・不自由・「こんちくしょう」）。⇒近くに、自分がなりたい王様＝絶対的支配者と激似のやつがいるが（＝羨望・憧れ・「こんちくしょう」）、気になって仕方がない（愛憎相半ば・「こんちくしょう」）。⇒危険きわまりないあいつとあいつの手下どもをこのままのさばらせておくわけにはいかない（＝恐怖・憎悪・敵対・「こんちくしょう」）。⇒ここには意気地のない頼りないやつらばかりいるけど（＝動揺・不安・欲求不満・「こんちくしょう」）、こっちの命令だけは聞くようにしつけておいてＸデーにそなえよう（＝憎悪・敵対・攻撃・「こんちくしょう」）。

以上は、ヒトラーになり損ねている者の図式とでも申しましょうか。

お分かりになったと存じますが、簡単に申しますと

＊「近親憎悪」

が根底にあります。自分に似ている相手を見つけ出し、徹底的に憎みます。その相手は、

＊「仮想敵国」

と申しますが、この言葉はめったに口にされません。一種の禁句＝タブーです。禁句を口にすると、上の図式の最初のセンテンスに隠れている、「願望・野心・下心・『こんちくしょう』」がばれちゃうので、言わないのです。

この「近親憎悪」と「仮想敵国」をこころにいだく根底＝背景には、さきほど述べた

＊自分に似たもの（者・物）を感じ取る ⇒ その自分に似たもの（者・物）を恐れる＝憎む＝ビビる＝パニクる

＊恐怖と憎悪の対象に、自分に似たところ＝共通点を見いだすことが原点

という心理＝病理が働いていることは言うまでもありません。でも、残念なことに、

＊選挙という儀式＝セレモニー＝現在ではほぼイメージ戦＝本来は権限委譲（※「移譲」ではありませんよ）・委託・請負

を経ることによって、

＊「小さなものから大きなものまで」、さまざまなレベルの権力を握った人

のなかに、非常に多く見られます。

特徴は、威張っている、１人では何もできない、まわりから甘やかされて育ってきている、群れる、やたら強制する、命令に逆らう者は手下にそっと命じて罰する、意に沿うような行動を手下が自らするように刷り込む、選挙になると猫をかぶるのがうまい、親族を核にした世襲制王朝をつくりはじめる、などなど、です。

要するに、要注意ということです。ひょこひょことついていくと、たいてい、

＊いちばんつらい仕事を押し付けられます。

ごく一部の人だけが、いい思いをすることができそうです。要注意だという以外、言うべき言葉はありません。

＊

きょう、述べてきたことは、ぜんぶ、テリトリーと関係があります。

名前、言葉、一人称、□□さんらしい言葉遣い or 文章 or 文体、ブログ、ネット上の掲示板、インターネット、メール、ケータイ、手紙、〇〇恐怖症、怖い、嫌い、恥ずかしい、見えにくい、イメージ、ヒトラー、よそもの、変わったもの、異質なもの、近親憎悪、選挙、権限委譲、要注意、これらはすべてが、テリトリーとつながっています。

当然と言えば、当然です。みんな言葉なんですから。テリトリーをつくることは、

＊名前（＝言葉）を付けて、自分のものだと言い張る

ことからはじまります。そして、名づけた

＊言葉でヒトを動かす

のです。ヒトを動かす言葉には、

＊「□□、万歳！」

もあれば、

＊「□□をやっつけろ！」

もあります。

やっぱり、

＊言葉はあなどれない

と落ち着いたところで、きょうは、ここまでにしておきます。

きな臭いお話を読んでくださった方に、お礼を申し上げます。どうも、ありがとうございました。また、あす、このサイトでお待ちしております。

09.06.11　テリトリー（6）

◆テリトリー（6）
2009-06-11 08:50:57｜言葉

以前、心理学について誤解していたことがありました。精神医学とか精神分析と、ごっちゃにしていたのです。でも、ある時期に、仕事で、心理学を学んだり、教えていらっしゃる方々のお手伝いをする機会があり、自分が大きな勘違いをしていたのを知りました。

簡単に申しますと、心理学のなかには、ほとんど理系と言っていいような分野があることを知ったのです。自分が苦手な統計なんかをつかうので、やたら数字が出てくるし、計算はあるし、理系的な手続きに沿った論文を書かなければならないのです。

で、そういう理系みたいな論文やその要約を英訳したり、海外の文献の和訳をお手伝いする。そんなことを、アルバイトでやっていました。ただし、苦手な統計と数字には閉口して、こっちが「お客様」に質問ばかりして、あまり、お役に立てなくて申し訳ないやら恐縮するやらで、冷や汗のかきどおしでした。ほとんどの心理学科が文学部に置かれていたので、高をくくっていた罰が当たったのです。

＊

大学生時代に、ミシェル・フーコー、ジル・ドゥルーズ、ジャック・ラカンといった、哲学や精神医学や精神分析を横断して活躍していた人たちの本や講義録を読んでいた割には、そうした分野・領域がどうからんでいるのかについて、自分が無頓着で無知だったことに、後になって気づいた。要するに、そんなお粗末な＝恥ずかしい話です。

ちなみに、日本の大学の心理学科は、実験を重視した学派と、臨床、つまり、カウンセリング的なスキルの養成を目的とした学派とに、分かれるみたいです。以前は、実験重視の学科のほうが多かった記憶があります。現在は、カウンセラーなど臨床心理関連の資格が複数設けられているため、臨床心理学のコースのある学科が増えているもようです。

思い返してみると、かつて岸田秀（きしだしゅう）という人が、精神分析をテーマにした面白い本を立て続けに書いたり、訳したりしていました。岸田氏は文学部の心理学科出身であり、大学の心理学科の教員をしていた人だったので、日本の心理学科では、フロイトみたいに、ちょっとエッチで、ちょっと難しくて、ちょっといかがわしそうで、ちょっとわくわくするような研究やお話つくりをやっているのだろう、と決めつけていたのです。

ところが、当時は、実際には、そうとは限らなかったというわけでした。その英訳・和訳のアルバイトで知り合った人たちから、次のような愚痴みたいな話をよく聞かされました。

フロイトやユングの研究をしようと思って、心理学科に入ったのに、白衣を着てネズミの行動を観察したり、その行動を統計をつかって数値化するようなことばかりやってんだよね。岸田秀みたいな先生の授業を受けられると思ったのに、大間違い。だまされたなあ。あ、はは――。なんて調子でした。

本当かどうかは知りませんが、むしろ、医学部のなかで精神医学を専門にしようとしている人たちのほうが、文学作品や哲学関連の著作を読んだり、実験とは無縁だったり、数字や、まして統計なんかほとんどつかわなかったりで、よほど文系的な勉強ばかりしている、なんて話も聞かされました。学問における領域＝分野＝テリトリーも、いろいろわけありで、ややこしいのですね。

＊

このようにテリトリーとは、抽象的な意味でも用いられていますが、本来は

＊土地

でした。したがって、当然のことながら、面積があります。

＊面

ですから、

＊内側、中心、外側、境

が存在します。中心あたりは、すごく

＊居心地がいい

でしょうね。

真ん中だとまわりを守られているという安心感もありますから、落ち着くでしょうね。なお、テリトリーを「他者」と出会う場として論じた「あう（6)」2009-05-02 という記事を以前に書きましたので、ご興味のある方は、ご覧ください。

さて、テリトリーには居心地のいい内部がある一方で、居心地がいいどころか、気を緩めることのできない、

＊境＝辺境＝フロンティア

もあります。

ちなみに、生物のマーキング行動＝縄張り行動における「印＝ mark 」という英語の語源は、「境界・境界の印・国境地方」だとのことです。境界とは、外部との接点ですから、

＊他者＝よそ者＝外敵

が、いつ自分 or 自分たちのテリトリーに侵入してくるか分かりません。常に、外に目を向けて、警戒をしなければならない場所です。

＊「自分のテリトリー＝専門（or 専門分野）を侵された」

という意味の言い方があります。学問・学者・研究者の世界、官僚・役人・族議員の世界、職業 or 職能集団、宗教組織 or 組織内の派閥、ある共通項を持った人たちが、漠然と成している領域 or 業界 or 世界 or ほぼ集団.....で、自分たちのテリトリーが侵されたと、よく言いますね。

＊しる＝汁＝おしっこをかけて、その場所を「知る」ことにより、自分の縄張り＝テリトリーとする、マーキング行動。

は、ワンちゃんやネコちゃんや他の生き物たちの行動だけでなく、ヒトにもある、というより、

＊ヒトがいちばんエスカレートした大規模なマーキング行動を行っている

と言えそうです。

＊ヒトは、名付けることにより、「しる＝知る＝知（ち）＝知識」を得て、おびただしい

量の「血（ち)」を流すことにより、「テラ＝地（ち）＝大地＝地球」をいわば「テラ取り」して、テリトリーを拡大してきた。

と言えそうです。ヒトの場合には、「しる＝知る＝知（ち）＝知識」がありますから、話は非常にややこしくなります。この惑星の

＊土地の独占＝地の独占

という物理的なレベルにとどまらず、

＊知識の独占＝知の独占

も成し遂げた、という錯覚に陥っているようなのです。その錯覚の根底にあるのは、

＊名付ける ⇒ 言葉をつくる ⇒ 言葉を「事・物・現象＝森羅万象」に与える ⇒ 言葉で森羅万象を詳細に分ける＝分類する ⇒ 森羅万象が分かった＝理解したという錯覚に陥る ⇒ 森羅万象を支配＝征服したと思いたがる or 思い込む

という、おとぎ話めいた図式化もできるのではないかと思います。

以上の図式を前提とするなら、そうしたプロセスが、この惑星に生息するヒトのさまざまなグループによって実行されてきたということになります。すごいと言えばすごい。怖ろしいと言えば怖ろしい。大したものだと言えば大したものだ。邪悪なことだと言えば邪悪なことである。

このように、

＊名付け、つまり、言葉を用いれば何とでも言える。

そこが、言葉のもっとも重要な特性です。すると、当たり前のことが起きます。

＊いろいろなヒトが、いろいろな名付け＝言葉をつかうようになる。

です。

「シーニュ？ いや、記号」「表象？ いや、象徴」「意識？ いや、自我」「同性愛？ いや、ゲイ」「聾？ いや、ろう」「神々？ いや、神」「妖精？ いや、霊」「しんのすけ？ いや、おら」「オーラ？ いや、引き寄せ」「気づき？ いや、まなび」「詐欺？ いや、投資」「ばくち？ いや、投機」「波？ いや、波動」「悦ばしき学問？ いや、悦ばしき知識」「Haruki Murakami？ いや、Murakami Haruki」「税金？ いや、血税」

「公僕？ いや、公務員」「給付金？ いや、税金」「国債？ いや、借金」「国民？ いや、庶民」「数十万人？ いや、数千人」「もうたくとう？ いや、マオ・ツォートン」「虐待？ いや、しつけ」「強制？ いや、自主的」「加害者？ いや、被害者」「異常？ いや、正常」「患者？ いや、健康体」「ヒト？ いや、ニンゲン様」「文科省管轄？ いや、厚労省管轄」「毒？ いや、薬」「毒饅頭？ いや、デリバティブ」……。

＊

もめるのは当然でしょうね。

＊ヒトは言葉に命をかけている

のが、ふつうですから、やすやすと相手に譲る or 妥協する or 中をとる、なんてことはしないと思われます。徹底抗戦＝仁義なき戦いをするでしょう。ワンちゃんやネコちゃんやスズメちゃんやヒラメちゃんたちのテリトリー争いとは、規模もマジ度も違います。

で、動物行動学＝エソロジーなど知らない素人の浅知恵として、勝手に勘で決めつけて考えていることなのですが、

＊ヒト以外の生物のマーキング行動＝縄張り行動は、「『ここまで』が、わたしのテリトリーだ」という印をつける行為であるのに対し、ヒトの場合には「『ここから』あるいは『ここを中心に』まわり全部が、わたしのテリトリーだ」と主張している。

ように感じられるのです。うちのネコ（※うちの猫の名前です）やほかのネコちゃんたちの行動や、近所で見かけるワンちゃんのおしっこをする仕草を見ていると、「ここまで」という印象をいだきます。

＊「ここまで」という線＝境界を引いている

という感じです。でも、ヒトはどうでしょう？

＊「ここから」「ここを中心に」あたり全部という「面＝面積」を示している

ような気がしてなりません。自分もヒトのはしくれですが、自分の言動を反省しても、そう思います。他人様の言行を拝見しても、そう思えます。言い換えると、

＊ヒトのマーキング行動＝縄張り行動の特徴は、「ここ＝名付けた地点」が中心で、これから先拡大していく、という印をつけることである。

というイメージが強いのです。イメージですから、きわめて個人的な見解ですけど.....。

＊

　で、いったんつくった＝出来上がったヒトのテリトリーが正方形なのか、長方形なのか、円形なのか、楕円形なのか、すごくいびつな形なのか知りませんが、とにかく

＊中心にあったものを、縁（へり）＝辺境＝境近くにまで移動させると、安定している＝有効であると思い込んでいたものが、きわめて不安定で＝有効性が疑われるものになる。

という事態が発生します。なぜなら、

＊「辺境＝境」とは、「他者＝よそ者」と「出会う＝遭遇する＝触れ合う＝衝突する」可能性が強い場である。

からです。

＊「辺境＝境」とは、「他者＝よそ者」による「名付け＝言葉」と接触する場である。

とも言えるでしょう。結局、話は

＊言葉の問題＝言葉という問題

になってしまいます。言葉である以上、当たり前なのですが、思い込み＝錯覚ほど処置に困るものはありません。というか、

＊言葉を使用すること自体が、そもそも「何かの代わりに「その何かではないもの」を用いる」という錯覚を利用した約束事＝ルール＝お遊び＝遊戯＝ゲームである。

という当たり前のことを、ヒトはすっかり忘れてしまうのです。理屈や屁理屈で言って聞かせても、聞きません＝効きません＝利きません。

＊言葉は対象にまたがる＝かぶる＝ダブる＝ああでもありこうでもあることもある＆ ああでもないしこうでもないこともある

なんて言っても、聞く耳を持ちません。

＊「わたしがこう決めたら（＝名付けたら）、こうなの。それ以外は、でたらめ」。

という感じです。もうお手上げです。勝手にしてください、としか言うべき言葉はありません。

＊

きのうご紹介したヒトラーの心理の図式、および、その変種の図式を、上の場合に適用すると以下のようになり、根底にある心理が見えやすく＝見える化されます。

＊このテーマに関しては、わたしこそがいちばんよく知っている権威＝オーソリティー＝当事者＝識者＝スペシャリスト＝エキスパートだ（＝勘違い・思い込み・独占欲）。⇒ 最近、このテーマについて他の者が、わたしのお伺いもなしに他の言葉をつかってくだくだ言っているが、けしからん（＝嫉妬・不安・動揺）。⇒ ちょっと何かを言って脅してやろう（＝憎悪・敵対・攻撃）。⇒ なかなか手強い相手だから論理も実証もへったくれもない、悪態と罵倒で言い負かせる以外に方法はない（＝居直り・ヒステリー・爆発・とちくるい）。

このように単純な図式で表すことも可能です。こうなると対話でも討論でも論戦でも議論でもなくなります。

＊喧嘩です。

喧嘩の当事者以外＝第三者＝局外者の目からは、単なる同ジャンル内での内輪もめ＝内ゲバ＝痴話喧嘩にしか見えません。このように、ヒトには、自分の十八番＝それしか得意ではないもの＝おかぶを取られると、攻撃的になるという習性があります。この苦しみ＝悔しさは、本人＝当事者たちだけにしか分かりません。

自分の十八番を取られたくない。自分の

＊生甲斐であるテリトリーを侵され＝犯されたくない。

そんな心理＝危機感です。傍（はた）からみると「馬鹿みたい」でしかありません。

＊

ところで、みなさん、

＊改名

という言葉がありますが、ご自身、あるいは身近の方で、改名を経験された人がいらっしゃいますか？ 改名という行為をつかさどるテリトリー、つまり、最終的決定とペーパーワークをするのは、家庭裁判所らしいです。なぜ、改名をするのかには、いろいろな理由があるようですね。ググれば、そういた各種の理由についてはすぐに分かりますが、ここでは、

＊名前を変える＝いったん行った名付けを無効にする＝新しく名付ける

という現象＝行動だけに絞って考えてみましょう。

＊

名前を変えるとは、「名前＝思想＝行動＝分身＝生き方」みたいに思い込んでいるヒトという種（しゅ）にとっては、一大事です。考え方や、行動様式をがらりと変える必要が生じる場合もあるでしょう。

＊名前を変えるとは、生まれ変わることである。

と言っても大げさではないと思います。

というか、改名をしたい人の多くは、たとえば、運勢を変えるみたいに、「自分を変えよう＝生まれ変わろう」としているのではないかと「想像＝妄想」しております。改名にさいしては、姓名判断の類の専門家に相談するのではないでしょうか。「印鑑＝ハンコ」で「人生＝運勢」をいい方向にもっていこうと考える人もいますね。

ハンコには、その人の名前が印し＝記し＝標してあるわけですから、象徴的な儀式と言えます。

＊名前を変える or 名前（文字・活字）をいじる

という行動は、テリトリーの線引きをいったん白紙にもどして、線を引き直す、あるいは、線引きを若干修正する＝手直しすることだ、という見方もできそうです。良し悪しを問題にしているのではありません。

＊ヒトは、自分の名前という言葉に願いや祈りを託す。

という習性が、興味深いと思っているだけですので、誤解なさらないようにお願い申し上げます。

また、改名に限らず、変身願望＝イメチェンのために、お化粧やかつらといったお飾

り＝スキル＝ツール、美容整形やエステやジムといった物理的手段の利用もあります。あるいは、自己啓発＝自己改善 or 宗教 or スピリチュアリティといった、セミナーやコーチングや活動や組織や書籍といった、心理的 or メンタルなアプローチの利用もあります。もっとも、後者は多分に言語依存的です。

＊

で、話を改名にもどします。改名は、自分の名前だけはありません。企業が、社名、ブランド、商品名・製品名、ロゴ（※ハンコの変種とみることができそうです）を変えることがあるのも、「願いや祈りを託す」行為ではないでしょうか。

＊固有名詞＝名前という言葉の断片は、断片（＝短いもの＝小さなもの）であるがゆえに、コンパクトで、口に出しやすいし、文字や図形にしやすいし、ポータブル＝持ち運びやすい。そのため、パワーを凝縮させる＝濃密なものにすることが可能だ、というイメージが備わっている。

と言えるように思います。

そのことを実感するのは、スポーツというイベント＝儀式です。テレビ画面に映し出されるスポーツの試合・演技の最中、そして、直後 or 直前の選手へのインタビューでは、必ず、ロゴや、ブランド・社名・製品名の入った看板が登場します。

あれは、

＊名前同士の接触＝衝突＝ラブシーン＝ある意味でガチンコ

にほかなりません。つまり、

＊選手というきわめてメッセージ力の高い信号＝記号と、ロゴ or ブランド or 社名 or 製品名とが、つがっている。

のです。なお、「つがう・番う」をネガティブな意味でとらないでくださいね。辞書をお引きになれば分かりますが、たとえば、広辞苑では、「交尾する」以外に、「組み合う・対（つい）になる」の語義が記してあります。また、「注ぎ合う」という言葉も見えます。いいイメージではありませんか。

これは、

＊愛を交わす行為

と同義です。

　もっとも、政党という名前＝ブランド＝言葉が、有名人やタレントという名前＝ブランド＝言葉を、ただ「有名だ」という特性だけを利用し、選挙に出馬させるという場合には、名前＝ブランド＝言葉同士の「野合」という、下品な言葉を使用したくなります。

　このように、テリトリーの印（しるし）である名前同士が愛を交わす現象がある一方で、テリトリーをめぐっての争いが後を絶たないという現実があります。さきほど述べた、

＊言葉は対象にまたがる＝かぶる＝ダブる＝ああでもありこうでもあることもある＆ああでもないしこうでもないこともある

という、言葉に備わった特性があるからです。

　冒頭に挙げた心理学と精神医学と精神分析という３つのテリトリーは、かなりかぶり＝ダブる部分がありそうです。ある現象があって、それを３つのテリトリーが別々の名で呼んでいる。別々の説明（※名前の延長）を当てている。３つのテリトリーのなかに、さらにまたテリトリーが複数存在する。そんなことも十分考えられます。

＊

　こんなテリトリー問題をかかえているのは、おそらく、この惑星ではヒトだけです。自然界では

＊本能にしたがって、つつましく＝身の程をわきまえて行動している生き物が、それなりのテリトリー問題をかかえながらも、調和して＝ルールに沿って生息している。

とのことです。

＊自然界のルール＝掟＝約束事＝摂理を破ったのは、本能の壊れたヒトだけ

ではないでしょうか？ 成るべくしてこうなったのか？

　そんなことは、ヒトがどんなに賢くても＝ずる賢くても、分からないでしょう。というより、

＊本能が壊れて、言葉という代理品を実物と勘違いして使用する癖がついたヒトは、自然界のルール＝掟＝約束事＝摂理が、見えない＝知覚できない＝分からない＝認識できない事態に陥ってしまっている。

のではないでしょうか。

＊せっかく優秀な知覚器官を用いて知覚した情報＝データを、優秀なシナプスを通して脳に伝達しているにもかかわらず、脳での情報＝データの処理あたりで、ほかの生物には見られない逸脱＝誤作動＝ズレ＝とちくるいが生じるのが常態化している。そのために、ヒトは脳で処理された情報＝データを、とてつもない歪んだ形で意識というスクリーンに映し出している。しかも、そのスクリーンには、本来脳へと伝達されていない映像＝イメージまでが映し出されていることがある。

という感じがしないでもありません。

今述べた点は、「イメージ」という言葉にこだわりながら、「あらわれる・あらわす（7)」2009-05-31、「あらわれる・あらわす（8)」2009-06-01 で、詳しく論じていますので、ご興味のある方だけ、ご一読願います。ややこしそうだとお感じの方は、パスしていただいて、いっこうにかまいません。

本シリーズでは、「イメージ」というきわめていかがわしく＝テキトーなものを、「テリトリー」という切り口で考え直しているだけです。で、このシリーズで、ぜひとも訴えたいことは、

＊イメージとテリトリーに共通するのは、言葉＝名付けであり、言葉＝名付けが、ヒトを自然の摂理に沿った行動から逸脱させている。

ということと、

＊ヒトは、言葉＝名付けに慣れた環境＝テリトリーを、居心地のいい場所として、受け入れているために、後戻りは不可能になっている。

のではないかという危惧です。

きわめて悲観的でネガティブな見解であると非難される向きもあることは、十分承知しております。でも、これが、このアホにとって、

＊書くべきことだ

と信じています。

自分を棚に上げることも、脇に置くこともしません、自分をコロシアム＝殺し編む＝コロセウム＝殺せ産む＝闘技場のど真ん中に据えて、土下座させて、訴えさせてくださ

い。

＊ヒトは変じゃありませんか？ その変がエスカレートしてきていませんか？ 自分の変を真正面に据えて、訴えたいです。

不快な気持ちをいだかれた方には、お詫び申し上げます。ごめんなさい。でも、もしも、この行まで読んでいただけたなら、それだけで嬉しいです。

ここまでお付き合いくださったことに、感謝いたします。どうもありがとうございました。このブログでは、このところ、こんなことばかりを書いています。よろしければ、あす、また、訪ねてきてください。お待ちしております。

石畳 ちの跡をふむ コロシアム

09.06.12　テリトリー（7）

◆テリトリー（7）
2009-06-12 08:39:25｜言葉

昔の話です。「仏文学は澁澤龍彦（しぶさわたつひこ）、独文学は種村季弘（たねむらすえひろ）、英文学は由良君美（ゆらきみよし）」。そんなふうに、一部の人たちが口にしていた時期がありました。共通するのは、博覧強記というところでしょうか。在野、アカデミックな場と、身を置く場所は違いましたが、３人がそれぞれ持ち味を生かしながら、いい仕事をなさっていました。

３人のなかでは、由良君美がいちばん一般的な知名度は低かったような気がします。ただ、専任の大学教員であったために、アカデミックな世界では、著名な方でした。現在、表象文化論というテリトリーがあるのは、由良君美の門下、あるいは、その講義を聞いた人たちがいたからだ。そう言ってもいいように思います。

＊『脱領域の知性』

という邦題の訳書を 1972 年に上梓しています。著者は、

＊ジョージ・スタイナー（George Steiner）

という人で（※スタイナーについては、「翻訳の可能性＝不可能性」2009-01-05 で、直接名指しはしていませんが、「再占領」絡みの文芸評論家として触れています）、原題は、

＊ Extraterritorial

です。スティーブン・スピルバーグのＳＦ映画で邦題が、

＊「E.T.」

という作品がありますが、その原題は、

＊ E.T. the Extra-Terrestrial

です。

似てますよね。

＊ Extraterritorial は、「学問の領域を超えて」という意味

であり（※治外法権＝ extraterritoriality の形容詞形でもあります）、一方の

＊ Extra-Terrestrial は、「地球の外の」という意味

ですね。もっとも the が形容詞につくと、英語では「〇〇な人たち」とか、「〇〇なものたち」という複数名詞みたいに扱われますから、

＊ the Extra-Terrestrial は、「地球外の生物たち」という意味

になりそうです。

いい言葉だと思います。

＊

唐突ですが、

＊脱構築

という言葉がありますね。英語では、

＊ deconstruction

です。ドイツのハイデガーの著作経由で、ジャック・デリダが、déconstruction（デコンストリュクシオン）と仏訳＝造語したのが、英語になったらしいです。この語に「脱構築」という訳語を当てたのも、由良君美だと聞いたことがあります。

海外の新しい潮流で、ものになりそうなものを嗅ぎだす優れた才能の持ち主だったことが、うかがわれます。先見の明があった人だったと、今になって思います。

＊ extraterritorial

＊ extra-terrestrial

＊ deconstruction

と並べてみると、言葉にし難い感慨を覚えます。うーん。あえて言うなら、

＊ヒトという種（しゅ）にではなく、この惑星＝テラ＝地（ち）にも、

少しは希望があるみたいだ、という感じでしょうか。

一方、知（ち）に、希望があるかどうか、これははなはだ疑問です。それよりも、血（ち）のほうが心配です。当初の予感通り、このシリーズは、きな臭い話で終わりました。

抑うつ症状が悪化しているので、きょうはここで止めておきます。処方されている頓服のお薬を、これから飲みます。薬漬けの状態では、記事は書きたくないのです。訪ねてきてくださった方に、こころよりお礼を申し上げます。どうも、ありがとうございました。

たまには、これくらいの長さ＝短さの記事もいいですね。

懐かしさ 思いに耽るも テリトリー

09.06.13　こんなことを書きました（その 10）

◆こんなことを書きました（その 10）
2009-06-13 08:32:54｜言葉

　きょうの「こんなことを書きました（その 10)」は、「こんなことを書きました（その９)」2009-06-02（2009-05-23 から 2009-06-01）の続きです。今回は、2009-06-02 から 2009-06-12 に掲載した記事のダイジェスト版です。短い解説とキーワードが書いてあります。

＊「こんなことを書きました（その９)」2009-06-02：2009-05-23 から 2009-06-01 に書いた記事のダイジェスト版です。

＊「つくる（1)」2009-06-03：「冷蔵庫はお母さんに似ている」という私的な「イメージ」＝印象を持ち出すことにより、「イメージ」というものが、ヒトが個人的レベルで「勝手に」「いだく」という行為の対象となるために、きわめて不安定でいかがわしくテキトーなものになりがちであると指摘しています。その認識から出発し、「ヒトがつくるものは、ヒトに似ている」という、このシリーズの「テーマ」＝「イメージ」へと話を移しています。「イメージ」の根底にある「似ている」と似ている「同じ＝同一である」という言葉＝現象についても、考察しています。また、「つくる」という言葉が、「嘘をつく・偽る・でっちあげる」という意味でもつかわれるという点を重視しています。シリーズの初回なので、このブログの「癖＝変なところ＝偏愛＝こだわり」を、読者に分かってもらおうと努めています。キーワードは、「道具」「衣食住」「身体」「ラスコー」「アルタミラ」「石器」「土器」「真似る」「知覚する」「意識する」「認識する」「ゲイ・サイエンス」「フェティシスト」「表象」「記号」「信号」です。

＊「つくる（2)」2009-06-04：数年前に撮った自分の写真を例に挙げ、「似ている」とはどういうことなのかに、徹底的にこだわって論じています。便宜上、「時間的なズレ」「他者とのズレ」「場面のズレ」という分類をして、その３つのケースを考察しながら、ズレ＝イメージを言葉で論じることが、テキトーな結果しか生まないという「テーマ」を、言葉に演じさせて記事を終えています。このシリーズが、きな臭い話を扱わざるを得ないことを、予感してもいます。キーワードは、「運転免許証」「恥ずかしさ」「流行の変化」「タレント」「芸能人」「トリトメのない記号」「自己差別化」「若さ／老い」「ほんもの／にせもの」「状況・コンテクスト」「近親憎悪」「ライバル意識」「ファシズム・全体主義」

「仮想敵国」です。

＊「つくる（3)」2009-06-05：ヒトが生きていくうえで、絶対に避けることができないものとして、医療・法律・天変地異を挙げ、そのうちで、法律に焦点を絞って、話を進めています。法律がいかに形骸化しつつあるかを、過去の記事を引用しながら、訴えています。法律および掟の形骸化が、権力を後ろ盾にした官僚支配社会を実現させている現実と、その現実の恐ろしさに、読者の注意を向けようと努めています。最後に、このシリーズでもっとも重要な、「物語＝フィクション」という言葉を登場させています。キーワードは、「世捨て人」「戸籍」「在日外国人」「外国人登録」「不法滞在・不法滞在者」「孤独死・孤立死」「野垂れ死に・行き倒れ」「書類作成」「嘘」「罪」「罪悪感」「窃盗」「タブー」「司法」「ハンコ」「権限委譲」「玩具」「キャラクター」「アニメ」「絵本」「ゲーム」です。

＊「つくる（4)」2009-06-06：「共有化されたイメージ」の代表として、ヒトに似せてつくってある玩具やキャラクターを取り上げています。コドモが、玩具を手にて取り動かすという動作に、「.....ごっこ」、つまり、物語＝フィクションつくりの萌芽を見ています。フィクションが表象の働きを前提にしていることを確認したうえで、それが「学習する以前に体得されている」のではないか、という問題を提起しています。旧約聖書の創世記にあるように、「つくる」が、「似せる＝真似る＝学習する」と同時発生的に起きるだけではなく、「学習する以前に体得している」部分があるとする考え方に、うさんくささと魅力という、「両義的な感情＝迷い」を覚えている様子がうかがわれます。「つくる」前には「ルール・手本」を学ぶという考え方を支持しつつ、ヒトには「ルール・手本」の「骨組み・回路と素子」が生得されているという考え方にも、理解を示しています。この２つの考え方が検証不能であることを残念に思いながら、シリーズを打ち止めにしています。キーワードは、「自動車ウォッチング」「人面」「性差」「人形」「創作」「模倣」「模作」「検察官面前調書」「バレーポール」「ゲーム」「俳句」「小説」「話し言葉の習得」「チョムスキー」「言語能力＝ linguistic competence」「言語運用＝ linguistic performance」「読み聞かせ」です。

＊「テリトリー（1)」2009-06-07：本名、ペンネーム、ハンドルネームを含む名前、および、固有名詞について考察しています。さらに、ブランド＝商標、商品名、作品名にまで話を広げ、「名前を付ける＝名付ける」という行為と、「しる・知る・領る」行為、つまり、マーキング行動＝縄張り行動との関係を論じています。ここで「テリトリー」という、このシリーズのタイトルを登場させ、本能が壊れた種（しゅ）としてのヒトの縄張り行動と、他の生き物の本能的な縄張り行動とを比較しています。前者が逸脱して過剰な行動となり、地球規模でとてつもないルール違反をしていると批判しています。シリーズの初回なので、このブログ特有の方法＝戦略についても、自己注解をしています。キーワードは、「村上春樹」「村上龍」「ヴィム・ヴェンダース」「Paris, Texas」「パリ、テキサス」「What's in a name?」「シェークスピア」『ロミオとジュリエット』「レヴィ＝ストロース」「リーバイ・ストラウス」「リーバイス」「mark」「地球温暖化」「大不況」「人口増加」「文明の衝突」「貧富の格差」「資本主義経済・市場経済」「ミツバチ」「doomsayer」

「オジンバ心」「ネーミング」です。キーフレーズは、「ヒトは、狂わないために必死に狂っている」です。直接書かなかったキーワードは、「噂の真相」「三田誠広」です。

＊「テリトリー（2)」2009-06-08：この日の記事の前編。「知る・知っている」「名付ける」と、マーキング行動＝縄張り行動との関係を論じています。その関係を、アレゴリー調の「な、いいだろう？」というタイトルのおとぎ話によって、「ほのめかす」試みをしています。キーワードは、「村上春樹」「know」「ape」「monkey」「言葉」「わたしのもの」です。

＊「テリトリー（3)」2009-06-08：この日の記事の後編。前編のおとぎ話に関連して、人名を例に取り、このブログでよくつかう「表象」「記号」「信号」「イメージ」というツールを紹介しています。ツールのなかで「イメージ」が、固有名詞と親和性があることを指摘しています。テリトリーというテーマを扱う以上、このシリーズがきな臭く、また、生臭くなるだろうとの予感を述べています。以前、きな臭いテーマを論じた直後に、深刻な抑うつ症状に見舞われた体験についても語っています。「名付けの応用編」＝「強烈なイメージを喚起するもの」としての「プレゼンテーション」に触れ、プレゼンの指南書そのものがプレゼンとなる仕組みを指摘し、耳に快い言葉や、元気の出る言葉に、注意を向ける必要があると訴えています。このように、一貫してイメージ批判を展開しています。キーワードは、「共有化されたイメージ」「名前の持つパワー」「思考停止」です。

＊「テリトリー（4)」2009-06-09：第２次世界大戦後の約 10 年間にヒットした洋画の邦題を例に取り、「名前に祈り・願いを込める」というヒトの行動を考察しています。次に、名前の延長上にある流行語・標語・キャッチフレーズ・歌詞など、「共有化されたイメージ」を喚起するコンパクトな言葉が、縄張り行動の拡大を意図する国家や組織によって利用されるという、いわゆるイメージ操作＝情報操作について論じ、警戒しようと読者に呼びかけています。前日の「な、いいだろう？」の続編である「テラ取り物語」というおとぎ話を掲載しています。長めの物語になったために、ＰＣのモニターでは読みづらいものとなったと反省しています。「テラ取り物語」の内容は、シリアスで風刺的なものですが、いつか日をあらためて、再読していただければ幸いです。けっこう、マジで書きました。おとぎ話のあとには、「言葉によってヒトを動かす」ことの恐ろしい面について触れています。キーワードは、「縁起をかつぐ」「濁点」「内容ではなく、イメージだ！」「テラ」「掟」「支配者」「シャーマン」「占い師」「予言・予言者)」「預言・預言者」「演説」「マニフェスト」「公約」「キャンペーン」「マーケティング」「プロパガンダ」「教義」「教え」「法律」「判決」です。

＊「テリトリー（5)」2009-06-10：まず、幼い頃に自分が自分を一人称で呼べなかったこと、また、おそらくその名残として、このブログではあからさまな一人称の使用を意識的に避けていることに触れています。そこから、言葉に対する個人レベルでのこだわりへと話を移し、ネットを利用したメール、ブログ、掲示板などを通し、「書くこと」を実践している人口が、以前に比べ近年飛躍的に増えたのではないかとの感想を述べていま

す。また、ネット上での文章表現がかなり自由である点に、共感を示しています。ケータイやネットという、比較的新しい、発展途上にある媒体に対する、国家、および、社会による規制には反対だと述べています。数ある「〇〇恐怖症」のなかで、xenophobia（外国人に対する恐怖・憎しみ・嫌悪）と homophobia（同性愛者に対する恐怖・憎しみ・嫌悪）の２つを取り上げ、その特徴的な面を指摘しています。その考察をもとに、ヒトラーの心理を単純に図式化し、それを少しずつ変形させながら、ヒトの他の行動にある背後の心理をさぐっています。きな臭い話です。キーワードは、「検閲」「戒厳令」「夜間外出禁止令」「田中小実昌」「翻訳」「小鷹信光」「ＴＩＭＥ誌」「ユダヤ人」「変人」「以心伝心」「出るくいは打たれる」「長い物には巻かれろ」「近親憎悪」「仮想敵国」「世襲制王朝」です。

＊「テリトリー（6）」2009-06-11：心理学、精神医学、精神分析がたがいに重なり合う部分をもった学問＝研究領域＝テリトリーであることを指摘しています。ヒトが自分の得意とする分野＝テリトリーを侵された時に示す、敵対的な行動が、学問だけでなく、官僚、政治家、職業集団、宗教組織などでも広くみとめられることを指摘しています。「しる・知る・知識」＝「知（ち）」と、「土地・地面・大地」＝「地」（ち）とをめぐって、これまで長きにわたってヒトが血（ち）を流してきたことを指摘しています。テリトリーの構造を分析し、周辺部で、名付け争い＝言葉の争いが起こるという、ヒトのテリトリー特有の現象について、意見を述べています。スポーツや政治の場で、「名前同士が愛を交わす」という現象について、例を挙げて論じています。論調は次第に悲観的でネガティブになっていき、最後のほうは、へこんでしまい、ほとんど泣きそうになって書いています。大の苦手な、きな臭い話になり落ち込む＝自業自得という、予想通りの展開になりましたが、書くべきことを書いたという意味では悔いはありません。キーワードは、「文学部心理学科」「医学部」「実験心理学」「臨床心理学」「カウンセリング」「統計」「数値化」「理系／文系」「岸田秀」「フロイト」「ユング」「改名」「姓名判断」「印鑑」「変身願望」「自己啓発・自己改善」「社名」「ブランド」「製品名・商品名」「ロゴ」「スポーツ」「スポーツ選手」「政党」「有名人」「選挙」「イメージ」「コロシアム・闘技場」「ち」です。

＊「テリトリー（7）」2009-06-12：澁澤龍彦、種村季弘、由良君美の３人が活躍していた頃の回想から始まり、extraterritorial（＝学問の領域を超えて」）、extra-terrestrial（＝地球の外の）、deconstruction（＝脱構築）という３つの言葉について、思うところを述べています。きな臭く生臭い話に終始した前日の余波を受けてか、抑うつ症状が悪化していたので、短く記事を終えています。シリーズも終わりました。このシリーズを終えたことで、言葉について、自分が書くべきことはすべて書いてしまったという思いが強く出ています。キーワードは、『脱領域の知性』「ジョージ・スタイナー」「スティーブン・スピルバーグ」「E.T. the Extra-Terrestrial」「E.T.」「ハイデガー」「ジャック・デリダ」「déconstruction」「地（ち）」「知（ち）」「血（ち）」です。直接書かなかったキーワードは、「高山宏」です。

以上です。

第２部　09.06.18～09.06.26

09.06.18　なわ＝わな

◆なわ＝わな
2009-06-18 16:29:13｜言葉

広辞苑で「な」から「なあ」までの各項目を、ざっと斜め読みしてみるとおもしろい。そんな意味のことを「テリトリー（2)」2009-06-08 に書きました。実は、この数日間斜め読みではなくて、けっこう真剣に何度も読んでいました。じっくり時間をかけて読むのです。

で、思うことがたくさんありました。そうやっていろいろ考えているうちに、「わ」についても、気になったので、ついでに「わ」から「わあい」までの項目も読んでいました。これが、またすごく刺激的だったのです。

あれこれ考えたことは、走り書きメモに残してありますが、収拾がつかないくらいのさまざまな思いや発見がありました。収拾がつかないというのは、

＊結びつくようで結びつかない＝つながるようでつながらない

という意味です。言葉はきわめて柔軟、言い換えるときわめてテキトーな側面をもっているので、

＊たいていのことは結びつく＝つながる、つまり、こじつけることがきる

と言えます。

かなり強引にくっつけても、別に学問や研究をしているのではありませんから、遠慮や配慮はいりません。単なるお遊びです。まして、こめかみに付近に指をやり、「こんなでたらめと出まかせをやっているけど、ここは大丈夫だろうか」などという心配も無用です。というか、どうでもいいことです。しょせん、お遊びです。

とは言うものの、本人はそれなりに真剣に遊んでいます。みなさんも、趣味には、あ

る程度、真面目に取り組んでいらっしゃいませんか？ ゲームでも、お絵かきでも、楽しいと熱中してしまい、つい真剣になってしまいますよね。それと、たぶん同じです。

「な」～「なあ」と「わ」～「わあい」まで、１項目ずつ順番に丹念に読んでいったり、時にはアト・ランダムにあちこち読みながら、常にあたまにあったのは、

「禍福はあざなえる縄のごとし」

ということわざでした。申し遅れましたが、冒頭で「な」に加えて唐突に「わ」が出てきたのは、このことわざに促されたという事情があったからです。

＊

小学生の時に、週に１回くらい、始業前に体育館で一種の全校集会みたいなものがあり、そのさいに校長がちょっとした話をすることが恒例化していました。その話の１つのなかで、上に書いたことわざを聞いた覚えがあり、その意味が頭のなかで、

＊縄をなう＝縄をよる、という視覚的なイメージ

として、今も残っているようです。

で、どういうわけか、先週あたりから、その縄をなうイメージがとりついたようにあたまから去らないため、そのイメージに身を任せながら、広辞苑を読んだり、考えたり、メモを書いたり、家事や親の介護をしているあいだにも、そのイメージがちらつくのをぼんやりと意識して、この数日間を過ごしていました。

どういうことなのでしょう？ そろそろ縄とはお別れしたい、というわけで、きょうは、お祓いのつもりで、

＊なわ＝わな

について書いてみたいと思います。

＊

縄をなった＝よった経験はありません。藁（わら）や麻（あさ）など、純植物性の縄を最後に目にした、あるいは触れてみたのはいつだったか、思い出すことはできません。けさ、洗濯物を

＊プラスチック製のロープ

に干しているときに、ふとロープを観察してみたのですが、その構造がかつて目にした縄そっくりなのに気づきました。

３、４日前に、色違いなだけで同じメーカーのロープを、違う目的で使用するために――もしも他人様が見たとすれば、さぞかし暗い顔をしながら――デイパックに詰め込んでいた時には、そのことにはぜんぜん気がつきませんでした。

小学校の低学年の頃か就学前に、好奇心からだったのでしょう、縄をいじり、ほどいてみた鮮明な記憶があります。ですから、幸せと不幸せは縄をより合わせるように交互に訪れるという、ことわざの意味が、縄をほどく動作を逆にした視覚的イメージ＝映像という形で、今でもよみがえってくるのかもしれません。

わのなのこくおうのいん――という言葉が手元のメモにあります。今、辞書で調べて「倭奴国王印」という漢字を当てるのを、久しぶりに確認にしました。どうして「倭奴」という漢字が用いられているのかも、思い出しましたが、歴史的経緯に関心はありません。今、気になって仕方がないのは、

＊わのな

という具合に、

＊「わ」と「な」が、「の」を挟む形で並んでいる

ということです。それだけで、つまり、そのようにひらがなが並んでいる様（さま）が不思議だという思いをいだいただけで、キーを叩く動作が、一時停止＝フリーズしてしまいました。

＊どうして？ どういうわけで？ なんで？ なぜ？ どうなってるの？

「わ」と「な」についての辞書以上の知識＝由来＝情報は、調べれば、分かるかもしれません。ネット検索という便利な方法＝可能性が目の前にあります。でも、調べる気にはなりません。いわゆる

＊「事実」

に興味はありません。

靄（もや）なのか霧（きり）なのか霞（かすみ）なのか、分かりませんが、

＊不思議という宙ぶらりんに、からだとあたまをあずけ＝まかせたままでいる

ほうが、よほど快いからです。

＊「わ」は「わ」、「な」は「な」でいい。それが、なぜか「の」に隔たれて列を成している。得体の知れない３つの音＝文字＝「言葉の物質性」がむき出しのまま並んでいる。その具体的＝物質的「事実」と向かい合っていること自体が、なぜか心地よい。

「なぜか」を解決することで覚えるであろう知的興奮や、好奇心を満足させることで得られるであろう刺激も、ぞくぞくわくわくするような経験であるにちがいありません。でも、そうした気持ちを味わいたいという欲求はありません。少なくとも今は、ありません。

　ある文字と文字が隣り合わせに、あるいは、ほかの文字を挟みながらも連なっている＝並んでいる＝フレーズを成している。その不思議に身をまかせるのが、なぜか心地よいのです。あえて、ここで心地よさを断念し、「なぜか」を言葉にしてみるなら、

＊知っているはずの、あるいは、知ることができるであろう言葉の意味＝「言葉の抽象性」を忘れ、あるいは、知らずに、まるで初めて接する外国語のように、「言葉の物質性」だけと遭遇＝出合っているという夢のような体験が心地よい。

と言えるかもしれません。

　でも、このように「なぜか」を、とりあえず、他の言葉に置き換えてみたところで、「なぜか」を打ち消すことはとうていできそうにもありません。その意味では、言葉の「抽象性」だの「物質性」だのという言葉を「超えて」、

＊あらゆる個々の言葉は、在る＝存在する＝自らを露呈したままでいる

と言うべきでしょうか。

＊

　話は変わりますが、広辞苑では、「な」に「己・汝」という漢字＝感字を当てた項目があります。それによると、一人称の語義の次に、

＊「転じて」

二人称となったという記述が見えます。この「転じて」とか「訛って」という言葉が好きです。言葉がおもしろいのは、この「転じて」や「訛って」があるからだと思います。

一方、「わ」に「我・吾」を当てた項目にも、「転じて」という説明はないものの、一人称と二人称の語義が並んでいます。

ちなみに、ヨーロッパの言語では、二人称単数、つまり、「あなた・きみ」に相当するものが２種類存在する場合が珍しくありません。単純化して説明すると、（１）親しいあいだ柄でつかう、（２）丁寧さを込めたり社交上の敬称としてつかう、の２通りがあるということらしいです。細かいニュアンスまでは、知りません。

たとえば、若い頃にかじったドイツ語とフランス語とでは、（１）と（２）のニュアンスがだいぶ違っていたはずです。確か、キリスト教の神に対して話しかけるさいに、どちらを用いるかも異なっていたような記憶があります。それとも、スペイン語とドイツ語とのあいだでの相違だったのか.....。懸命に思い出そうとしていますが、駄目です。忘れました。

で、日本語の、

＊「な・己・汝」

と

＊「わ・我・吾」

とに、共通して起こっている、一人称と二人称の「混在＝同居＝共存」という現象が、とても不思議＝おもしろいです。そういえば、

＊「てまえ・手前」

も、同じようなつかい方ができますね。たった今、辞典で確かめてみましたが、やはり、そうした用法が記述されています。ひょっとしてと思い、ついでに、

＊「おまえ・御前」

も調べてみましたが、こっちのほうには一人称の語義が記載されていませんでした。ついでのついでに、

＊「てめえ・手前」

も調べてみます。こっちは「てまえ・手前」と激似。一人称と二人称の語義が、併記されています。

不思議な感じがします。考えていると、わくわくしてきます。

＊自分と目の前にいる相手を同じ言葉で指す

のですから、不思議です。とはいっても、その曖昧さが分からないわけではありません。よーく、考えると、

＊不思議さが後退していき、曖昧さのほうに近しさ＝親しさを感じる

ようになります。

そんなことを、この数日間考えたり感じたりしてきました。今、ふたたび、考えてみると、当然のことながら、強度の既視感を覚えます。広辞苑で「な」から「なあ」、そして「わ」から「わあい」にいたる各項目を丹念に読みながら、

＊自分と目の前にいる他者を、同じ言葉で呼ぶ。

ということについて、ずっと考えていました。なぜか、「な」から「なあ」、そして「わ」から「わあい」のあいだに並ぶ項目たちが、かぶり＝かさなり＝つながり＝からみ合うように思えてならなのです。

＊単なる混乱＝錯覚＝「とちくるい」である。

と言うこともできるでしょう。混乱＝錯覚＝「とちくるい」がこんなに心地よいものなら、喜んで受け入れます。

でも、そもそも言葉が、混乱＝錯覚＝「とちくるい」であることは、

＊誰もが忘れがちな「周知の事実」

ではなかったでしょうか。

＊

いつの間にか、ネコ（※うちの猫の名前です）が窓際にいます。ガラス越しに、外を見ています。「吾輩は猫である。名前はまだ無い」。いや、うちのネコはネコです。な、ネコ。

＊な・名 ＝ なまえ・名前 ＝ てまえ・手前 ＝ わ・我・吾＝ な・己・汝

ということでしょうか。

＊な

と

＊わ

は、やっぱり不思議です。この２つの言葉＝音をつぶやくと、

＊「自分」と目の前にいる or ある「相手＝対象＝存在」を同じ言葉で指す

という、やわらかな近しさ＝親しさを感じます。なかなか去らない既視感にシンクロして、合掌に似た仕草で藁か何かをより合わせて縄をつくるイメージが重なります。「わ」と「な」をより合わせる。

＊なわ、わな、なわ、わな、なわ、わな.....

と、キーを操作しモニターに文字を映し出しながら、映し出された文字を声に出して読んでみる＝呼んでみる。

　もしかして.....と、あたまに浮かんだことを実行してみる。

＊「わな・罠・羂」

を辞典で引いて、説明を読んでみると、やはり、縄（なわ）が出てきます。

＊この符合（ふごう）＝符号（ふごう）＝付合（つけあい）は、只事ではない。

というのは、「かく・かける（5)」2009-05-17 で書いたフレーズです。思わず、

＊わななく

などいう、くだらないオヤジギャグが出てきたところで、きょうは、とめておきます。久しぶりに記事を書いたので、疲れました。

　つたない記事を、お読みいただいて、どうもありがとうございました。では、また。

　縄張りの 境で鳴いた 猫に負け

09.06.19　台風と卵巣

◆台風と卵巣
2009-06-19 16:32:47｜言葉

　普遍性について考えています。このブログでは、

＊今、ここにある物・事・現象を「知覚＝観察」し、手持の知識と記憶をたよりに考える。

という横着で無精なスタンスをとっています。でも、これなら、死ぬ、あるいは意識がなくなる直前まで続けられそうです。その意味では、自然体に近い方法とも言えそうです。早い話が、自分には、これしかないのですけど。

　きのうあたりから、

＊「な」と「わ」に重なる＝かぶさる＝ダブる形で、「普遍性」という言葉

が気になり始めました。広辞苑に記載されている複数の「な」と「わ」という「言葉＝文字」が短くて、大和言葉系の言葉が多くを占めるのに対し、「普遍性」というのは、明らかに漢語系です。「普遍性 or 普遍」という語がもともと古い中国語にあったのか、明治以降に、この国の人たちが欧米の思想や事物を取り入れるさいに、ヨーロッパ系の言葉に当てた「訳語」の１つなのかは知りません。

　もっとも、「訳語」の場合には、（１）漢語としてあった言葉を借用して当てた、（２）造語した、の２つの場合が考えられます。このへんの事情に詳しい人として、柳父章氏、山岡洋一氏の名があたまに浮かびますが、お勉強と本を読むのが苦手で億劫なので、書棚や、本を詰めたボール箱を漁ったり、ネット検索はしません。自分で勝手に、ああでもあるこうでもある、ああでもないこうでもない、と考える方法をとります。

　というわけで、「普遍性」が、上述の（１）なのか（２）なのかは保留し、勝手に空想します。で、さっそく、でまかせで書きますが、「普遍性」とは、英語で言えば、

＊ universality

か

＊ generality

の訳語であると考えるのが妥当でしょう。もし、そうであれば、各語のもとになりそうなのは、英語でいえば、

＊ universe

や

＊ general か genus か generate

ではないかと思い、それらの単語と、その語源を辞書で調べてみるうちに、思いがけない何かが出てきたり、それがきっかけで何かを思いついたり＝妄想したりすることになるのではないか、と期待しています。ちなみに、

＊辞書を引く

のは、

＊「お勉強」

であると同時に、自分にとっては

＊「お遊び」

でもあります。ですので、個人的には、

＊「お勉強」＋「お遊び」＝ 楽問 ＝ ゲイ・サイエンス＝「楽しいお勉強ごっこ」≠ 学問・研究

みたいに考えております。

　で、大きめの英和辞典を複数引いてみたところ、

＊ universe（宇宙）とは、台風のイメージだ

ということになりました。

イメージとは、個人的レベルにおいて、「いだかられる＝抱かれる＝だっこされる」ものですので、テキトーであり、顕著な個人差がみとめられます。

で、universe（宇宙）のイメージは、中心に目があって、まわりに「雲＝気体状の水や他の物質の粒子」が渦を巻いている感じがします。レーダーがとらえた台風の映像を左右に引き延ばしたような、銀河系か何かの想像図にも似ています。

宇宙には、大きさが異なるだけで似た形のものが、あちこちにある。そんなことを聞いた覚えがあります。フラクタルとは、また違うみたいですけど、詳しいことは忘れました。そういえば、

＊曼荼羅（まんだら）

なんていうのもありましたね。曼荼羅については、複数の異なる説明を読んだことがありますが、さっぱり分かりませんでした。ただ、

＊分かったら、大変だ

という感じだけは、何となく分かるような気がする代物（しろもの）です。個人的には、曼荼羅は苦手です。曼荼羅自体は「？？」なので、それはそれでいいのですが、曼荼羅についていろいろ言っている人たちが、とても

＊うさんくさい

のです。いかがわしさに関していえば、このブログを書いているアホなど、足元にもおよびません。個人的には、むしろ、

＊マクロコスモス œ 無限大、

とか、

＊ミクロコスモス Œ 無限大（※これらはあくまでも個人的な＝でたらめな「式」です、念のため）

という西洋経由の「言葉＝イメージ」のほうが、しっくりきます。言い換えると、貝殻のイメージでしょうか。海辺なんかに行くと、貝殻がたくさん目につく場所があります。つまり、

＊大小さまざま、形もさまざま、生きているのか死んでいるのかも分からない。でも、どこか似ている。それが数えきれないほど、いる and / or ある。

というイメージです。

＊

ところで、

＊宇宙（universe）は、とてつもない 1 つの大きな台風である

と、

＊宇宙（universe）は、大小さまざまな貝殻状をして、あちこちに散らばっている＝遍在している

とが、実は同じことだったりしたら、おもしろいでしょうね。言葉、あるいは、その他の多種多様な表象（※「何かを「その「何か」以外のもの」で代用する」という仕組みにおける「その「何か」以外のもの」）を用いてしか、

＊まわりを近くできない＝知覚できない

ヒトという種（しゅ）にとって、

＊知覚する、ひいては、意識する＝思考する行為が、「枠のなかにある」＝「限界がある」＝「縄（or 線 ）で囲われている」

とするなら、実は、

＊宇宙という、多面的な、あるいは、とてつもなく大きなもの

の一側面 or 一部にしかすぎない、上述の 2 つのイメージ、つまり、「大きな台風」と「遍在する貝殻たち」というイメージが、矛盾したもの＝異なったものとして、知覚 or 意識 or 思考されても、ぜんぜん矛盾はないわけです。

一方の、

＊ general / genus / generate とは、おびただしい数の卵細胞の詰まった卵巣である。

と比喩的に言えるような気がします。ちなみに、比喩もきわめて個人的なレベルで発生

するイメージです。

　したがって、みなさんは、きっとここで首をかしげていらっしゃるわけです。「このアホは、いったい何を考えているのだ？」という具合にです。で、このアホのイメージしている「卵巣」とは、産む＝生む＝有無までには、まだ至っていないという意味で、

＊可能性のかたまり

とも言えそうです。

　ここでの「卵巣」には、深い意味はありません。「あの人は、医者の卵だ」という具合に、可能性の比喩として用いられる「卵（たまご）」とも読める「卵（らん）＝卵子・卵細胞・生殖細胞」が多数詰まっている、というイメージです。

＊

　さて、冒頭から以上の部分までの文章では、たくさんの比喩とイメージが用いられています。

＊比喩もイメージも、「何かを「その「何か」以外のもの」で代用する」という仕組み

ですから、一種の表象だと言えないこともありません。いずれにせよ、

＊それ自体が表象である言葉において、表象の仕組みが、比喩やイメージという形で採用されている。

わけです。いわば、

＊表象の入れ子構造

です。

　この点は、とても重要です。ヒトである限り、この事態を回避できる可能性はゼロである、と考えられます。ただ、ヒトはふつう、自分がこの事態に直面し、この事態を生きていることを意識したりはしません。一生のうちで、こうした事態を一度も意識しないで亡くなっていくヒトのほうが、圧倒的に多いにちがいありません。

　こんなふうに、この事態を「当たり前＝事実」みたいに考えながら、この記事を書いてはいるものの、果たして、この「表象」および「表象の入れ子構造」という事態＝仕組み＝メカニズムが、実際にヒトの知覚と意識において機能しているのかどうか、また、

それが検証できるのかどうかについて、知る術（すべ）はありません。そう感じている＝勘じている＝観じているだけです。

ですので、ここに書かれていることはすべて、

＊でまかせだ

と居直ることもできます。

ただし、居直るためには、それ相応の覚悟と度胸が要りますが、このブログの開設者＝アホには、それだけの覚悟も度胸もありません。単に、きわめて鈍感＝愚鈍なだけではなかろうか、と薄々感じてはおりますけど、残念ながら、愚鈍さを検証するためには愚鈍さ以外 or 以上の素質が必要みたいなのです。

ともかく、

＊それ自体が表象である言葉において、表象の仕組みが、比喩やイメージという形で採用されている。

という前提で、言葉をつづっていきます。

＊

以上のことを再確認し、断ったうえで、以上の前提で書き続けますが、比喩とイメージをつかって言葉をつづるさいに気をつけなければならないことは、

＊バランス＝舵（かじ）取り

です。

体系的、論理的、終始一貫、筋道を立てるという類（たぐい）のレトリックや操作が苦手なので、ややもすると、「勘＝直感＝直観＝でまかせ」にたより、「比喩＝たとえ＝こじつけ」を多用し、イメージを優先し、テキトーで、勝手気ままに、言葉を並べていく傾向があることは、自分なりに意識しております。

とはいえ、まったく筋道を立てないで文章をつづったり、でまかせだけで言葉を連ねていくことなど、やってみたくても、できそうもありません。ちなみに、きのうは、

＊偶然性＝でまかせ＝宙ぶらりんに、ほぼ全面的に身をまかせる形で、１編の記事を書いてみよう

という、「実験＝ある意味では横着」を試みました。さぞかし読みにくかったのではないか、と思います。ごめんなさい。ああいう「実験」（※あれでも、それなりに本気なのです、念のため）が好きなのです。いつか、またやってみたいです。

なお、きのうの記事を書くにあたって意識した、

＊「宙ぶらりん」という考え方

については、「かく・かける（2）」2009-05-15、「かく・かける（4）」2009-05-16、「かく・かける（5）」2009-05-17、「かく・かける（7）」2009-05-19、「かく・かける（8）」2009-05-19で、かなり本気になって論じています。万が一、ご興味をお持ちの方がいらっしゃいましたら、ぜひ、お読み願います。個人的には、非常に愛着のある＝重要なテーマです。

＊

そんな感じで、企み＝戦略をもって、記事を書いていますが、わりと自分で気をつかっていることは、比喩とイメージを用いる場合には、

＊Ａの代わりにＢを用いていると常に意識しよう

という、きわめてシンプルなルールなのです。バランス＝舵取りとは、そういう意味です。

＊Ａの代わりにＢを用いるということは、ＡとＢが似ていると感じているからだ。

という前提があります。でも、あくまでも、重点はＡにあるべきで、

＊いつの間にか、話がＢに変わってしまっている

という迂闊（うかつ）な＝アホな事態だけは、アホながらも絶対に避けたいと思っています。でも、やってしまうんです。やはり、根っからアホなようです。過去のブログ記事を読み直していて、「あらまあアホな」と思うことが、いかに多いことか。

結局のところ、

＊比喩やイメージを扱うさいにも、ある種の論理的操作が必要である。

とも言えそうです。よく考えれば、当たり前ですね。さもなきゃ、

＊現代詩

みたいな文章になります。

　今、不意に「現代詩」という言葉が出ちゃいましたが、これって死語ですか？ 最近、あまり見聞きした記憶がありません。学生時代には、現代詩研究会などという名称で、サークル活動をしている人たちが大学にいましたが、現在はどうなのでしょう？ たった今、ネット検索してみましたが、まだいらっしゃるみたいですね。

　思い返してみると、自分のまわりだけの現象だったのか、もっと広範囲でそうした、つかわれ方がなされていたのか知りませんが、

＊何でもありぃ＝分けわかんない

みたいな意味で、「現代詩みたい」とか「現代詩的な表現 or 文体 or 文章」などという、ほぼ悪態＝ほぼ罵倒と言っていいフレーズをよく耳にしました。今述べたフレーズのニュアンスがピンとこない方は、このブログの文章をご覧ください。好例というやつです。きょうの記事のタイトルを、一瞥（いちべつ）なさるだけでもかまいません。

「現代詩みたい」とか「現代詩的な表現 or 文体 or 文章」とは、こんな＝そんな感じです。つまり、「何でもありぃ＝分けわかんない」ですよね。

　そもそも、定型詩をのぞく、

＊詩、特に自由詩

というのは、論理や筋道とは隔たりのある＝遠ざかった言葉のつかい方をするジャンルであるわけですから、イメージもどき、比喩もどき、自動書記もどき、総書記もどき、がんもどき、明らかなこじつけ、支離滅裂、尻滅裂、荒唐無稽、江東剥鶏に満ちていて当然なのです。いや、むしろ、そうでなければならない＝必然なのです。

　ところで、新聞社主催の

＊オーサー・ビジット

なんかで常連＝レギュラーのように出てくる「詩人」、小学校や中学校の国語の教科書に引用されている詩を書いている人たちがいます。あれは、

＊詩人

ではなく、単なる私人か、

＊コピーライター

です。誰とは名指しませんが、「何でもありぃ＝分けわかんない」とは正反対の、非常に読みやすい詩を書き、実際にＣＭなんかでも詩と称するものを提供＝販売なさっている人がいますが、立派なコピーライターです。

別に両者の境をつくる必要はありませんが、ややこしいですね。お子さんたちが、

＊勘違い

をします。「十△歳のハローワーク」的な意味で混乱をします。その意味では罪作りなお方です。私見を申しますと、詩人は兼業であるはずです。詩人としてだけで食べていける人は、詩人とは言えません。

純文学を書いたり文学賞の下読みをしたり文学賞の審査委員になったり、あるいは、俳句を詠んだり読んだり評したりして、食べていける人はいるでしょう。でも、詩を書くだけでご飯を食べられる人はいない、と思います。「詩人・コピーライター」なら別ですが。でも、そうした肩書きを目にしたことはありません。

＊

話を、コピー（※コピーライターのコピーです）から詩にもどします。現代詩は、「詩」という言葉に、

＊駄目押しの「現代」という冠をいただいている

のですから、こうなると、もう「何でもありぃ＝分けわかんない」です。ごちそうさま＝もう結構＝悪いけどそろそろ＝勝手にしやがれ、というわけです。

＊

話を現代詩から、普遍性にもどします。普遍性についてのイメージという点から、ここまで書いてきたことの要点を、箇条書きにしてみます。

＊「な」と「わ」に「重なる＝かぶさる＝ダブる」形での、「普遍性」という言葉。

＊マクロコスモス œ 無限大、ミクロコスモス Œ 無限大。

＊宇宙（universe）は、とてつもない１つの大きな台風である。

＊宇宙（universe）は、大小さまざまな貝殻状をして、あちこちに散らばっている＝遍在している。

＊ general / genus / generate とは、おびただしい数の卵細胞の詰まった卵巣である。

＊卵巣とは、産む＝生む＝有無までには、まだ至らない可能性のかたまりである。

普遍性についての、ほとんど根拠のないに等しいイメージについては、だいたい、こんなところでけりをつけておきます。なお、今見てきましたような、

＊イメージのテキトーさ

については、「あらわれる・あらわす（8）」2009-06-01 と、「つくる（1）」2009-06-03 でかなり詳しく論じておりますので、ご興味のある方は、ご一読ください。

＊

さて、普遍性を思考の対象とする場合には、上述のような形でイメージを利用する以外に、さきほど述べました、筋道を立てて考えるという作業＝選択肢＝アプローチも活用できます。上で箇条書きにしたイメージがあまりにも頼りないので、今度は、ちょっと理詰めっぽく考えてみます。

まず、１つのアプローチとして、普遍性の類語を挙げてみましょう。

＊一般性、汎用性、万能、国際標準、共通性、有効性

という言葉があたまに浮かびます。

次のアプローチとして、辞書っぽい定義をしてみましょう。たとえば、

＊普遍性とは、広い範囲にわたる物・事・現象に通じるということである。

と言えそうです。辞書によっては、普遍性の定義として、「すべてのもの or 場合」「に通じる or 当てはまる」と言い切ってしまっている、すごく勇気のある＝ナイーブな＝能天気な言葉を並べているものもあります。

そこまで言うとかえって嘘くさいというか、空想＝妄想＝迷妄＝「あり得ない！」＝「いい過ぎだってば！」の、においがプンプンするので、この記事では、上記のように控

えめな定義にしておきます。

　何となく、

＊普遍性の感じ

がつかめてきたような気がします。こうやって理詰めで考えたあと、さきほどの頼りない＝テキトーなイメージに再度目をやると、違ったものに見えてきます。これも一種の

＊バランス＝舵取り

でしょうか。

　で、イメージと類語と定義を見比べているうちに、ある言葉があたまに浮かんできました。それは、

＊つかう・つかえる

です。

＊「うん、これは、つかえるよね」

などと日常会話でつかっている「つかう・つかえる」の意味です。広辞苑に書いてあることを自分なりに整理すると、

＊「つかう・使う・遣う・支ふ・付かふ・着かふ・使える・遣える・仕える・事える・支える・閊える・痞える」

があり、とりわけ、

＊「つかえる・使える・仕える・事える」がつかえる

ように思われます。要するに、

＊用を足す・用にあてる・役に立つ・役割を果たす・ちゃんとはたらいてくれる

と言い換えることが可能だということです。こうやって言い換えてみると、普遍性の類語として挙げた、

＊汎用性、国際標準、有効性とも、かぶって＝ダブってくる

ような気もします。

　で、上記の定義からすると、「用を足す・用にあてる・役に立つ・役割を果たす・ちゃんとはたらいてくれる」という言葉たちの意味内容が、広い範囲でフルに「つかえる」という一種のトートロジーになります。簡単に言うなら、

＊「うん、これは、つかえるよね」⇒「おおっ、これは、すごい、何にでもつかえるじゃん」

という具合に、

＊「つかえる」の適用範囲が広がり、機能が強化される

わけです。これって、ひょっとして、

＊言葉

のことではないでしょうか？ つまり、

＊言葉以外に、広い適用範囲と強い機能を発揮してくれる、すごい「何でも代行屋さん」はない。

とも言えるわけで、この状態＝「ありよう」＝現象こそ、まさしく、

＊言葉は何とでも言える

とか、

＊言葉は何でもつなげる＝こじつける

とか、

＊ヒトは、森羅万象を名づけることにより、森羅万象を手にしたという錯覚に陥る

など、このブログでさまざまなバリエーションで言い換えてきた、

＊言葉の「節操のなさ」＝「何（誰）とでもくっつく性質」＝「何（誰）とでも番（つが）う習性」（※「つがう」を辞書で引いてみてください、エッチなニュアンスの語義だ

けがあるわけではありませんので、念のため）

に「通じる＝つかえる」特性だ、と言わざるを得ません。でも、ここで肝に銘じなければならないことは、

＊言葉は、ヒトによってつくられたものであり、また、不断につくられつつある＝生成しつつある「過程＝運動」のさなかにある。

という点です。

＊言葉は人工物である

と簡単に言ってもよろしいかと思います。当初、普遍性という言葉でイメージしていたものは、人工物とは異なる

＊人知 or 人為を超えたもの＝人知 or 人為とは無縁のもの

だったので、ここでがっくりきました。

＊「またもや、言葉か！」＝ Not again!

という感じです。とはいえ、

＊普遍性をそなえたものの 1 例として、言葉があるのではないか

というところまで来たのは、収穫と言えば収穫でしょう。プラスに考えておきます。でも、このまま終わらせたくないので、引き続き、普遍性について考えてみます。

　ここまで辛抱して読んでいただいた方に、感謝いたします。では、また。

09.06.20　出る

◆出る

2009-06-20 17:17:03｜言葉

　きのうのまとめをしたいと思います。

＊普遍性をそなえたものの１例として、言葉があるのではないか。

でした。はっきり申しまして、へこみました。あまりにも当たり前のフレーズが出てきたからです。でも、ものは言いようでして、きのうの結論めいた、上のフレーズは

＊最大級のアイロニー＝反語＝皮肉

であるとも言えそうです。実は、普遍性という言葉というか雲か霞（かすみ）のようなイメージについて考えながら、あたまの隅に常にあるのは、

＊真理、法則、掟

といったいかめしい顔つきの言葉なのです。そうした

＊脅し文句＝「どうだ、参ったか！」＝「きみ、きみ、わしじゃよ。ええっつ？ わしをご存じじゃない？ 帰りたまえ」

に近い言葉を前にして、ひざまずいたり、崇め奉ったり、平身低頭してかしこまるなどいう、しおらしさは、生来の偏屈者とはいえ、若い頃には少しはありましたが、いつの間にかなくなりました。

　でも、世の中には、そうした言葉たちにあたまが上がらない人たちが大勢いる、ひょっとすると大多数の人がそうなのではないか、という感じはいたします。そうとしか思えない言動を、毎日、メディアやネットを通して見聞きしているからです。

　真理、法則、掟といった言葉が強面なのに対し、

＊「言葉＝言語」

には、

＊トリトメがない

というイメージをいだいています。イメージですから、きわめて個人的なものです。ですので、

＊真理、法則、掟にくらべて、「言葉＝言語」は、普遍性とか普遍的という言葉にそぐわ

ない

感じがします。ひょっとすると、当たり前すぎて＝そぎすぎて、かえってそぐわなく感じられるのかもしれません。いや、よく考えると、そういう感じでもありません。やっぱり、そぐわない感じがします。どうしてなんでしょう。理屈っぽく申しますと、

＊「言葉＝言語」は普遍的なものである。or「言葉＝言語」には普遍性がそなわっている。

と

＊真理（or 法則 or 掟）は普遍的なものである。or 真理（or 法則 or 掟）には普遍性がそなわっている。

とのあいだに、何か異質なもの＝差異＝違いを感じる。ということなのですが、どうして、そう感じるのでしょう。

　たぶん、

＊「言葉＝言語」にいくつかの「側面＝レベル＝種類」がある

ことが、上述の違和感をいだかせているのではないかと思えてきました。言葉＝言語を分けてみます。まず、単純に考えましょう。

＊ word(s) ＝個々の言葉・単語・語句

＊ language ＝日本語、英語という意味での言葉・言語

　これだけでも、だいぶすっきりします。普遍性と相性のいいのは、もちろん、後者です。後者をさらに変形＝言い換えてみます。

＊言語という「仕組み＝体系」

似たようなフレーズとして、ソシュールの用語を思い出しますが、ここでは、ソシュールが何を考えていたかは、無視しましょう。「正しい」／「正しくない」ごっこには、興味はありません。だいいち、ソシュールさんには、個人的に何の義理もないです。ですから、もしかしてソシュールの用語に詳しい方がいらっしゃいましたら、このアホブログに書いてある用語もどきは、

＊ソシュールとは関係ない

と思ってください。「この記事に並べてあるゴタクが、ソシュール様と関係がないなんて、当たり前だろ」という幻聴らしき声が聞こえましたが、励ましのお言葉として、傾聴しておきます。ありがとうございました。

＊

　で、

＊言語という「仕組み＝体系」は、普遍的なものである。or 言語という「仕組み＝体系」には、普遍性がそなわっている。

と変形＝言い換えて、ようやくしっくりきました。この「しっくり」は「いかめしい」とか「強面」とか「偉そう」とか「もっともらしい」という意味です。つまり、念のために申し添えますが、「しっくりきました」は、当然のことながら、アイロニー＝反語です。

＊反語と言うのは、Ａと言いながら、暗に「Ａなんかじゃない」と言う、ほのめかし

ですから、

＊たぶんに感情的なもの

です。

「ＡかＡではないか」は別にして、暗に＝それとなく＝ほぼバレバレで＝阿吽の呼吸を前提として＝以心伝心という土俵の上で＝相手が分かってくれるものと期待して「Ａです」というのですから、おそらく、反語を口にしたり、文字として書いているさいには、

＊口がへの字

になっているはずです。

　屈折した心理が口元に表れる。そんな「文学的＝非文学的」な言い方もできるでしょう。実際に、唇がへの字状にひん曲がっていなくても、気持ちのうえで、どこかが

＊ひん曲がっている

はずです。または、へそが曲がっているはずです。

＊英国人はアイロニーをよく口にする

というステレオタイプ化されたイメージというか、フレーズがあります。こうした決めつけは決めつけでしかないわけですが、然るべきレベルにまで、

＊一般化された

決めつけの場合には、かなり言えている＝説得力がある＝つかえる＝「普遍性のかけらがありそうに思える」ものがあります。アイロニーは、英国人の書いた文章の読みにくさの原因の１つでもあります。英国人にも、いろいろな人がいますが、まあいわゆるひとつのいっぱんろんとして、軽く読んでください。

＊

いつだったか、まだ仕事をしていた頃に、必要に迫られて英国人の書いた本を読まされたことがありますが、その本はかなり辛辣（しんらつ）な視点から書かれていて、ぞくぞくするほどのアイロニーに満ちていて、

＊偏屈者＝へそ曲がり

としては、けっこう楽しく読んでしまいました。でも、

＊アイロニーだと思い込んでいた部分

が、アイロニーでなかったり、つまり、

＊誤解や曲解

をしていたり、英国人ならきっと口をへの字に曲げてひっそりと笑っただろう部分に、ぜんぜん反応しなかったなんてことが頻繁にあったにちがいありません。ちなみに、その本は英語で読みました。あれを日本語に訳すのは、至難の業（わざ）ではないでしょうか。

＊アイロニーらしきところを、アイロニーっぽく訳す

のは、さぞかし大変だと思います。

そもそもアイロニーらしき個所に気づくかどうか、という基本的な読解の問題もあります。慣れていないと、このアホみたいに独り相撲＝１人で納得＝自己満足に陥ります。数カ月後に、その本の邦訳が出版されていましたので、興味津々ではありましたが、自分の誤解と曲解をまともに目にするのが嫌で、結局、邦訳のほうには目を通しませんでした。

英国人のアイロニーって、こっちの身体的および精神的な調子がいい時にはすごくおもしろいのですが、気が滅入っている時なんかは、うっとうしくて、読んでいてしんどくなり、辟易（へきえき）します。読むさいに隘路（あいろ）になるわけです。隘路似。つまり、

＊Ａと言いながら、暗に「Ａなんかじゃない」と言う

という芸当＝レトリックは、部外者には分かりにくいということです。言い換えると、

＊普遍的ではない

ということです。

さきほど述べた、阿吽の呼吸や以心伝心という、わけの分からない前提がないと、つまり、

＊共通した知識・情報・素地がないと、通じ合えない

という現象が、アイロニーには伴います。ユーモアとか、ウィットとか、ダジャレなどにおいても、事情はほぼ同じではないかと思います。以上の例が示すように、アイロニーといった少々やっかいなものが、異言語間では通じにくい＝翻訳しにくいという現象からも、

＊「language ＝日本語、英語という意味での言葉・言語」は、「言語という仕組み＝体系」にそなわっているような、普遍性をそなえていない。

と言ってもいいような気がします。

でも、「そんなことはない。現に、うちらの言葉＝言語には普遍性がある」といって頑張る人は、どの「language ＝日本語、英語という意味での言葉・言語」を母語とする人たちもいます。あるいは、自分の母語ではなくても、ある特定の「language ＝日本語、英語という意味での言葉・言語」を擁護する＝依怙贔屓（えこひいき）する人たちのなかに、その言語の普遍性を主張する人たちが少なからずいます。

＊○○語には普遍性がある ＝ ○○語は普遍的だ

と言い張るのです。有名なところでは、18 世紀に、

＊「明晰（めいせき）でないものは、フランス語ではない」＝「わけの分かんないもの

は、フラ語じゃないざんす」

というフレーズを残した、アントワーヌ・リヴァロール（Antoine Rivarol）というフランスの人がいました。そのフレーズに続けて、今や

＊「世界語」

と呼ばれもすることがある、

＊元はと言えばイングランドの言語

や、ヨーロッパの諸言語のなかでは、わりと

＊由緒あるとされている言語

や、かつてエリートとして教育されたヨーロッパ人であれば、インテリの「必須科目」として当然身に付けていたはずの

＊２つの古典語

を、コテンパンにではなく、比較的やんわりと罵倒してもいるのですが、なぜか、上記のフレーズだけが際立っています。ちなみに、そのフレーズは、

＊「フランス語の普遍性についての論考」

とでも訳せる論文のなかで書かれていたものらしいです。繰り返します。

＊フランス語の普遍性

ですよ。「フランス語の」を、たとえば、「日本語の」とか、「英語の」とか、「中国語の」とかに置き換えてみると、その発想の異様さ＝不気味さ＝鈍感さ＝愚鈍さ＝「アホちゃうか」がお分かりになると思います。それとも、

＊〇〇語の普遍性

という発想に「納得＝加担」なさいますか？

＊

ここで、ふと、あたまに浮かんだ言葉があります。

＊中華思想

です。中国にだけでなく、フランスについても、よくこの言葉が用いられていた記憶があります。いずれにせよ、昔の話です。お若い方のなかには、

＊「中華思想＝チューカシソー」

という言葉の意味やニュアンスが不明だ＝分かんない、とおっしゃる向きもあるかと思います。大した意味はありませんので、辞書や百科辞典を引くとか、ネット検索なんかしないで、「中華思想＝チューカシソー」の意味なんて、

＊テキトー＝どうでもいい

でいきましょう。

＊「中華」

という２文字から成る漢字を見つめていると何となく、イメージがわいてきませんか。中華料理ですか？ いい線いっていると思います。いえ、ジョーダンではありません。まして、からかってもいません。この記事を書いているアホはへそ曲がりで偏屈ですが、

＊自分がされて嫌なことは、相手にしない

主義です。アホにもアホなりに、仁義みたいなものがあるのです。で、もし、中華料理をイメージなさったのであれば、わりと本格的な、回転式の台で料理を回しながらみんなでつつく、中華料理をイメージしてください。

＊中心があって、まわる

という点が大切です。

＊「中国」

という言葉＝文字（※あくまでも、文字ですよ）も、じっと見ていると、イメージがわいてきますね。「正しい」／「正しくない」なんてどうでもいいんです。辞書も、グーグル or ヤフーも、今は要りません。調べるとか、検索するなんて、ごくふつうに生活する＝生きていく＝息ていくうえでは、必要のない行為です。

　で、あくまでも、文字＝活字として、

＊中

＊華

＊国

という

＊漢字＝感字

を感じとりましょう＝体感しましょう。こちらも、じっとモニターの文字を見つめてみますので、どうぞ、ご一緒に――。

　……。

　で、ついでにあたまに浮かんだ

＊宙

という漢字も、キーを叩いて、モニターに映し出し、眺めてみます。

＊「おお、この既視感は何？」

　今のは、ジョーダン＝ジョークです。ごめんなさい。それにしても、なんて、わざとらしい＝芝居じみた、驚きの言葉＝セリフなのでしょう。でも、びっくりしたことは事実です。

＊台風

という言葉がデジャ・ヴュをともなって、あたまのなかに出てきたのです。きのうの記事で書いた、

＊宇宙（universe）は、とてつもない１つの大きな台風である。

＊ universe（宇宙）のイメージは、中心に目があって、まわりに「雲＝気体状の水や他の物質の粒子」が渦を巻いている感じがします。レーダーがとらえた台風の映像を左右に引き延ばしたような、銀河系か何かの想像図にも似ています。

の、

＊「宇宙」のイメージである「台風」

です。

　そのイメージを漢語系の言葉ではなく、大和言葉系の言葉に置き換えると、

＊なか・まんなか・どまんなか・なかあい

とか、

＊まる・まんまる・まろ

でしょうか。

＊「台風の目」

がらみで、

＊め・目・芽・雌・女

なんていうのも、なかなか言えてる＝つかえる＝つながっている気がしませんか。だって、

＊ general / genus / generate とは、おびただしい数の卵細胞の詰まった卵巣である。

＊卵巣とは、産む＝生む＝有無までには、まだ至らない可能性のかたまりである。

とも、きのうの記事では書いているのですから、これこそまさに、一昨日の記事のなかで、過去の記事から自己輸血＝自己引用した、

＊この符合（ふごう）＝符号（ふごう）＝付合（つけあい）は、只事ではない。

です。

　念のために、申しますが、たった今書きました一連の、

＊隠喩的な構造をもつダジャレ＝オヤジギャグ

は、うんうんと唸ったり、あたまを絞って出しているわけではありません。

＊出てくる

んです。

　きのうの記事で触れた、

＊宙ぶらりん（※ここでも、なぜか「宙」が出てきました）

に身をまかせていると出てくるんです。アドリブ＝即興と言ってもいいかもしれません。偶然性に、身をまかせる。そんなふうに言うと、カッコーのつけすぎですが、イメージ的には、お腹をうえにして万歳状態にしている、情けないワンちゃんの格好を思い出してください。

＊どうにでもしてちょーだい、びろーん

という感じです。

＊マラルメ師の気配を感じる

なんて、以前なら書きそうな状況なのですが、今はマラルメなどどうでもいいという気分なので、「マラルメ師の気配を感じる」なんて書きません、といいながら、その名だけを書くくらいなものです。以前は、マラルメ

＊「師」

なんて具合に、半分おふざけで書いていましたが、現在では、マラルメという固有名詞は、

＊「さしみのつま」

みたいな感じなのです。このことについては、いつか機会を改めて書きたいと思っています。

＊

　で、こんなふうに、言葉をつづって＝書きつらねていると、符合＝符号＝付合（つけあい）＝偶然が起きます。すると、ちょっと困ったことになるのです。さきほど、書いたことに自信がもてなくなってくるのです。どういうことかと申しますと、こうした符合＝符号＝付合（つけあい）＝偶然は、

＊ word(s) ＝ 個々の言葉・単語・語句

＊ language ＝ 日本語、英語という意味での言葉・言語

＊言語という仕組み＝体系

という３つのうちの、どのレベル＝側面で起こっているか、という疑問がわいてくるのです。ダジャレ（＝オヤジギャグ）というのは、ふつう、

＊ある特定の言語、

つまり、上の「language ＝日本語、英語という意味での言葉・言語」の枠のなかで出てくるというか、つくるというか、発するというか、とにかく出てきます。

　それに対し、

＊抽象的に「言葉＝言語」をとらえる、つまり上で述べた「言語という仕組み＝体系」のなかで、あるいは「言語という仕組み＝体系」として、生じている＝出てくる

とは、考えにくいのです。

＊今、ここにあるというレベルでの「こ・と・ば」、

つまり、上の「word(s) ＝個々の言葉・単語・語句」として、出てきているわけですから、そのレベルで起きているのでしょうか。そうだと言えばそうだと言えるような気もしますが、しっくりきません。

＊言葉は何とでも言える

とか、

＊言葉は何でもつなげる＝こじつける

という調子で、片づけてしまうのがいちばん楽です。色気を出して、言葉を

＊分けてしまうから、分からなくなる

ということならば、よく分かるような気がします。

＊分けるということは、分かることであると同時に、分からなくことである。

というのは、日常的によく経験することです。たとえば、トイレの壁の染みに、

＊何かを見てしまう＝何かがあらわれる＝何かが出てくる

というのは、

＊「分かる＝分ける」の一種

です。

＊ＡにＢを見てしまうと、Ａが見えなくなる

という錯覚については、

＊若い女性の横顔にも見えたり、高齢の女性の横顔にも見えたりする絵＝だまし絵

という、よく知られた例で経験なさったことがおありではないでしょうか。あれと似ています＝ほぼ同じです。

＊何かが分かる＝見えるということは、一方で、何かが分からなくなる＝見えなくなることである。

とも言えそうです。

　それに対し、

＊言葉は何とでも言える

というのは、

＊いろいろなものが、同時に分かる＝見える＝出てくる

という感じにきわめて近いように思われます。「分かる＝見える＝出てくる」のなかでは、

＊出てくる

に注目したいです。この「出てくる」＝「出る」は、きのうの記事で触れました

＊「宙ぶらりん」

と同じく、個人的にはとても重要な意味とイメージをもつ言葉です。「あらわれる・あらわす（4)」2009-05-28 で、うんちにからめて、熱く論じていますので、ご一読いただければ幸いです。

＊

　で、とにかく、言葉において、いろいろなものが一挙に

＊どばっと出てくる

のですが、これは、

＊ぐちゃぐちゃ＝ごちゃごちゃ

と、きわめて似た状況でもあります。単なる「ぐちゃぐちゃ＝ごちゃごちゃ」よりも、

＊言葉のぐちゃぐちゃ＝ごちゃごちゃ

や

＊言葉になる前のぐちゃぐちゃ＝ごちゃごちゃ

のほうが、イメージ的に分かっていただける可能性が高いように思いますが、そもそもイメージというテキトーなものなので、

＊分かってもらう＝伝えることは、かなり難しい

かな、とも思っております。

　伝える努力を半ば放棄し、思い切って飛躍した言い方をしますと、なにしろ、今、問題にしているのは、

＊言葉になる前の○○

の

＊○○

なのです。これが、

＊普遍性ということを考える＝思考の対象とするさいのカギ

になるはずだと、論理や理屈のレベルにおいてというよりも、

＊勘のレベルで信じている＝思い込んでいる＝妄想している

のです。

＊

　ごめんなさい。家事の都合で、そろそろ台所に行かなくてはなりません。

　この続きはあらためて書きます。この行まで付き合ってくださったこころ優しいあなたに、感謝いたします。では、また。

09.06.21　うんちと言葉

◆うんちと言葉
2009-06-21 14:34:19｜言葉

　引き続き、普遍性について考えています。当初は、

＊真理、法則、掟

といった抽象的な言葉で何か書けるかな、と予想＝期待していましたが、結局は、いつものように

＊言葉の問題

に行き着いてしまいました。

＊抽象的とか、概念というもの

は、その「幽霊＝霞か雲か＝曖昧模糊＝地に足が着いていない」的特性があるために、

＊普遍性

という、これまた幽霊的なものと相性がいいのではないかという先入観がありました。でも、あれこれと考えをめぐらせているうちに、これは自分には扱えそうもない、という思いが強くなってきました。かなり論理的で、系統立った操作が必要みたいなのです。自分がもっとも苦手とする操作＝作業＝手仕事です。

潔く、勘＝感＝観＝間＝関と、でまかせと、アドリブ＝即興でいこうとあらためて思いました。いずれにせよ、とりあえず、自分のあたまの整理のために、きのう書いたことをまとめてみます。

言葉＝言語の普遍性とは、

１）「言語という仕組み＝体系」レベルでの話＝フィクションであり、

２）「language ＝日本語、英語という意味での言葉・言語」レベルでの普遍性はあり得ず、

３）「word(s) ＝個々の言葉・単語・語句」レベルにおいて具体的に「出来事＝事件」として起きている。

と言えそうです。

蛇足ながら、２）のレベルでの「ŒŒ 語には普遍性がある」という神話＝与太話＝妄言は根強く残っているようです。この現象は、政治と大いに関係があると推測できます。かつて世界史の授業で習ったことを思い出すと、とりわけ、戦時下や戦争の気配が濃厚になると、その副産物として各国で立ち現れるような気がします。

＊

以上が、きのうのまとめです。次に、きのうの記事の最後のほうで、触れた問題を振り返ってみます。大切な部分を引用します。

＊言葉は何とでも言える。

＊いろいろなものが、同時に「分かる＝見える＝出てくる」。

＊言葉のぐちゃぐちゃ＝ごちゃごちゃ。

＊言葉になる前のぐちゃぐちゃ＝ごちゃごちゃ。

＊「言葉になる前の○○」の「○○」が問題だ。

　今、上で並べたあたりが、

＊「言葉＝言語」における普遍性

を考える＝思考の対象とするさいにカギとなる、と思っています＝妄想しています。

　一昨日の記事で書きましたように、

＊普遍性とは、広い範囲にわたる物・事・現象に通じるということである。

が、このブログで採用している普遍性の定義です。「言葉＝言語」に限って言えば、上で引用した、

＊言葉は何とでも言える。

がもっとも簡単な言い方です。実際、ものは言いようというフレーズと似て、

＊言葉には「Ａを、ＢともＣともＹともＺとも言える」という、パワー＝厚顔さ＝たくましさ＝でたらめさがある。

ようです。これは、

＊Ａというものをヒトが知覚したり、意識したり、思考したりするうえで限界がある。

　つまり、ぶっちゃけた話が、

＊ヒトは、Ａというものを、知覚も意識も思考も「できない」。「できる」と考えるのはヒトが勝手に判断している＝思い込んでいるだけである。

ということであり、「いや、そんなことはない。できるんだよ」と断言できるヒトは、ヨタ＝ガセ＝ウソを言っているヒトか、ヒトではない存在＝「ひとでなし」（※比喩です）である、ということでもあります。

　そうした前提に立つと、

＊「言葉＝言語」の普遍性とは、でたらめと同義

という帰結になりますが、このフレーズはネガティブなどころか、きわめてポジティブな表現であるとも言えます。問題は、

＊でたらめ

という言葉が辱（はずかし）められているという事態そのものにあるのです。

＊

「でたらめ」の類語を挙げましょう。「でまかせ・いい加減・テキトー・非論理的.....」といった言葉があたまに浮かびます。「正しくない」「首尾一貫していない」「混乱している」「とちくるっている」というフレーズも、「でたらめ」に通じるものがありますね。

「真理」や「事実」と対極にあるという見方も可能であるように思われますが、そうした「真理」や「事実」を擁護するスタンスこそが、「正しくない」「首尾一貫していない」「混乱している」「とちくるっている」と言うべきでしょう。なぜなら、

＊ヒトの世界には、「真理」や「事実」が、「正しくない」「首尾一貫していない」「混乱している」「とちくるっている」としか考えられない事例が多すぎる。

からです。まして＆したがって、

＊法則や法律や掟

といった人為的なにおいがぷんぷんするものが、「正しくない」「首尾一貫していない」「混乱している」「とちくるっている」場合が多すぎるのは容易に理解できるだろうと思います。

　その意味で、「正しくない」「首尾一貫していない」「混乱している」「とちくるっている」の親戚と思われる「でたらめ」は、きわめてポジティブなのです。

で、「真理」や「事実」ですが、これもまた、

＊ヒトの主観の産物以外の何ものでもない

わけで、

＊実証や検証や証明という操作＝作業＝手続き

を行って、万全を期したところで、

＊万全を期した主体がヒトである限り、せいぜい「努力賞」か「敢闘賞」でしかない

わけです。ということは、早い話が、

＊普遍性や普遍的という言葉自体が、うさんくさい「お話＝フィクション」である。

という可能性がきわめて高い、いや、その可能性は 100 %と言ってもかまわないような気がします。

　でも、

＊普遍性や普遍的という言葉が、ヒトに勇気と希望と誇りと傲慢さを与えるという意味では、普遍性をそなえており、普遍的である。

とも言えるわけで、その線で話を進めるほうが、ヒトには受けそうです。何だか

＊被虐的史観

をめぐる議論に似てきましたので、きな臭い話が苦手な自分としては、このあたりをつつくのは、このへんで止めておきたいと思います。

＊

　さて、きのうの記事の最後のほうで「出てきた」フレーズを、ふたたび、以下にコピペさせてください。

＊言葉は何とでも言える。

＊いろいろなものが、同時に分かる＝見える＝出てくる。

＊言葉のぐちゃぐちゃ＝ごちゃごちゃ。

＊言葉になる前のぐちゃぐちゃ＝ごちゃごちゃ。

＊「言葉になる前の〇〇」の「〇〇」が問題だ。

　なんと言っても、個人的に気になるのは、最後のフレーズです。「〇〇」って何なのでしょう？ あえて、言葉ではなく記号というか印（しるし）というか、とにかく音読する場合に、ためらってしまうような「〇〇」をワープロソフトを用いて入力したのは、その

＊音読不可能性

ゆえになのです。ここで、ひょっとしてジャック・デリダを想起なさった方も、いらっしゃるかと思います。きのう、

＊ソシュールは関係ない

とか

＊マラルメという固有名詞は「さしみのつま」みたいな感じ

と書いたのと同様の事情があり、

＊ジャック・デリダは関係ない＝ジャック・デリダという固有名詞は「さしみのつま」みたいな感じ

だとご理解ください。実は、このところ、

＊固有名詞一掃運動（※撲滅運動などという、きな臭い言葉は使いませんけど）

を、ちまちましこしこと１匹でやっております。昨今の内外の情勢をニュースを通じて見聞きしているうちに、いかなる形であろうと、

＊ファシズム＝全体主義につながる個人崇拝

には加担したくない気分に見舞われているのです。自分を含めたヒトという種（しゅ）にそなわっている

＊根強いファシズム＝全体主義好き

あるいは、

＊テリトリーつくり習性＝縄張り行動

には、ほとほと愛想が尽きたのです。きわめて短絡的な言い方ですが、

＊ファシズム＝全体主義の根っこには、テリトリーつくり習性＝縄張り行動があり、そのまた根っこにあるのが、ヒト特有の名づけ行動および名前への執着癖がある。

のではないかと思ったのです。

　そんなわけで、この記事の左にあるブログ専用のカレンダーをご覧になるとお分かりになると存じますが、一時は、唯一他者との接点であるブログも書きたくなくなり、消えてしまいたくなるほど嫌気がさしたのです。

「テリトリー（1)」2009-06-07 から「テリトリー（7)」2009-06-12 にいたる７本の記事を書いているうちに、またもや、次第にきな臭く生臭い話になっていき、うつのどん底に落ち込むという、いつぞやと同じことを繰り返したのです。

　自業自得。その「いつぞや」での失敗については、２月の終わりから、３月にかけての解説の合間に弁解という形で記してあります。今回のさらなる失敗＝醜態で、

＊やっぱり、アホは直らない＝治らない。アホは学習しない＝学習できない。

と、痛感しました次第です。はい。

＊

　で、

＊音読不可能性

に話をもどします。このブログの文章というのは、最初のほうの記事から順を追って見ていくとお分かりになるように、徐々に変になってきています。「変」というのは、

＊「読みにくい」

とも言えますが、これでも、レイアウトを工夫して、頭に＊のついた部分＝フレーズを拾い読みしながら、ちょっと辛抱して読み通していただければ、大まかな意味がとれるようにしているつもりなのです。

　ただ、「＝」や「or」なんかがあったりしますし、また、頭に「＊」のついた部分＝フレーズの「＊」を無視して一続きの文章として読もうとすると、読みにくいのは確かか

と思います。言い換えると、

＊音読に適していない

または、

＊読んでいてつかえる

あるいは、

＊翻訳ソフトを用いては他の言語に訳せない

ということです。

＊書き言葉が読みやすいことは、必ずしも自然な＝本来的な（＝ authentic）ことではない。まして、言葉そのものをテーマとする場合には、読みやすいことはむしろ不自然なことにならざるを得ない。

という意味のことを、学生時代に教えてくれた人がいました。蓮實重彦を連想なさった方がいらっしゃってもおかしくはありませんが、さきほど、デリダ、ソシュール、マラルメについて述べたのと同じ理由で、あえて、

＊蓮實重彦は関係ない

と書いておきます。ちなみに、上述の「読んでいてつかえる」については、

＊ジル・ドゥルーズは関係ない

としておきます（※このあたりについては、反語＝隘路似という言葉を思い出しましょう）。そうした「読みにくさ」についてのテクニカルな＝事務的な事情は、さておき、

＊「言葉になる前の〇〇」の「〇〇」が問題だ。

における、

＊音読不可能性

とは、どういうことなのかを説明させてください。「言葉になる前の」とは、正確には、

＊「言葉を発する寸前の」

という意味で考えています。少しずらして＝言い換えて

＊「名付ける寸前の」

で説明すると分かりやすいかもしれません。たとえば、今、あなたの目の前に

＊ＰＣのモニター

があるとします。そのモニターを

＊じっと見つめて

ください。

「モニター」なり「ディスプレー」なり「画面」なり「液晶」なり「画素」なり「映像」なり「文字」なり「活字」なり「ツールバー」なり「画面に付いたほこり」なり「画面に付いた指紋」なり「い」なり「の」なり「前」なり「モ」なり.....。

　いろいろな「部分＝パート＝パーツ＝もの」や、いろいろな「目についた語＝あたまのなかで発音された音（おん）＝目についた文字 or 活字」や、いろいろな「イメージ＝こと＝目の前にはなく、あたまのなかで連想されるもの・こと＝目の前にはなく、あたまのなかに浮かんでくるもの・こと」などが視界に入って意識されたり、あるいは、視界には入っていないのにあたまのなかに浮かぶもの・ことが

＊立ちあらわれる＝出てくる＝意識される

と思います。で、その

＊「時＝瞬間＝あいだ＝あいま＝さなか＝際｜（さい）」

に何らかの

＊音（おん）が口から発せられた＝漏れた＝出た

とします。「発せられた＝漏れた＝出た」が過去形＝完了形であることに注目してください。その行為は、もう終わった＝完了したとします。おおいにあり得ることですが、たとえば、ある人が、

＊「つまんない」

とつぶやいたとします。きっと、その人は、モニターに映し出された、あるアホの書いた文章に

＊意識を留めた＝止めた＝停めた or 注いだ

結果として、「つまんない」とつぶやいたのでしょう。

　なかには、「モニター」とつぶやいた方もいらっしゃるかもしれません。また、「い」とつぶやいたり、「そろそろ画面をクリーナーを使って拭かなきゃ」と少々長めの言葉を吐かれた方がいても不思議はありません。

　どのような言葉が口から出てきたにせよ、その

＊言葉が口から出る直前＝寸前

があったはずです。また、その直前＝寸前に、その人の

＊あたまのなかで、「何かが起きていた＝意識されていた＝意識というスクリーンに映っていた」

はずだと仮定されます。

　あくまでも、仮定です。心理学者でも脳を研究している専門家でもない、一介のアホが思い込んでいる＝妄想しているだけですが、とりあえず、「仮定される」としておいてください。さもないと、前へ進めないのです。

　で、その言葉が口から出る直前＝寸前に、その人のあたまのなかで、「「何か」が起きていた＝意識されていた＝意識というスクリーンに映っていた」と

＊仮定される、その「何か」

が、さきほどのフレーズにあった

＊○○

なのです。ただし、その

＊○○と、その直後に口から出た音（おん）＝言葉とのあいだに、何らかの関係性＝関

連性＝つながりがあるとは、その音を発した人にも、その人以外の第三者にも、分からない＝知り得ない。

という点が、決定的に重要だと思うのです。

　ややこしいですね。うんと単純化して説明させてください。

＊口から出てきた音（おん）＝言葉は、肛門から出てきたうんちと同様に、それを出したとされる人から、離れて、存在するものとなってしまっている。

ということなのです。

　ちょっと長いですが、きのうもご紹介した、個人的にとても愛着のある「あらわれる・あらわす（4)」2009-05-28 という記事から、いちばん大切な部分をコピペさせてください。

＊

★もし、「自己＝自我」と「他者＝世界」という別個のものが存在するならば、比喩的に言えば、それは固体のように存在するのではなく、液体か気体のように、時によって混じり合ったり、分離し合ったりする形で存在するのでしょう。

　たとえば、ぼけーっとしている時、うとうとしている時、眠っている時、あるいは、動転している時、精神的にかなり動揺している時、ショックを受けた時、酔っ払っている（※たいていはオトナだけですが）時、あるいは、何かに夢中になっている時のオトナ、コドモ、赤ちゃんは、両者が混じり合った状態にあるはずです。

　これは、何かに書いてあったことの引用ではなく、自分の実感でもあります。

　で、うんちですが、今述べたような、

＊「自己＝自我」と「他者＝世界」の「間（＝ま・あいだ・あわい＝際｜（さい・きわ)」で、ぷかぷかと浮いている。

感じをイメージしてください。

＊「出る」とは、「出た」のちには、「ぷかぷか浮いている」状態に落ち着く。

と言えそうな気もします。躍動感までは行かない

＊浮揚感（＝運動）

つまり

＊ぷかぷか

が非常に重要です。

＊出たものは「静止」してはいない。

という点に、注目していただきたいのです。

　いったん出たものは、必ず、何らかの運動に誘発されます。比喩をつかえば、いったん「出た」給料も、給付金も、保険金も、うんちも、太陽も、声も、にきびも、幽霊も（※「出る」という言葉の話をしていますので「出ました」)、新刊書も、選挙候補者も、テレビドラマの役者も、家出したお父さん or お母さん or お子さんも、火も、くいも、そのまま静止し続けることはありません。

　一方、「あわられる」場合には、静止したまま、しつこく居座ることも、往々にしてありそうです。真価、効果、正体、正義の味方、英雄、悪の権化、〇〇の神様、救世主、影響、才能、成果、結果などです。もっとも、影響や結果みたいに、「出る」とも言うものは、概して「不安定」な気がします。

＊

　★から以上までが引用部分です。

　何を言いたいのかと申しますと、

＊言葉は、うんちにきわめて似ている

ということなのですが、ここで念を押させてください。このブログを書いているアホは、スカトロジスト（scatologist）ではなく、言葉のフェティシスト（fetishist）を自任しておりますので、お間違えのないようにお願い申し上げます。うんちには非常に感謝していますが、それ以上に、言葉を愛しております。

　で、言葉とうんちですが、特に重要と思われる共通点を挙げます。

１）「あらわれる」のではなく、「出した」結果「出る」ものである。

２）いったん出た後には、長い目で見た場合、じっと静止していることなく、ぷかぷか浮遊するという運動へと至る＝参加する。（※「うんちの化石を最近テレビで見たぞ」というお言葉に対しては、たとえ、静止して化石化するとしても、化石に至るまでには内部で「運動」が生じるという屁理屈を用意いたしました、念のため。）

３）出た後の浮遊＝液化＝気化＝運動は、「宙ぶらりん＝宇宙を支配する偶然性」とほぼ同義である。（※「同一」や「同様」ではなく、「同義」という言葉をつかっていることに注目してください。あくまでも、「義＝意味＝わけ」、つまり、ヒトという種（しゅ）のはしくれである、あるアホがでっちあげたフィクション＝おとぎ話です。）

４）ヒトは誰もがうんちをし、また、誰もが広義の言葉を発するという意味で、うんちも言葉も、ヒトという種においての普遍性をそなえている。

５）ぐちゃぐちゃごちゃごちゃしている。

以上５つの点が、共通しているように思われます。念のために、申し添えますが、本気です。正気だと言う自信も勇気もありませんが、本気です。この部分は、おふざけで書いているのではありません。

＊

うんちは、この惑星において、何かに帰していきます。音（おん）である言葉は、それを発した＝出したヒト自身やその他のヒトを含め、何らかのもの・こと・現象とのあいだで影響をおよぼし合います。あくまでも、個人的なイメージですが、

＊うんち＝言葉は、「め・目・芽」を中心部にそなえた台風のようであり、海辺および海底に遍在するよく似た形の貝殻たちのようであり、おびただしい数の卵細胞の詰まった卵巣のようである。

と言えるような気がします。繰り返しになりますが、これは、

＊ universe（＝ 宇宙 ＝ 語源：１点を中心にまわる）

および

＊ general（＝ 一般的な、全体的な ＝語源：全体に関する）／ genus（＝ 生物分類における「属」・部類・類 ＝語源：生まれ・部族）／ generate（＝ 発生させる・引き起こす・生成させる＝ 語源：産む・生み出す）

をめぐっての、

＊個人的なイメージ

です。同時に、

＊比喩

でもあります。

　比喩、つまり、Ａの代わりにＢを用いるさいには、変に色気や欲を出したり、ついお調子に乗ってしまい、Ａの話をしているのに、いつの間にかＢに話が移ってしまっているという愚をおかさないように、十分注意視する必要があります。で、慎重に話を進めようと思いますが、今挙げた、

＊ universe および general / genus / generate の派生語である、universality ＝普遍性と、generality ＝一般性とに、うんちと言葉は強い親和性をもっている。

と言えるような気がするのです。

　もちろん、以上は即興のこじつけです。「隠喩的構造をもつダジャレ＝オヤジギャグ」（※「なんじゃ、それは？」とお思いの方、許してください、最近、この言葉が気に入ってしまったのです、深い意味などありません、念のため）です。ただ、ぽろりと＝どばっと出てきたものです。

　まだ、出足りない感じがしますので、引き続き、普遍性について書きたいと思っています。

＊

　お食事前後にもかかわらず、ここまで我慢して読んでくださった方に、感謝します。どうもありがとうございました。では、また。

09.06.22　地と知と血（1）

◆地と知と血（1）
2009-06-22 14:18:21｜言葉

　記述文法と規範文法という言葉を思い出しました。最近は、家事の負担が増えて忙しくなってきたのと、生来の無精とが重なって、辞書、事典、ネット検索などのツールや手段をつかって

＊調べる

という作業をだんだんしなくなってきました。

＊うろ覚えと勘とでまかせに頼った、「ま、いっか」＝「見切り発車」主義

で「アウトプットする＝ブログを書く」癖がつき、インプットとしては、ご飯を食べながらテレビのニュースを見るか、新聞を斜め読みするくらいというありさまです。

　で、

＊記述文法

は確か、文字通り、

＊言葉のありようを忠実に記述する

ことに重点を置き、

＊規範文法

のほうは、文字通り、「こう言うんですよ」とか、「こう書くんですよ」みたいに、

＊「正しい」／「正しくない」を厳格＝幻覚に守らせようとする

立場をとるのだと記憶しております。

　記述文法は、言葉の使い方を集めた膨大な資料を利用して言語のありように迫ろうとする、

＊コーパス言語学

に似ている気がしますが、専門家に言わせれば、とんでもない間違い＝「正しくない」か

もしれません。どうでもいいですけど。一方の規範文法は、チョなんとか、いや、ムスキーでしたか、という米国の人が提唱した

＊言語能力（competence）

でしたっけ？ とにかく、そんな感じの

＊「正しい」言語の使用を生み出す能力

とでもいうべき、

＊ヒトを機械みたいにみなす

発想に基づいたしろものと似ているような気がします。なんで、こんな話を持ち出しているのかと申しますと、このところずっと考えている

＊普遍性

とか

＊普遍的

という言葉の定義や意味を考える場合に、

＊その言葉のつかわれ方を調べるという方法

もあるなあ、とふと思いついたからなのです。とはいうものの、

＊コーパス

なんておおげさなものにアクセスできる立場にはありません。ただ、

＊ネット検索をするもの一種のコーパス利用ではないか

と短絡的＝楽観的＝能天気に考えまして、久しぶりにちょっとググってみました。ちゃんと“普遍性”、そして、“普遍的”という具合に“〇〇”でくくってググってみました。

＊

で、結果は、やっぱり、という感じでした。普遍性とか普遍的という言葉は、

＊数学や自然科学の分野のハードな＝硬派な＝ガチガチの部分、つまり、本格的な論文そのもの

では、あまりつかわれていないみたいなのです。ひょっとして、つかわれているのかもしれませんが、その時はその時ということにして、「ま、いっか」で、話を進めさせてください。普遍性とか普遍的という言葉が、つかわれているのは、どちらかというと、

＊数学や自然科学「について」書かれた文章

や、いわゆる

＊大衆科学

とか

＊科学ジャーナリズム

とか

＊科学史

とか

＊疑似科学（※これって悪態＝罵倒＝悪口＝差別語ですか？）

といったジャンルに属する

＊読み物

で多く用いられるようです。また、

＊哲学

というフィールド＝テリトリーや、

＊哲学っぽい

ものとされる分野＝ジャンルでも、頻出する言葉みたいです。

＊このトンデモブログ

のたぐいや、本家のいわゆる

＊トンデモ本たち

にも、たくさん出てきそうですね。

　ところで、「トンデモブログ」を自称しているブログが本当にあるのか、興味がありまして、ひそかに “〇〇” でくくってググってみたところ、429 件のヒットがあり、このブログが 1 ページ目に出てきたのにはびっくりしました。サイト自体には入らず、窓口で覗けるサイトの一部を拾い読みしただけですが、

＊トンデモブログについて書いてあるサイト

と、

＊トンデモブログを自任＝自称しているらしきブログサイト

がありました。前者のほうが多かったような気がします。納得しました。「やっぱし、そうか」という感じです。

　トンデモブログはさておき、「普遍性」とか「普遍的」という言葉をネット検索してみた感想は、やはり、「普遍性」とか「普遍的」という言葉の

＊威勢のよさ

にもかかわらず、結局は、いわば

＊虚勢のよさ

だった、ということが確認できたのは収穫でした。まだ、

＊「一般性」

とか

＊「一般的」

のほうが控えめな感じがして好感度が高いように思えます。

＊

ところで、「普遍性」とか「普遍的」から、威勢と虚勢を「除いた＝マイナスした」、

＊「これは、いろいろなことにつかえる」

くらいの控えめな意味と語感があって、さきほど述べた、

＊数学や自然科学の分野のハードな＝硬派な＝ガチガチの部分、つまり、本格的な論文そのもの

に用いられている言葉はないものかと首をひねっていたところ、思い出したことがあります。以前、いわゆる、

＊実験心理学

という大雑把なジャンルに放り込んでもいいような、心理学に属する 1 分野の論文や、その要約を英訳したり、逆に英語で書かれた要約を日本語に置き換えるというアルバイトをしていたことがあります。

心理学科というのは、たいていが文学部に所属するにもかかわらず、その研究の手法はすごく理系的で、やたら何でも

＊数値化する

し、

＊統計を多用する

のです。これは、そのアルバイトをして初めて知りました。この体験については、心理学・精神医学・精神分析とからめて「テリトリー（6）」2009-06-11 で書きましたので、ご興味のある方は、ご参照ください。さて、数字や数学が大の苦手だった自分は、その仕事を引き受けたことをずいぶん後悔しました。

また、とかく、うさんくさいと見られがちな、

＊心理学

が統計や数値化という手段に頼って、

＊「科学様」

の顔色をうかがいながら「これでよろしいでしょうか？」みたいに申し訳のなさそうな表情をして、「科学様」の門下に必死で入ろうとしているさまが、憐れに見えました。

　これまた、きわめていかがしく＝うさんくさくもあり、現在世界に広まっている大不況を防げなかったどころか、その原因をつくったとも一部でささやかれている or 叫ばれている、

＊経済学

が「科学様」になったつもりで、偉そうに振る舞い、

＊ノーベル経済学賞

なんてものまでごり押しでつくらせているのとは、対照的です。

　ベースボールの、

＊「ワールドシリーズ」＝「世界大会」

が実際には「全米大会」だったり、

＊「ミス・ユニバース」＝「ミス宇宙」

が実際には「ミス世界」だったり（※ universe ＝宇宙という意味しか知らない人の場合です）、

＊「〇ンド・セレクション金賞受賞」（※「モ〇ド」は、フランス語で「世界」という意味ざんす）

が「賞」と称しながら、実際にはコンテスト＝競技とは関係のない「認証」だったり、しますよね。「しょうがない」ですね。「ノーベル経済学賞」ってのも、今挙げた例に似ています。言葉は何とでも言えるという好例です。

＊

　で、心理学に話をもどしますと、だいぶ前のことなので、よくは覚えていないのですが、さきほど申し上げた心理学の 1 分野の論文では、さかんに

＊有意

という

＊統計用語

が用いられていました。

＊有意性、有意差、有意水準

なんて言葉が断片的にあたまに残っています。その意味は忘れました。というか、今だから白状しますが、

＊意味の分からないまま、英訳や和訳をしていた

のです。

　ちょっとここで、言い訳をさせてください。

＊学術論文の翻訳

を頼まれた場合には、サンプル、つまり、同じ領域の似たようなテーマの複数の論文を見せてくださいと、お客様にお願いするのです。それを雛形＝お手本にして、「この言葉はこういうふうにつかうのか、うんうん」とか「出だしはこんな感じで、最後はこんなふうに締めくくればいいのか、ふむふむ」という具合に、

＊真似ながら訳す＝前例を踏襲しながら訳す

のです。

　こちらは、その分野の専門家ではありませんから、内容で疑問に思う点については、お客様にいろいろ質問します。この種の専門性の高い翻訳では、その道のプロと、英語屋さんがいわば二人三脚で、仕事を進めるのが理想です。さきほどの「意味の分からないまま、英訳や和訳をしていた」というのは、そうした意味です。

＊

で、統計用語である

＊有意性、有意差、有意水準

という言葉に話をもどします。今、辞書で調べてみましたが、どうやら、ある出来事＝現象に関して、それが生じた

＊必然性が存在するのか、つまり、必然かどうかを判定する

という作業＝操作で用いる考え方の尺度みたいです。ということは、裏返せば、ある出来事＝現象に関して、それが生じたさいに、

＊偶然性が働いているのか、つまり、偶然かどうかを判定する

という言い方もできそうですし、さらに大雑把で素人的な言い方をすれば、

＊ある出来事が生じるのがでたらめ＝テキトーなのか、ある程度の信頼性＝安定度＝規則性があって生じているのかを判断する

ということではないか、などと思ったりもしました。

＊「普遍性」や「普遍的」と似ているような気もするし、似ていないような気もする。

し、むしろ、

＊パチンコと競馬と宝くじのどれが一番儲かるかという、ギャンブル＝博打（ばくち）の確率の計算をして比較するのとも、きわめて似ている気もする。

という感じです。相手が、「統計様」だと思うと、苦手意識が先に立って、いつものハッタリが出てきません。そういえば、統計を駆使した論文を翻訳しながら、

＊統計は、かなりいかがわしそうだ。

と思ったことを、思い出しました。

　そうです、あれって、そうとういかがわしい操作らしいのです。お客様ご自身が、ぽろりと漏らしていらっしゃいました。そう思うと、元気が出てきました。苦手な「数字様」が出てくるから、つい、遠慮というか、萎縮してしまうのかもしれませんね。

＊数字も統計も、言葉と同様に、ヒトのでっちあげたもの

と言って聞かせれば＝自己催眠をかければ、怖くない、という感じですか。そもそも、

＊数字というものは、いかがわしい＝うさんくさい。

という、根強い不信感と劣等感の混じり合った、つまり、「コンプレックスな＝複雑な（complex）」「コンプレックス＝正確にはインフェリオリティ・コンプレックス（inferiority complex）」から来る疑問の念、ぶっちゃけた話が、悪態＝罵倒＝悪口のたぐいが、今、あたまのなかを駆けめぐっています。お下品な言葉なので、ここに書いたりはしませんけど。

＊

で、

＊数字が悪いのではない

悪いのは、何らかの意図＝企み＝思わくがあって、その目的のために、数値化や定量化や統計的操作をおこなう

＊ヒトが悪いのだ

という意味の理屈もよく見聞きします。

＊「銃は悪くない、悪用する人が悪いのだ」

という意味の、「全米ライフル協会」の多用する論理＝屁理屈＝牽強付会（けんきょうふかい）の説を連想しました。

確かに、数字も銃もそれ自体はニュートラルなもので罪はないなどと納得しそうになりますが、納得してしまっていいものでしょうか。確かに、

＊数字はニュートラルだ

と言えそうですが、

＊銃は、基本的にヒト、あるいは、他の生き物を殺すために、ヒトがつくったもの

です。比喩やレトリックには十分気をつけましょう。いくらニュートラルなものだと自分に言い聞かせても、

＊数字というものは、いかがわしい＝うさんくさい。

という思いは残ります。また、学校時代に、算数、数学、理科という科目を通して数字に苦しめられた

＊つらい経験と悔しさとよるべなさの記憶と、劣等感

は消えません。

＊

　ふと、既視感を覚えました。これと似た気持ちが起こったのは.....。そうそう、

＊科学史

です。別に、個人崇拝に近い感情をいだいた対象ではないので、固有名詞を挙げますが、村上陽一郎という人が科学史や

＊科学哲学

という名のもとに、ずいぶん、威勢のいいハッタリをきかせた本を立て続けに出していた時期がありました。

　たくさん読んだわけではありませんが、おもしろかったです。数字や理系の科目が苦手だった（今でもそうですが)、このブログを書いているアホは、若かった＝馬鹿かった頃に、村上氏の本を図書館から借りたり、本屋さんで立ち読みしながら、にやにやしていたものでした。

【※きょうの記事は、かなり長くなるもようです。間借りしているブログサイトの文字数制限に引っかかることは、確実です。いつもより短いですが、内容的に区切りがいいので、ここでいったん、中断させていただきます。この続きは、「地と知と血（2)」として、本日の次の記事に書きます。ご面倒をおかけしますが、よろしくお願い申し上げます】

09.06.22　地と知と血（2）

◆地と知と血（2）
2009-06-22 14:25:20｜言葉

【※以下は、本日掲載の「地と知と血（1)」の続きです。】

　さて、一般論＝おとぎ話＝神話＝一種の都市伝説＝与太話のつもりで、これから書くことをお読みください。

　ヒトには、ある

＊（心理的な）わだかまり

から、ある種の

＊攻撃的行動

に出るという現象が見られます。攻撃的と言っても、腕力によるものだけでなく、舌やペンやキーボードをつかう、つまり、

＊言葉による攻撃

も観察されます。

＊「ペンは剣よりも強し」

なんてことわざをイメージしていただくと、言葉による攻撃＝言論の力の意味が、よく分かると思います。（心理的）わだかまりとは、

＊劣等感、苦手意識、恐怖感、嫌悪感、憎悪、宗教的感情、倫理観、価値観、信条、世界観など

いろいろなケースが考えられます。また、今述べた感情・意識・考え方が複雑にからみ合うという場合もおおいにあり得る、と予想されます。

＊

　たとえば、Ａさんが、

＊数字や理系の科目が苦手

でテストのたびに泣くような思いを経験し続けていたとします。また、Ｂさんは、

＊ある宗教の敬虔な信者

で、その宗教の神の教えとされるもの、および、教団の上層部のヒトたちが決めた教えを固く信じていたとします。さらに、Ｂさんは、

＊理系の科目が得意

だったとします。

　Ａさんは、大学に進学し、文学部の文学科に籍を置き、就職や将来のことなどぜんぜん考えることなく、

＊文学や哲学関係の本

を読んで毎日を過ごしていました。そして、４年後に晴れて卒業となったのち、２年ほど

＊進学塾でアルバイト講師

をしていましたが、その塾で知り合った同じくアルバイト講師の女性と恋愛関係になり、やがて

＊結婚

しました。結婚を機に、妻の実家のコネを通じて、ある宗教団体が経営している

＊出版社に就職

しました。ほどなくして妻や妻の実家の人たちが属している

＊宗教の信者

になりました。

　一方、Ｂさんは、大学の理工学部に進学し、

＊工学の分野

で優秀な成績を収め、大学院にまで進み、そのまま残って、

＊研究者

としての道を歩むことにしました。Ｂさんは、理系の科目だけにとどまらず、文系の科目にも興味があり、特に

＊哲学書

をたくさん読みました。実は、Ｂさんのこころは、

＊信仰と自然科学とのあいだで揺れ動いていた

のです。Ｂさんは、一大決心をしました。

＊大学院を中退

し、文学部に入り直して、哲学を学ぶ道を選んだのです。

＊科学哲学および科学史

という分野で活躍している教授のいる大学に志願した結果、学部の３年生に転籍するという形で、

＊入学

することができました。数年後には、Ｂさんは、自分の心酔し崇拝している教授の門下生のような存在になり、大学院で哲学と科学史の研究を続けました。

10 年が経ちました。Ａさんは、所属する宗教団体の熱心な信者であるだけでなく、

＊自然科学に批判的な著書や翻訳書を上梓

し始めました。

Ｂさんは、

＊科学史および科学哲学の分野での新進気鋭の学者

として、論文を書いたり、恩師の著作や翻訳に協力するようになりました。Ｂさんのこ

ころは、依然として、自分の信仰と、その教えと真っ向から対立する自然科学の考え方のあいだで揺れ続けていました。

＊

　ＡさんとＢさんの話は、以上です。

　２人に共通するのは、

＊（心理的な）わだかまりが、ヒトの（精神的な）活動に大きく影響をおよぼしている

という点です。たとえば、

＊論理

という、ともすると

＊冷徹なイメージ

をいだかせがちなものを探究する人が、案外、

＊熱い人

である例はよく見られます。個人的にも、そうした熱い人に出会ったり、話をした経験があります。この点については、「論理の鬼」2009-01-02 で詳しく論じていますので、よろしければ、ご一読ください。

　もう１つ、ＡさんとＢさんに共通するのは、

＊一種の縄張り行動＝テリトリー死守行動

です。

　宗教と自然科学の対立は、この国では体感しにくいですが、たとえば、ファンダメンタリズムが大きな勢力をもつ米国では、日常生活のレベルでも、かなり皮膚的にぴりぴりと感じられるものだと聞きます。

＊宗教も自然科学も熱い

のです。

ヒトの縄張り行動の場合には、テリトリーが、ワンちゃんやネコちゃんたちに見られる、「しる・汁」、つまり、

＊おしっこをかける

という、つつましい行動とは異なり、

＊きわめて攻撃的＝暴力的であるだけでなく、大規模でかつ残虐なもの

になりがちである点に注目しなければなりません。

また、ヒトにおいては、「しる・知る」、つまり、

＊名付ける＝名前を与えることによって、「知る」＝「分かる」＝「知（ち）・知識としてたくわえる」＝「自分のものと主張する」

という、特異な性格をもった縄張り行動を示すことも、きわめて重要です。その行動がエスカレートして、

＊「地（ち）」⇒「知（ち）」⇒「血（ち）」

という、他の生き物に対してだけでなく、同じヒトという種（しゅ）同士のあいだで、きな臭く生臭いだけにとどまらず、

＊血生臭い

事態＝惨劇を数限りなく繰り返してきて、今もなお繰り返していることは、みなさん、ご承知の通りです。

＊知る

という一見、人畜無害で、時としては、「高尚＝高等ないとなみ」だと考えられている

＊ホモ・サピエンス（＝ homo sapiens ＝知恵・知性あるヒト）

特有の行動が、

＊無害どころか

ヒト同士のあいだのみならず、多種多様な生物＝生体を有する、母なる、

＊この惑星にとって、きわめて有害である

こともまた、みなさん、ご承知の通りです。こういった事態＝惨状を、

＊自分自身も含めてのヒトという種のかかえている、憂うべき深刻な問題

として提起したのが、今月にシリーズとして書いた「テリトリー（1)」2009-06-07 ～「テリトリー（7)」2009-06-12 という一連の記事でした。

＊

＊普遍性や普遍的なものを志向する＝指向する＝求める＝希求するという、崇高であるべき、ヒトの「知」への欲求＝願い＝祈り

が、おそらく、その意に反した結果を生んでいるとするならば、それは、

＊「知」ではなく「無知＝無恥」あるいは「非知｜（ちにあらず)」

ではないでしょうか。もしも、そうであれば、ヒトには、わが身を打つ鞭（むち）こそが必要なのではないでしょうか。わが身に鞭打って、目を覚ますべきではないでしょうか。

＊サイエンス（science）の語源は、「知る・知ること」

であり、かつては長きにわたって、

＊現在のように細分化されるまえの「学問一般」や「体系化された知識の総体」、つまり、「知」

を示す言葉であったと言われています。「知」のなかには、いわゆる宗教・倫理・道徳も、いわゆる科学・工学・数学も含まれているはずです。

＊「知る」＝「印（しるし）をつけて名付けること」は、ヒトにとって、自分を取り巻くごちゃごちゃぐちゃぐちゃした世界を「分ける・分かる」ことであった。

はずです。その

＊「知ったもの＝名付けられたもの＝言葉として認識されたもの＝分けた・分かったも

の」を、「さらに知る＝さらに名付ける＝さらに言葉として認識する＝さらに分ける・分かる」

という操作・作業をヒトはえんえんと繰り返してきたのです。これからも、ヒトという種が続く限りは、えんえんと繰り返すでしょう。

＊ヒトは後戻りはできないが、後を振り返ることならできる。

　せめて、そう信じたいです。

＊「普遍性 or 一般性を求める」＝「普遍的 or 一般的であろうとする」

という行為 or 欲求は、実は、

＊自を守るために他を排除しようとする

行為 or 欲求ではないでしょうか。

　普遍性、一般性、普遍的、一般的の類語とも言える、

＊グローバル化、世界標準

という言葉に、

＊差別・対立・敵対・暴力・排斥・排除・根絶

という言葉のにおいを感じとることが求められている。それには鈍感さや頑迷さや愚かさや邪悪さと反対のものが必要とされる。そんなふうにも思います。

＊

＊共通性、汎用性、有効性

という言葉においても同じです。単純化すると、いわゆる

＊選別と排除

とは、

＊「ＡではなくてＢだ」と主張すること

あるいは

＊ＡをなくしてＢをいかすこと

ですね。

　でも、

＊「ＡでもありＢでもある」と主張すること

あるいは

＊ＡとＢの両方をいかすこと

も可能ではないのでしょうか。これは、

＊普遍性や普遍的とは、異なる方向を向く

ことかもしれません。いわゆる

＊「知」とは、異なるもの・こと

かもしれません。でも、可能ではないでしょうか。考えても分かりません。言葉の遊びめいて、恐縮ですが、

＊分けないことには分からない

のでしょうか。つまり、

＊分けない状態＝ごちゃごちゃぐちゃぐちゃでは、分からない＝知りえない。だから、無理だ。

と断念しなければならないのでしょうか。断念しなければならないのが、ヒトにかされた「枷（かせ）＝枠＝リミット＝限界＝分際＝身の程」なのでしょうか。しょせん、ヒトとはそれだけの存在なのでしょうか。

＊すっきり、くっきり、明るい、分かる

が良くて

＊ごちゃごちゃ、ぐちゃぐちゃ、ぼんやり、わけが分かんない

は良くないことなのでしょうか。

　ほかに道＝手段＝やり方＝生き方はないのでしょうか。そのあたりの可能性について、考えてみたいです。

＊

　ぐちゃぐちゃ、ごちゃごちゃ、くよくよ、うじうじした文章にお付き合いくださった方に、お礼申し上げます。

　ありがとうございました。では、また。

09.06.23　「あつい」と「わからない」

◆「あつい」と「わからない」
2009-06-23 12:43:25｜言葉

　きのう書いた、

＊ネット検索をコーパスへのアクセスとして代用する

という方法のコンセプトが気に入ってしまいました。おそらく、コーパスなんて言葉を意識せずに、多くの人たちが実行なさっていると思います。で、あいかわらず、こだわっている、

＊普遍性

と

＊普遍的

を “〇〇” でくくってググってみて、その

＊用法を探る

という目的で、いろいろなサイトへの窓口の数行だけを読んだり、ちょっと気になるサイトの場合には、訪問させていただいたりして、遊んでいたところ、さまざまな

＊発見

がありました。なにしろ、“〇〇” と 1 つにするとヒット件数が膨大になるので、さらに別の “〇〇” を付け加え、絞って検索もしてみましたが、絞ると

＊出来レース＝やらせっぽく

なり、

＊思いがけない出あい

が起きないような気がしてきたので、“〇〇” は 1 個にして、がむしゃらに

＊「次へ」

や

＊G ooooooooooooooooogle の下に並んでいる数字のうちで右端にある数字

をクリックしまくるなんていう馬鹿みたいなことを、このアホは、きのうずっとやっておりました。あれって、ずっとやっていると

＊前へ 69 70 71・・・・・・79 80 81 次へ

みたいに途中で、それ以上進めなくなってしまうみたいなんです。なんで、でしょう？

＊「あんた、それって、やりすぎ！」

と、心配してストップをかけてくれているのでしょうか？

＊テクニカル・プロブレム

とかいうやつで、サーバーに負担をかけないようにしているだけなのでしょうか？ とにかく、検索してみていろいろ勉強になりました。目が回ってきて、あたまも痛くなりました。

＊だんだん暑くなってくると、熱くなってくる人が出てくる

ということを、身をもって感じました。地球温暖化が、よりいっそう怖くなってきました。

＊だんだんもっともっと暑くなってきて、みんながもっともっと熱くなってきたら、どーしよー！？

って感じの恐怖です。

＊

　で、思い出しましたが、

＊冷徹なイメージをいだかせがちなものを探究する人が、案外、熱い人である。

＊宗教も自然科学も熱い。

と、きのうの記事に書きました。この

＊熱い＝熱＝運動

というのは、個人的に、かなり気になる言葉・現象の１つです。理系の科目のなかでも、高校時代にあった

＊物理

という科目がいちばん

＊嫌

でした。

＊難しい

うえに、教えてくれた先生が好きではなかったので、よけい嫌でした。でも、

＊去年のノーベル物理学賞を受賞した人たちのやっていることを、解説した文章

を新聞記事やネット上のテキストとして読んでみた結果、何だか、

＊わけが分からない

ところがあって、とてもおもしろく感じました。

＊「わけがわからない」は、ふつうは、「訳が分からない」と書きます

が、個人的には、

＊「分けが分からない」

という感じ＝感字なのです。こっちの漢字＝感字のほうがしっくりきます。

＊「分ける・分かる」

という、このブログでよく書くフレーズに似ているからだと思います。みなさまに、分かっていただけるか分かりませんが、

＊ぐちゃぐちゃ、ごちゃごちゃ、ぼんやり、ぼーっつ、という感じの世界を、あたまのなかで分けても分けても分からない

って感じなんですけど、分かっていただけますか？ えっつ？「分からない」ですか？ やっぱし。納得。イメージは、個人的なものですから、やっぱりなかなか通じませんね。

＊

心細いので、広辞苑を引いてみましたところ、「わけ・訳」の項に、「(「分け」の意)」とあり、まんざら訳のないことでもないらしいと分かりました。こういうふうに、辞書という「権威」にすがる自分が情けなくも思いましたけど。

いずれにせよ、

＊通じない合えないところがある

というのは、すごく大切で、いいことだと思います。

＊分かり得ない存在＝他者がいるらしいと感じられるのは、自分は１人っきりではないという証拠である。

と言えそうだからです。「ばーか」ですか？ いえ、そうなんです。言えそうなんです。だって、他人様（ひとさま）の考えていることが手に取るように分かったら、もうその他人様は他人様ではないわけで、そんな人生は楽しくないに決まっています。人の一生が自慰みたいになってしまいます。

＊分かり得ない存在＝他者がいるからこそ、相手を思いやる＝想像する＝創造する＝こっちが相手を勝手につくりあげてしまう＝妄想する＝暴走するという、楽しみがある。

のではないかと思います。もちろん、

＊分かり得ないために、不和や対立や憎しみや争いが生まれる。

とも言えます。逆に、

＊分かりすぎるために、不和や対立や憎しみや争いが生まれる。

とも言えます。

＊問題は、「分かる」／「分からない」ではなく、相手＝他者を「みとめる」／「みとめない」かにある。

という気がします。

＊みとめる・見留める・見止める・看止める・診止める・視止める・観止める・認める（＝知覚し判断を保留する・「おおっつ、ふーん」という感じ）⇒ゆるす・緩す・許す・赦す・聴す（＝緊張していた体をゆるめ、張りつめていた空気をなごませる・「ふうーっ」「はあーっ」「ほーっ」という感じ）

みたいに、

＊相手＝他者をみとめて、ゆるす

ことが大切なのではないでしょうか。

＊相手の思いがわかるかわからないかに関わらず

です。

「分かる」／「分からない」とは、自と他を分ける＝認識する第１歩だと言えそうですが、個人的には、「分かる」／「分からない」については分からないです。さきほど申し上げた「分けが分からない」（※「訳が分からない」ではなく、念のため）状態なのです。

＊相手＝他者＝まわり＝世界はもとより、「自分自身とされるもの」＝「自分のからだ＋あたま＋「何か」」すら、分けが分からない。

のです。「分かっている」人って、いるのでしょうか。「分かってるよ」と「言っている」人なら、おおぜいいますけど。

＊

それはそれでいいとして、自分の場合には、ひょっとして、

＊自と他はつながっている

のではないかなどと、こういう暑い日には、熱くなった脳がつぶやきます。どういう意味でつぶやいているのか自分でもよく分からないのですが、２つの可能性が考えられます。

１）自も他も自然科学的、つまり、分子や原子やそれより小さな粒のレベルでは同じ。

２）すべては、自の脳＝意識＝思いのなかで、起きている＝生じている＝あらわれている、と考えれば、自も他も同じ。

です。

世界各地に広まり、多くの人たちが信じている

＊大手の宗教は、だいたいが暑いところで生まれた

みたいですよね。たとえば、お釈迦様なんて、すごく暑いところで熱いあたまでもって悟りをおひらきになったのではないでしょうか。

比較的少数の人たち＝共同体によって信じられている、

＊土着の＝ローカルな宗教というか信仰のなかには、涼しかったり、寒かったりする地方で生まれたものもある

みたいですよね。一口にシャーマニズムなんて言葉でくくってしまっては、まことに失礼だし、杜撰（ずさん）であると承知のうえで、あえて申し上げますが、あれらは、

＊熱くなった脳や、あっちっちの火や、からだを熱くしてくれるお酒や薬草のたぐいと、おおいに関係があるらしい

と何かで読んだ記憶があります。信仰とか宗教って、やっぱり

＊熱い

みたいです。

＊

この暑い時に、暑いの熱いのと書いているとよけい暑く＝熱く＝篤くなるので、話を変えます。

きのうの記事で、

＊科学史と科学哲学

という言葉を出しました。そして、

＊数字や理系の科目に対する劣等感 or 嫌悪 or 恐怖

という意味のことも書きました。きのうの記事を読み直してみて、舌足らずだと感じましたので、補足説明をさせてください。暑いので（※また、言っちゃいました）、ちょっと横着をして、「なる（8）」2009-04-01 という記事から、自己輸血＝自己引用させていただきます。

＊

★「唯〇論」という言い方があります。ある特定のものごとや現象や特質みたいなもので、森羅万象をひっくるめて面倒みよう、といった場合に用いるネーミングの産物、あるいはブランドのことです。グーグルなどで検索するさいに、半角の「＼*」をつかうことがありますね。試しに “唯＼* 論” で検索してみたところ、あるはあるは、そのヒット数の多さにびっくりしました。

まず、以前に見聞きしたことのあるものを列挙します。

唯幻論＝唯心論＝唯物論＝唯臓論＝唯言論＝唯我論＝唯脳論＝唯神論＝唯金論.....

次に、初めて見たもののなかで、特に印象的だった使用例を並べます。

唯ゲーム論＝唯エネルギー論＝唯情報論＝唯退屈論＝唯創論＝唯遺伝子論.....

この言葉の羅列を見て感じるのは、「唯〇論」というのは、メタな立場＝「これですべてが解決＝説明＝解明できるぞ。大したものだろ」という視座に立ちたいという欲望です。でも、これまで見聞したところでは、メタな位置に立とうとするとメタメタ＝めちゃくちゃになることは確かです。

だから、わざと上の言葉を全部「＝」で結びました。ちなみに、「＝」は一種の感字であり感覚的なものです。「すべての面倒をみる」というメタな心意気があれば、ほかの「唯〇論」と「＝」で結んでもいいことになります。なにしろ「何でも面倒をみよう！ まかせとき！」というのですから。

ということは、「＝」は権威のあるお墨付きの印（しるし）であり、５つ星とか勲章みたいな「栄誉」のシンボルということになりませんか？ つまり、

幻＝心＝物＝臓＝言＝我＝脳＝神＝金＝ゲーム＝エネルギー＝情報＝退屈＝創＝遺伝子・・・

という「存在の偉大なる連鎖」が形づくられると言えます。

やっぱり、「ぜんぶ、わたしに、まかせなさい！」状態です。すごく野心的な考え方ですね。思わず、占いを連想してしまいました。星、タロット、水晶、姓名、生年月日、動物、風水、色、夢、手相、人相、鼻糞の色と質、オーラ.....。「何でもあり」が「何でも占っちゃう」。

それは、脇に置いて、上記のような、列挙作業をしたのには、理由があります。このブログでやっていることが、「唯〇論」という「まぼろし」を形成する作業に似ているからです。そういうわけで、このブログにはそんな野心は毛ほどもありません、と断っておきたいのです。

このブログでいろいろやっていることは、ぜんぶ「お遊び」なんです。「本気のお遊び」と言ったほうが適切かもしれません。

＊

以上です。いちばん重要なところは、

＊メタな立場＝「これですべてが解決＝説明＝解明できるぞ。大したものだろ」という視座に立ちたいという欲望

で、そのなかで、特に大切な言葉は、

＊欲望

なのです。

きのうの記事の与太話に出てきたＡさんとＢさんに共通しているのは、今、挙げた欲望だとも言えます。こころに、劣等感なり、葛藤なりといった、わだかまりをかかえている場合には、たいていヒトはそれを解消しようと努めます。

Ａさんは、子供の頃から

＊苦手

で、ずいぶん自分を苦しめてきた、数学や自然科学に対し、宗教という異なった立場＝位置＝視点＝視座から、一種の

＊攻撃

を試みたという説明ができそうです。

一方、Ｂさんは、自分の信仰と、その教えに真っ向から対立する自然科学の考え方の

＊あいだで揺れ続け

ながらも、科学史と科学哲学という学問をよりどころにして、自然科学に対して

＊メタな視点を得る

という形で、一種の

＊攻撃

を試みたとも言えそうな気がします。

＊宗教という立場から、自然科学を攻撃する

というのは、比較的「分かりやすい構図＝図式＝単純化＝横着」だと思います。それに対し、

＊科学史と科学哲学をよりどころにして、自然科学を批判ないし攻撃する

というのは分かりにくいかもしれません。簡単に申しますと、科学史や科学哲学とは、

＊真理や一般的法則や普遍性を志向する「自然科学」を、「歴史」という「流れを比喩とした動き」のなかで位置づけたり、あるいは、絶対性や普遍性を志向する「自然科学」を、「哲学」という「多種多様な考え方の集積」のなかに置いて、分類し解説することにより、相対化する＝去勢する＝無力化する。

試みとも言えるわけです。うんと単純化すれば、

＊「〇〇様」ではなくて、「たかが〇〇さ」と呼び捨てにして、その権威をはぎ取る。いわば、裸の王様状態にする。

という感じです。

　特に、宗教が自然科学を標的にするさいには、すごく攻撃的になる場合もあれば、せせら笑うくらいのやんわりとした批判程度で済む場合もあります。攻撃的な場合には、

＊迫害、追放、裁判、投獄、処刑、虐殺

にまでいたることは、歴史を振り返ればお分かりになると思います。また、自然科学は、かつて、

＊錬金術、魔術、魔女信仰、悪魔崇拝、邪教、異教、異端思想

とも呼ばれたり（※いわゆる「確信犯」や、ガリレオみたいに信念をもっていた人もいたでしょう）、その種のいわれなきレッテル＝ラベルを貼られた場合もあったようです。それを思い出すと、よりいっそう分かりやすくなるでしょう。

　きな臭く、生臭く、血生臭いですね。話を変えましょう。暑いので（※また「暑さ」のせいにしています、ごめんなさい）、再度横着をさせてください。以下は、きのうの記事

からの引用です。

＊

★＊分けない状態＝ごちゃごちゃぐちゃぐちゃでは、分からない＝知りえない。だから、無理だ。

と断念しなければならないのでしょうか。断念しなければならないのが、ヒトにかされた枷（かせ）＝枠＝リミット＝限界＝分際＝身の程なのでしょうか。しょせん、ヒトとはそれだけの存在なのでしょうか。

＊すっきり、くっきり、明るい、分かる

が良くて

＊ごちゃごちゃ、ぐちゃぐちゃ、ぼんやり、わけが分かんない

は良くないことなのでしょうか。ほかに道＝手段＝やり方＝生き方はないのでしょうか。そのあたりの可能性について、考えてみたいです。

＊

　というふうに書いたので、いろいろ考えてみましたが、このアホが１つの馬鹿みたいな結論にいたりましたので、ご報告申し上げます。前もって言っておきますが、アホみたいな結論になるのは、アホが書いているのですから当然ですが、本当に＝ほんまもんに馬鹿みたいな結論ですよ。では、いきます。

　地球もだんだん暑くなってきたみたいだし、この列島の気候もだんだん亜熱帯みたいになってきたし、

＊みんなで、ぼーっとしようじゃありませんか～！

　お釈迦様みたいに、

＊暑いところで熱いままに悟っちゃいませんか～！

です。

　ところで、

＊「さとる」とは「わかる」とは違う

ような気がしませんか？ 広辞苑に語源の解説がないので、「ま、いっか」主義でテキトーに、でまかせを書きますと、

＊「さとる」は「さようにうけとる」である

じゃないでしょうか。

「あっそう」（※ MR.ASO じゃないですよ、滅相＝ MESS+O もない、ちなみに mess を英和辞典で引いてみてください）と、このさい納得しちゃって、進歩だの成長だのって頑張り過ぎないことです。さとりましょう。「さとるのは難しいことだ」ですか？ じゃあ、

＊さようにうけとる＝そのようにうけいれる＝あるがままにうけいれる＝さからわない

努力をしませんか。

　これ以上、分けて分かる必要はありません。それどころじゃないんですよ、この惑星は。ちょっとストップ。スローライフでけっこう。タイム。タンマ。つまり、結論なんて、

＊分けが分かんないで、いいじゃないですか〜！

なんですけど、どうですか？ 投げやりですか？ 敗北主義ですか？ うーん。そうかもしれませんね。

　でも、本気でそう思っているです。やりを投げませんか？ まけて、まかせちゃいませんか？ えっつ、あたまを冷やせですか？ でも、

＊冷やすためには、どこかで熱を放出させないといけない

んですよ、すると、もっと温暖化しちゃうんですよー。かなり、ヤバいところまで来ているみたいなんですよー。ほかにいい考えはありませんか？ 教えてください。お願いです。みんなで考えましょうよ。

　まだ６月ですけど、暑い日が続いています。みなさん、どうぞご自愛ください。さっき、ネコ（※うちの猫の名前です）の鳴き声がしました。猫は家でいちばん涼しいところにいるといいますので、これからネコをさがしにいきます。

暑苦しい文章を、お読みいただきまして、どうもありがとうございました。では、また。

列島も 真っ赤に染まった とうがらし

09.06.24　ぼーっとする、ゆえに我あり

◆ぼーっとする、ゆえに我あり
2009-06-24 12:32:05｜言葉

“普遍性” か “普遍的” か、どちらか忘れましたが、キーワードにしてググっていたところ、懐かしいフレーズにめぐりあいました。

＊「我思う、ゆえに我あり」

です。デカルト（René Descartes：1596-1650）というフランスの哲学者のことばです。そのフレーズが載っていたサイトでは、『方法序説』と邦訳されている書物の原文からの原語である

＊ Je pense, donc je suis.（ジュ・パンス・ドンク・ジュ・スイ、みたいに発音します）

だけでなく、そのラテン語訳、

＊ cogito ergo sum（「コギト・エルゴ・スム」とカタカナ表記される場合もよくあります。）

さらには、英訳、

＊ I think; therefore I am.

そしてドイツ語訳

＊ Ich denke, also bin ich.（イッヒ・デンケ・アルゾ・ビン・イッヒ、みたいに発音しま

す）

まであって、けっこう楽しめる内容でした。で、英訳を見ていて、いつだったか、ＴＩＭＥという米国の雑誌で、

＊ iPhone; therefore I am.

だったか

＊ I phone; therefore I am.

だったか、どちらか忘れましたが、見出しにつかってあったことを思い出しました。そういえば、アップル社の iPhone 3G S の販売数が 6 月 22 日に 100 万台を突破したというニュースが、ネットでも流れましたね。

＊ＴＩＭＥ

という雑誌は、まだ英語もろくに読み書きできなかった中学２、３年の頃から、ずっと

＊定期購読

しています。当時は学生割引があったので、軽い気持ちで購読の葉書を出してしまい、以来ずるずると契約を継続しています。飽きっぽい自分としては珍しく長続きしている習慣の 1 つです。決して読みやすい文章の雑誌ではありません。また、論調や内容も、

＊アジア版

とはいえ、いかにも

＊米国寄り＝米国中心的

なのは確かです。

＊英国の週刊誌 the Economist

のほうが、視野も広いし、偏り＝片寄りも目立たないような気がします。でも、ＴＩＭＥに慣れているので、未だに毎週斜め読みしています。好きというか、楽しみなのが、各記事の見出しを読むことです。さきほどご紹介した、

＊ iPhone; therefore I am.

か

＊ I phone; therefore I am.

みたいに、引喩（allusion）や、もじり＝ダジャレ＝オヤジギャグをつかっていることがよくあり、それを考えるのが楽しみなのです。上の例ですと、

＊「我 iPhone を使う、ゆえに我あり＝ iPhone なしでは生きられない」か「我通話する、ゆえに我あり＝ケータイなしでは生きられない」

という感じでしょうか。

英語のしゃれ、言葉遊び、反語、ジョーク、ほのめかし、といったものは、非ネイティブ・スピーカーには、よく分かりません。なかにはネイティブ・スピーカーでも、ある程度、専門知識とか、いわゆる教養みたいなものがないと、分からないのではないかと思われる引喩もあります。

ちょっと古い例ですが、オーストラリアで 11 年 9 カ月も続いた与野党の交代が、2007 年の 12 月にありました。自由党の党首兼首相として総選挙で、現首相の労働党党首ケビン・マイケル・ラッドに敗北した、

＊ジョン・ウィンストン・ハワード（John Winston Howard）

が首相の座を降りたとき、ＴＩＭＥ誌は小さな記事を載せ、そのタイトルを

＊ Howards End

としました。これは、

＊「ハワード首相の最後」＝ Howard’s End

という意味にとれると同時に、世界的にも有名だった英国の作家Ｅ・Ｍ・フォースター（1879-1970）の作で、映画化もされ、アカデミー賞を受賞した

＊『ハワーズ・エンド』

という小説のタイトルでもあったのです。このブログを書いているアホは、たまたまこの小説の名前を知っていたので、「ああ、これはあれのもじりだ」と、思いましたが、

＊英語のネイティブ・スピーカーなら誰でも知っている

とは言い切れない感じがします。

　つまり、一口に英語のネイティブ・スピーカーと言っても、南アフリカや、カナダや、オーストラリアや、ニュージーランドや、今は中国領の香港にも多数いますし、いくら同名の映画がアカデミー賞を受賞したといっても、文芸作品が原作の映画に興味をぜんぜん示さない米国人もいたりします。そんな具合に、

＊分かる人には分かる、分からない人には分からない的な、ほのめかし

がＴＩＭＥの記事には多いのです。

＊

　で、似たような話として、

＊英国人が得意な、「sarcastic ＝いやみっぽい＝意地の悪いまでに辛らつな」、「irony ＝反語表現＝皮肉」

については、「出る」2009-06-20 で触れました。こうしたことに興味のおありの方は、どうかお読みください。

　先日、ちょっと大きめの書店に立ち寄る機会がありました。あまり時間がなかったので、早足で通り抜ける感じで店内をぐるっとまわった時に、

＊ピーター・バラカンという英国出身の人の『ロックの英詞を読む』

という本が、棚にあるのをほとんど偶然に目にしました。もちろん、解説は日本語で書かれているのですが、表紙に見える

＊ Rock Between The Lines（「ロックの行間を読む＝行間まで読んでロックする」という感じでしょうか、read between the lines ＝「行間を読む」という慣用句のもじりですね）

という英語のフレーズに目を引かれて、ちょっと立ち読みしました。ほんの一部分だけ目を通したにすぎませんが、

＊英国人でなければ感じ取れない英詞のニュアンス、ほのめかし、時代背景

までが説明してあり、すごく欲しいと思いましたが、懐具合が良くなかったし、たとえ

良くても、３日分の食費になりそうな値段の本だったので、買うのは諦めました。

　ちなみにピーター・バラカンという人の話す日本語ですが、とてもというか、おそらく、今まで聞いたいろいろな人のしゃべる日本語のなかで、

＊いちばん好きだ

と言っても言いすぎではないほど、好きです。今は、介護の必要な高齢の親といっしょに暮らしていて、生活のリズムが完全に超早寝早起きですので、見られませんが、

＊「ＣＢＳドキュメント」

という深夜というより未明に放送されている番組がありますが、かつてはよく見ていました。プロンプターを使用して字幕を読んでいるのかもしれませんが、その日本語の流れ、文章の組み立て方、ことばの選び方、バラカン氏のちょっと鼻にかかった声に心酔していました。

＊しびれるウ～

なんて感じです。失礼。米国のテレビネットワークであるＣＢＳ制作の番組のスタンス＝報道姿勢にも、共感していました。

＊

　話をもどします。とはいっても、どこにもどしていいのか分からなくなりました。

＊ＴＩＭＥ誌の見出しや本文に、引喩（allusion）や、「もじり＝ダジャレ＝オヤジギャグ」が用いられている

と

＊英国人が得意な、「sarcastic ＝いやみっぽい＝意地の悪いまでの辛らつな」、「irony ＝反語表現＝皮肉」

と

＊英国人でなければ感じ取れない英詞のニュアンス、ほのめかし、時代背景

あたりにもどします。

「出る」2009-06-20 でも書いたことですが、

＊ある特定の言語に普遍性がそなわっているということはあり得ない

つまり、同じ「英語」でも、世界各地でいろいろな英語が話されているわけで、「世界で一様に通じる英語」＝「普遍的な英語」は存在しませんが、

＊言語という表象の仕組み（＝「何か」の代わりにその「「何か」以外のもの」を用いる）には、普遍性がそなわっている

らしい。そのように言えそうです。なぜなら、世界のほぼあらゆるヒトが、手話を含む、広義の言語を程度の差はあれ、用いているからです。で、さらに、

＊ヒトは、言語という表象の仕組みを、生後に学習する前に既に生得している

のではないかと思えて仕方がないのです。これは、上述の

＊デカルト（1596-1650）

そして、米国の

＊チョムスキー（1928-）

という言語学者が共通していだいている考え方みたいなのです。チョムスキーについては、「「人間＝機械」説（2）」2009-04-24 でも触れましたので、ご興味のある方は、ご一読ください。

　実は、自分はこの考え方に両義的な感情をもっています。

＊「うさんくさいなあ」＝「嘘だろうなあ」／「本当だったらすごいなあ」＝「信じてみたいなあ」

という感じです。

＊嘘っぽいけど魅力的だ

とも言えます。これが、

＊「普遍性」という考え方

で、個人的にもっとも興味深いと思っているテーマです。

＊表象の仕組みは、ヒトにとって生得的なものであるかどうか？

とコンパクトに言い換えることもできそうです。これが、疑問というか、謎というか、心引かれるというか、気になって仕方がないのです。

１）ヒトが、自分をとりまく世界が発するさまざまな信号＝情報＝データを、主に知覚器官で知覚し、

２）それが、ニューロンを通して脳に伝えられ、

３）それが、脳細胞によって処理され、

４）次に、それが、意識というきわめて不安定で誤作動の多いスクリーンに提供されるが、

５）意識というスクリーンは、きわめて性能が悪く＝精度が低く＝低画質で、

６）さらには、脳細胞から受け取りもしない映像を映し出すこともある。

というのが、このブログを書いているアホの想像している＝妄想している＝捏造（ねつぞう）している、

＊知覚と意識のありよう＝知覚と意識という現象

です。その

＊知覚と意識のありよう＝知覚と意識という現象と、かぶっている＝からみ合っている＝もつれ合っているのが、言語をはじめとする表象の仕組みである

と妄想しています。

＊

話をさらにもどします。この記事の冒頭で、

＊「我思う、ゆえに我あり」

と、その英訳である、

＊I think; therefore I am.

をご紹介しましたが、きのうの記事で、半分自棄（やけ)、半分泣きそうになって（※このアホは、涙もろいし、うじうじした性格なので、いい年して、すぐに泣くんです、はい)、

＊みんなで、ぼーっとしようじゃありませんか～！

とか、

＊暑いところで熱いままに悟っちゃいませんか～！

とか、

＊さようにうけとる＝そのようにうけいれる＝あるがままにうけいれる＝さからわない、努力をしませんか。

なんて書き＝泣き叫んでいました。で、今も、基本的には、きのうと同じように思っていまして、

＊考える＝分かる＝知るは、罪なことだ。だから、進歩しよう、成長しよう、頑張ろうなんて、考えなくていい。分からなくていい。これ以上、新しいことなんて知ろうとしなくていい。

などと、短絡して＝プッツン切れちゃって＝すねちゃっているのです。また、上述の１）～６）みたいに思い込んで＝妄想していますし、特に５）６）については、自分はもちろん、いろいろなヒトの言動を日々観察しながら実感しています。そんなわけで、

＊「我思う、ゆえに我あり」

とはとうてい考えることができず、

＊ぼーっとする、ゆえに我あり

と言いたい心境にあります。

　ちなみに、「ぼーっとする」や「ぼけーっとする」って英語では何というのでしょう。英語のアウトプットなんて、このところご無沙汰していますから、それこそ、ぼーっとしていて、「ぼーっとする」とか「ぼけーっとする」に相当する英語の表現が、あたまに

浮かびません。

＊ぼーっとする

と

＊ぼけーっとする

で思い出したことがあります。かつて、

＊カーペンターズ

という兄妹のデュオがいましたね。妹の

＊カレン・カーペンター

が、ものすごく articulate ＝はっきりとした発音で、きれいに歌っていました。中途難聴者である自分にとっては、あれくらいの明瞭な発音と音域（※ちょっと低めですね）の女性の声がいちばん、聞き取りやすいので、数年くらいまえまで、20 年ほどまえに録音したカセットテープに入っている彼女の声を楽しんでいました。今は、難聴が悪化して聞きづらいです。

　ところで、

＊エンヤ

という女性の歌声を聞きたいと思っています。テレビで彼女が歌っているのを聞いたことがありますが、自分の聴力には声域が高すぎるらしく、肝心の声がぜんぜん聞こえませんでした。

＊補聴器

を通しても、バックの演奏の低い音しか、耳が拾ってくれないのです。

で、例のカセットテープには、カレンの声で、

＊ Don’t they know it’s the end of the world

という歌詞のある歌も入っているのですが、その歌詞は聞き取ったのではなく、調べてそういうフレーズだと知っているだけでして、自分の耳には、

＊ぼーけーの、いっでぃ、えんどば、わーっどぅ

みたいに聞こえていたことを覚えています。で、

＊ぼーけーのー（＝ Don’t they know）

が、何度聞いても

＊ volcano（＝火山）

と聞こえるのです。

そして、

＊いっでぃ、えんどば、わーっどぅ

はかろうじて、

＊ it’s the end of the world ＝世界の終わり

と聞こえたので、この部分を聞くたびに、火山があちこちで噴火していくなかで、地球が滅亡していくさまが、美しい声とともにあたまにちらついて仕方がありませんでした。

＊ああ悲しい、でも、きれいだ

という切ない思いがしました。耳のなかに残っているあの歌声を呼び起こすと、今でもあの切なさがよみがえります。こういう

＊聞き間違い＝「正しくない」

は、

＊外国語はもちろん、母語である日本語でも、頻繁に起きます。

　難聴者ではなくても、こうした経験はよくあるみたいですね。

＊

以前、

＊タモリ

の司会していた

＊ボキャブラ天国

という番組では、

＊聞き間違いを意図的に誇張した形でメインテーマ

にして、けっこうおもしろおかしく

＊日本語の歌詞をいじくっていました

が、いつの間にか放送しなくなってしまいました。

＊著作権

の問題が厳しくなってきたからでしょうか。

＊「正しくない」好き

としては、残念でなりません。あのボケ振りは、貴重です。ぜひ復活してほしい番組です。

＊「ボケブリ天国」

なんて新しいタイトルで、歌詞をダシにして「正しくない」に徹し、ボケまくったら、おもしろいのに。

＊

で、話をもどします。「ぼーっとする」とか「ぼけーっとする」に相当する英語ですが、形容詞で absent-minded（あたまのなかが「お留守になる」感じですか）なんてのがありますね。absent-minded と言えば、

＊ an absent-minded professor という、cliché ＝ cliche ＝「手あかのついた決まり文句」

があって、

＊「いつもぼけーっとしている大学教授」＝「専門バカ」

というニュアンスがあるみたいです。英語のネイティブ・スピーカーのお知り合いがある方は、

＊ an absent-minded ——

という具合に、出だしだけ口にして、相手が何と続けるか試してみると、おもしろいかもしれません。若い方はどうか知りませんが、中年以上の方なら、10 人に 8 人は、すかさず

＊ professor

と言うと思います。日本語で、誰かに対して

＊アホの——

と言えば、おそらく 10 人に 7 人くらいは、すかさず

＊坂田

と言うのに似ています。これが関西だったら、10 人に 9 人は、「坂田！」と叫ぶと思いませんか？ アホを自任している自分も、

＊アホの——

と言えば、

＊パリテキ（※パリス・テキサスというハンドルネームの省略形です）【注：かつての話です。今は、星野廉です。】

というように、坂田利夫さんみたいに素敵でチャーミングな枕詞（まくらことば）がほしいです。いや、冗談ではなく、常々そう思っています。

＊

で、absent-minded に話をもどしますが、それでもつかってみましょうか。さて、

＊ぼーっとする、ゆえに我あり

の英語版です。

＊ I am absent-minded; therefore I am.

なんだか、ピンときませんね。ピンボケでしょうか。いっそ、横着をして否定形にし、

＊ I cannot think clearly; therefore I am.

なんてどうでしょうか。

　何だか、本当にぼーっとしてきて、目の前でいくつもの火山が噴火するもようが浮かんでくるので、きょうは、このへんで、とめておきます。

＊

　ぼーっとした文章をお読みくださった、心優しき方に、感謝いたします。どうもありがとうございました。では、また。

　美しき この世の果てに 歌姫の声（字余り）

09.06.25　時の神＝あわいわあい（1）

◆時の神＝あわいわあい（1）
2009-06-25 14:51:48｜言葉

　このところ、「普遍性」についてずっと考えているうちに、「普遍性＝すべてに通じる」よりもむしろ、

＊「分からない」

とか、思いやメッセージが

＊「通じない」＝「伝わらない」

ということのほうへと、関心の重点＝軸足が移ってきたような気がします。ただ、

＊「分からない」「通じない」「伝わらない」には、ネガティブな面だけではなく、ポジティブな面もたくさんある。

という気持ちが強くあります。そもそも、

＊「分からない」「通じない」「伝わらない」の前提として、自分と「他者 and / or 世界」は「違う」「異なる」「同じではない」という認識がある。

はずです。

＊みんなが、同じ考えをいだき、同じ考え方をしているように見えて、同じ格好をし、同じふうに振る舞っている国や社会や組織

がありますね。そういうところでは、たいてい、

＊頂点に立つ人や、そのまわりの人たちだけが、違って見える

というギャグ的状況があります。極端な例を挙げると、

＊「その国には、肥満した人が２人しかいない」

なんてギャグがありますが、まさにそんな感じです。実際、ある国では、ある２人以外は、本当に、ほぼみんなが痩せていたりします。テレビで映像を見ただけで、実際にこの目で見てきたわけではありませんが、その国には、

＊げっそりと骨と皮だけみたいになった乳幼児たち

がたくさんいるそうです。一方で、それこそ一糸乱れない、

＊見事なマスゲーム

を大きな競技場で見せたりするのです。あんなことができるのは、みんなが同じように考えるように洗脳されているか、思考停止状態におちいっているか、「間違ったら、殺すぞ」と脅されているとしか思えません。それくらい、見事すぎる調和ぶりなのです。

＊不気味

です。

　自分は、そんな国には住みたくないです。また、この国がそんな国に似た方向にいってほしくないです。個人的には、例の

＊起立！ 礼！ 斉唱！ 着席！

だけでも、嫌です。

　幼い頃から、そうでした。ああいう風習って、放っておくと、どんどんエスカレートします。

＊威張りくさった大将に命じられなくても、自主的に、ああいう行動を取るようになっていく。

ヒトには、そういう習性があるみたいです。

＊命令に従わない教師をわざわざ自主的に処罰する

という、まことに手回しがいい行動にまで走ってしまっている、ある大都市の教育委員会が好例です。自分から進んで、ある方向に歩んでいったり、駆けていくようになるのです。

＊ファシズム＝全体主義の芽

は、丹念に摘みとらないと、やがて馬鹿を見るのは、ごくふつうの人たちばかりです。自分の場合には、全体主義への恐怖感が、たぶん他の人よりも大きい＝強いらしく、

＊音楽のアーティストによるコンサートの鑑賞

や

＊競技場などでのスポーツ観戦

中の人びとの熱狂ぶりにも、ファシズム＝全体主義の芽を感じてしまうのです。不快な気分になられたファンの方々には、申し訳ありませんが、正直に申しますと、それほどに小心者＝臆病なのです。

＊

話は変わりますが、

＊「セサミ・ストリート」

いう米国のコドモ向けテレビ番組がありました。ちょっとまえまで、この国でも放送されていましたけど、今はもうやっていません。その「ちょっとまえ」に、新聞のテレビ欄で、タイトルを見かけたので、「まだやってるいるのか」と思って、放送時間にテレビをつけたところ、

＊もうお年を召した、昔からのレギュラーの方々

が、まだ出演していて、

＊懐かしさを通りこして、切なさと、もの悲しさ

を感じてしまいました。

で、びっくりしたのは、ＣＭと同じくらいの長さでどんどん切り替わるさまざまなレギュラーの小企画＝コーナーが、かつてとまったく同じだったのです。つまり

＊映像がすごく古い

ということです。「かつて」というのは

＊四半世紀以上もまえ

のことです。「いくらなんでも、これはないんじゃないの」と言いたくなるくらい、古めかしいのです。

＊超低予算で続いているという印象

がして痛々しさを感じ、涙が出てきました。

＊ 1970 年代の空気

を思い出しました。1960 年代後半から、米国で高まりを見せた、アフリカ系アメリカ人を中心とする

＊公民権運動

が、

＊他のマイノリティたちによる運動

とあいまって一定の成果を出しはじめてきた頃の空気です。「セサミ・ストリート」では、米国社会を構成しているさまざまな人種およびエスニックグループの人たちが、レギュラーとして登場していました。アニメに出てくる人物のキャラクターたちも、

＊髪や肌の色や、顔立ち

が、米国社会のいわゆる多数派である、いわゆる白人の特徴だけでなく、多様性を見せる形で描かれていました。

　言語の面でも、そうです。たとえば、米国社会で勢いを増しつつある、ヒスパニック、つまり、スペイン語でつながっている人たち（※大雑把な言い方で、申し訳ありません）を無視せずに、スペイン語の紹介をするコーナーもありました。米国では、この番組のスペイン語バージョンも、放送されていたのでしたっけ？

　内容的にも、

＊みんなひとりひとりが違っている、それが当然だ

とか

＊みんながユニークな存在だ

とか

＊世の中にはいろいろな人がいる、これはすばらしいことだ

といった意味のことが、さかんに番組のなかで口にされたり、そうした考え方を、人やキャラクターが具体的に日常的な行動として演じていたのを覚えています。

　今、はっと思い出しましたが、きのうの記事でも触れた、米国の雑誌ＴＩＭＥか、何かで読んだ興味深い話があります。数年前の出来事だと思います。

　セサミ・ストリートの住人たちのなかに、

＊アーニーとバート

というマペット（＝一種の操り人形）のキャラクターがいます。ご存知の方も多いと思います。どういうわけか、２人で暮らしています。また、シングルベッドを２台並べて寝る場面が多いのです。性別は、どう見ても男性です。で、

＊米国のキリスト教系の組織

の一部が、

＊２人の関係を同性愛的だと決めつける（※たとえ、そうであってもいいじゃありませんか）

という愚挙にはしり、組織を利用して、番組に圧力をかけたとか、アーニーとバートを番組から降ろすキャンペーンを展開したとか、そんな話の記事を読みました。それにしても、

＊すごい深読み＝こじつけ

ですね。

＊近親憎悪

ではないでしょうか。

＊自分のなかにある性向が怖いから、他の人の同種の性向を憎悪し攻撃する

という、せこくて卑怯な心理です。心理学の教科書通りじゃないですか。

＊

とにかく、あの国のファンダメンタリストたちは始末に負えません。

＊ＡかＢか ＝ 自分たちが正しいか正しくないか

という２項対立に基づいて、いろいろな分野で敵対的な行動をとるのです。たとえば、

＊人工妊娠中絶、進化論教育、ＥＳ細胞（＝胚性幹細胞）研究、同性愛および同性婚に反対の立場

をとっています。また、そうした行動を展開するための、確固とした財政的基盤も確保しています。熱心な支持者たち＝信奉者たちの寄付が膨大な金額にのぼるのです。で、「自分たちが正しいか正しくないか」の答えは

＊自分たちだけが正しい ⇒ 自分たちの考えは普遍的だ ⇒ 自分たちと相反する考えの人たちは排除する ⇒ 場合によっては、暴力を使用するのも許される ⇒ なぜなら、自分たちの言動には、神の裏づけと加護があるからだ

という

＊短絡の連鎖を成していく

のです。いわゆる一神教であるキリスト教にしろ、ユダヤ教にしろ、イスラーム（＝イスラム教）にしろ、いわゆる多神教であるヒンドゥー教にしろ、神道にしろ、多神教とも無神論とも分類されることもある、仏教にしろ、

＊頑迷なファンダメンタリスト＝根本主義者＝原理主義者

や

＊他の宗教 or 宗派を、邪教や異端として決めつけ、暴力による敵対行動をとる人たち

や

＊宗教をダシにしながら、実際には他の思わくや目的のために、ある特定の標的に暴力をふるう人たち

や

＊無神論者に敵対行動をとるお節介で不寛容な人たち

がいます。

　ああ、しんどい。きな臭い。生臭い。血生臭い。こころの安らぎを得て、癒やしを求める人たちを救うはずの宗教に、なぜこんなにこころをかき乱すような人たちが、必ずといっていいほどいるのでしょう。どうして宗教に、銃や砲弾や拳固が要るのでしょう？あるいは、原子爆弾まで？

＊「あいつらが持っているからさ。喧嘩を売ってきたのは、あっちのほうだ」

という答えがたいてい返ってきます。

＊水掛け論

です。この種の過激で切りのない話題は、抑うつに悩む者にはつらいので、ここで止めておきます。

＊

　さて、この記事の冒頭のほうで、

＊「分からない」「通じない」「伝わらない」は必ずしもネガティブなことではなく、ポジティブな面もたくさんある

＊「分からない」「通じない」「伝わらない」の前提として、自分と「他者 and / or 世界」は「違う」「異なる」「同じではない」という認識がある。

と書きました。

　こうした考え方は、ある意味では、「普遍性」や「普遍的」とは相反するものです。気になります。そこで、その「普遍性」「普遍的」について考えてみましょう。

＊村上春樹の小説は普遍性をそなえている。だから、翻訳という形でも、世界のさまざまな言語を話す、多種多様な人たちに読まれ、支持されている。

という論調が、マスメディアだけでなく、ブログなどの形でネット上でも数多く見られます。この場合の「普遍性」とは、

＊翻訳という「言語の置換え作業」を通じても伝わるもの

です。

　この翻訳でも伝わるという点は、非常に重要です。聖書（＝ the Bible）がもっとも分かりやすい例であり、歴史的事実です。この国に伝わった仏教のお経も、そうです。ディズニーのアニメ、ハリウッド映画、米国製テレビ番組なども、そうです。一方、

＊音楽やスポーツの場合

はどうでしょう？ 基本的には、翻訳という作業は必要ありません。

　音楽といっても、世界には

＊多種多様な音階があり、楽器があり、演奏の形式がある

ようです。譜面の解釈も多様でしょう。当然のことながら、いわゆる

＊クラシック

だけが、音楽ではありません。しかし、欧米が、歴史的に、世界において政治的および経済的に大きな影響力をおよぼしてきたために、

＊たとえば、クラシック、ロック、ポップスと呼ばれている西洋音楽が世界標準のような役割を果たしている。

だけと言えそうです。とりわけ、

＊クラシックという分野は、均一性が高い＝ルールが厳密＝世界どこでも同じ方法がつかわれている。

のではないでしょうか。

＊クラシックの世界における、日本人を含むアジア系の人たちの活躍ぶり

には、目覚ましいものがありますが、これは、

＊経済的な力と密接な関係がある

と思われます。才能はもちろん必要ですが、経済力なしに、クラシックの世界で成功することはできません。

＊とかくお金のかかるクラシック音楽というテリトリー

に、師弟の身を投じさせるだけの余裕をもった、アジアの国々の人たち、および、欧米で生きるアジア系の人たちが増えてきた証拠とも言えるでしょう。また、欧米では、飛びぬけた才能があれば、経済的に恵まれなくても、その才能を伸ばすために支援するという、長いあいだに培われた

＊機会均等を是とする思想

があることも忘れてはなりません。その点は、すばらしいことだと思います。

＊

で、ロックやポップスになると、言語がともないますから、

＊英語中心の世界的規模のマーケットが存在する

とはいえ、

＊国、あるいは、地域によって、バリエーションがある

ようです。１例を挙げると、

＊スペイン語を話す国や地域や人たちは、ラテンポップスと呼ばれるジャンルを確立している

と聞いたことがあります。また、

＊中国語には、方言がたくさんある

とはいえ、おそらく、ある種の中国語（※複数かもしれません）が世界に散らばる形で

＊マーケットを形成している可能性は高い

と推測しています。そうしたマーケット＝市場では、中国語の歌だけでなく、中国語が原語の映画、テレビ番組、書籍が、膨大な数量で流通しているはずです。

詳しいことは知りませんが、いわゆるエマージング市場を形成している、インド、ブラジル、東欧、ロシアなどでも、同じような現象が起こっているに違いありません。

これは勘ですが、

＊歌詞という形で言語と結びついている音楽のジャンルと、文学、メディア、演劇、映画、インターネットのサイトは、互いにかなり重なる部分が大きい。

のではないでしょうか。言い換えると、

＊言語が仲介者となって、いわゆるマルチで多層的な形での、複数の文化圏が形成されている。

という気がします。

　逆に言うと、だからこそ、

＊中国などでは、政府がネットやケータイの規制に必死に取り組んでいる

のです。

＊旧ソ連が崩壊したのは、広義の情報技術（ＩＴ）の流入と浸透を防ぎきれなかったからだ

という説を思い出します。

＊権力＝国家の支配体制にとって、言論と情報の統制は体制維持ための最大のカギ

なのです。

　この国の将来のためにも、現在のイラン情勢を見守りましょう。

【※きょうの記事は、かなり長くなるもようです。間借りしているブログサイトの文字数制限に引っかかることは、確実です。いつもより短いですが、内容的に区切りがいいので、ここでいったん、中断させていただきます。この続きは、「時の神＝あわいわあい(2)」として、本日の次の記事に書きます。ご面倒をおかけしますが、よろしくお願い申し上げます。】

09.06.25　時の神＝あわいわあい（2）

◆時の神＝あわいわあい（2）
2009-06-25 15:00:51｜言葉

【※以下は、本日掲載の「時の神＝あわいわあい（1)」の続きです。】

　一方、スポーツとなると、

＊言語と親和性のある音楽とは、また異なった世界的展開

を見せていますね。スポーツについては、「haiku と俳句、ベースボールと野球」2009-01-04 で、

＊相撲、柔道、野球、ベースボール、サッカーと、haiku および俳句

をからめて論じましたので、ご興味のある方は、ぜひ、ご一読ください。

　スポーツでは、

＊共通したルールが土台となって、異なった背景をもつ人たちをつなぐ

という現象が起きています。１つは、外国籍の選手を受け入れるという現象、もう１つは、オリンピックに代表される世界大会の開催という興行ビジネスです。両者ともに、もちろん、さまざまなレベルでの、すったもんだも頻繁に起こりますね。でも、戦争よりはましです。いい意味での、

＊国家間のガス抜き

にもなります。国や地域の境を越えた、つまり、

＊グローバルな経済活動

とも、密接に結びついている点では、音楽と同じです。

　以上見てきたように、

＊宗教、芸術、スポーツだけなく、学問、政治などは、人が生み出し、普遍性をそなえた、表象という「仕組み＝メカニズム」に基づくがゆえに、まさに普遍的な広がりと浸透を見せている。

ことは確かなようです。ただし、宗教、芸術、スポーツ、学問、政治などが、

＊表象という「仕組み＝メカニズム」の最大の権化である「貨幣＝お金＝マネー」という触媒によってがんじがらめになっている

点を、常に意識する必要があると思います。

自国内は、もちろんですが、特に他国や他の地域の人たちを相手に、宗教、芸術、スポーツ、学問、政治の「分野＝フィールド＝場」で、「接触 or 折衝 or 交渉 or 交流」をおこなうさいに、

＊必要なのは、相手の立場を否定するか、肯定するか、という２項対立ではない

ことを、念頭におくべきではないでしょうか。

他国との諸問題や、グローバルなレベルでの諸問題を論じる、あるいは、扱う場合には、いきなり、理解、つまり、「分かるか分からないか」という結論を急ぐのではなく、

＊意識する＝悟る＝さようにうけとる＝あるがままにうけとる

ことを、最優先すべきだと思います。あとは、ケース・バイ・ケースとしか言いようがありません。

＊自も他も、自と他を取り巻く世界も、刻々と変化する過程のさなかにある

のです。結論を急ぐ必要はありません。

＊ぼーっとしていれば、いい

のです。

＊ぎりぎりの線まで、ぼーっとしている。

それでいいと思います。

＊

ここで、あらためて、

＊普遍性

という言葉について考えると、

＊普遍性などと気張らない

で、

＊共通性

くらいで我慢すれば＝控えておけば＝遠慮しておけば＝欲張らないでおけば、いいのではないかという気がします。普遍性とか普遍的とか、色気を出しすぎると、かえって

＊押し付けや対立を生み、ひいては憎悪や争いにいたる結果となる

のではないかと思うのです。英語に

＊ agree to disagree ＝ agree to differ ＝意見の違いを認め合い、どちらかが正しいなどという結論は出さない

という言い方がありますが、

＊共通性を認め合う、つまり、共通する部分と、共通しない部分の両方を確認し合う

くらいにとどめるのが賢明ではないでしょうか。「セサミ・ストリート」の住人たちのように、

＊いろんな髪や肌の色をした、いろんな考え方の人たちがいて、それぞれが他者＝相手のユニークさを認め合い、共通項を探り、共通点＝共通項＝共通性があれば、そこをよりどころにして、通じ合う。あえて、それ以上踏み出し、相手のもつユニークさを変えようとはしない。

　そんな共存の仕方もあるのではないでしょうか。次のように、言えるかもしれません。

＊そもそも、自分と「他者 and / or 世界」とが「違う」「異なる」「同じではない」のは、当然。だから、たがいに「分からない」「通じない」「伝わらない」部分があるのも、当然。でも、共通する部分もあるはず。そこを見つけて、それを足がかりにして話し合おう。そこを土台にして通じ合おう。

　そんな共生の方法があるのではないでしょうか。ただし、

＊押し付けだけは、絶対にしてはいけない。

と思います。もちろん、そう簡単に割り切れるものではないでしょう。以上は、ナイーブな＝おバカな考え方でしょう。もちろん、

＊ＡかＢかの、どちらかを取る＝選ぶしか道はない。

という場合もあるでしょう。でも、正直言って、やはり、

＊ケース・バイ・ケース

という言葉でお茶を濁すしかできません。お茶を濁す。それでいいのだ、と思います。

　立派な、

＊一般論や原則

を述べてもむなしいだけです。

　この種の問題では、

＊何にでも当てはまり通じる、「普遍的な」考え方や方法や解決法や結論を求めるのは無理だ

と思います。

　大切なことは、異なる相手と、時間をかけて、

＊話し合いと接触を保つこと

でしょう。

　さきほど述べたことの繰り返しになりますが、

＊状況は変化する。すべてのものは、変化の過程にある。

ということだけは確かなようです。じゃあ、時間をかけようじゃないですか。ぼーっとしていましょうよ。かっかするのはやめましょうよ。結論を急ぐのはやめましょうよ。

＊言葉を吐いて唾を飛ばしあい、結論の出ない話をするだけなら、取っ組み合いの喧嘩をするよりまし

でしょう。

＊結論なんて出なくてかまわない

じゃないですか。大切なのは、殺し合いにいたらないように、

＊まめにガス抜きをすること

です。口論だけならいいでしょう。

＊黙って、口もきかずに、いっしょにご飯を食べる。そして、ともに時が経つのを待つ。

だけでもいいと思います。もちろん、メニューは別々で。牛肉を食べない人たちのまえで、これみよがしにビーフステーキなんか食べちゃだめです。それは会食ではなく、挑発です。

＊

ところで、

＊「普遍性」とそれの柔らかめバージョンの「共通性」は、漢語系の言葉

ですが、これに相当する

＊大和言葉系の語

はないものかと、広辞苑（※こればっかり出して、ごめんなさい、大きめの辞書はこれしかもっていないのです）を引いたりしながら、いろいろ考えていたのですが、

＊「わ・和・輪・環・話・把・わあ・わあい」

ではないでしょうか。このブログは、

＊「正しい」／「正しくない」を追究する場ではない

ので、そういうことにしておきます。

広辞苑で、「わ・和・輪・環・話・把・わあ・わあい」の語義を眺めているうちに、そんなふうに思いました。で、最後にある

＊わあい＝和愛＝輪愛＝和気あいあい、という感字で決まり

という感じでした。感じ＝感字が確信へと変わったのです。

＊いろんな人たちが住んでいるセサミ・ストリートで、「わあい、わあい」＝「和気あいあい」

という感じです。

　さきほど書いたことを繰り返します。

＊

★＊宗教、芸術、スポーツだけなく、学問、政治などは、人が生み出し、普遍性をそなえた、表象という「仕組み＝メカニズム」に基づくがゆえに、まさに普遍的な広がりと浸透を見せている。

ことは確かなようです。ただし、宗教、芸術、スポーツ、学問、政治などが、

＊表象という仕組み＝メカニズムの最大の権化である、貨幣＝お金＝マネーという触媒によってがんじがらめになっている

点を、常に意識する必要があると思います。

＊

　以上は、

＊ヒトである限り、この惑星の誰もが免れない＝避けられない現実です。つまり、「普遍性」です。

＊「普遍性」の１つである「表象という仕組み＝メカニズム」とは、ヒトをつなぐと同時に、犯す＝侵す＝冒すという怖ろしい側面をもっている。

とも言えそうです。では、ヒトは「表象という仕組み＝メカニズム」という「普遍性」をまえにして、なす術（すべ）をもたないのでしょうか？

　そんなことはないと思います。アホの結論として、聞いてください。

＊待てばいい。時間をかせげばいい。「表象という仕組み＝メカニズム」は、実は時間にすごく弱い。「何か」の代わりに「その「何か」ではないもの」を用いる。これが、「表象という仕組み＝メカニズム」であるなら、「何か」と「その「何か」ではないもの」に「揺さぶり」をかければいい。その「揺さぶり」をかけてくれるものとは、おそらく、「表

象という仕組み＝メカニズム」よりも強力な「時間」ではないか。時間の経過とともに、「表象という仕組み＝メカニズム」は揺らぐ＝変化する。言い換えると、「何か」と「その「何か」ではないもの」の両方が、時とともに変質する。

　そんなふうに思っています。

＊のらりくらり。じわりじわり。そうしながら、「表象という仕組み＝メカニズム」を徐々に追いつめ、隔たり＝間＝際を埋めていく。あるいは、間＝際をずらしていく。そのうち、メカニズムそのものが変質していく。

　そんなふうに簡単に言えるとも思います。

＊

　話を少しずらします。

　一見、

＊矛盾し相反する

ように思われる、

＊「普遍性・一般性・共通性・類似性・標準・同一」と、「個性・個別性・特異性・特殊性・異形・差異」との

＊「間（＝ま・あいだ・あわい）＝際（＝さい・きわ）」

には、何があるのでしょう？「何もの」もないと思います。ただ、

＊「時間（※とき＋あわい）が経過する」という、「運動＝過程」がある

だけです。その

＊「運動＝過程」にかける＝掛ける＝懸ける＝賭ける

ことなら、できるのではないでしょうか？

　最後に、言葉の遊び＝めちゃくちゃなこじつけ＝だじゃれ＝オヤジギャグをさせてください。このビョーキは、なかなか治らない＝直らないみたいです。ご勘弁ください。すぐに終わりますので。

＊わあい＝和愛＝輪愛＝和気あいあい

＊セサミ・ストリートで、「わあい、わあい」＝「和気あいあい」

＊「間（＝ま・あいだ・あわい）＝際（＝さい・きわ）」

＊あわいわあい＝淡い間＝時間（＝とき＋あわい）

　とはいうものの、

＊いかに淡くても、「あわいわあい」＝時間（※とき＋あわい）は強力だ

と信じています。ふと、

＊時の神クロノスが、武器として鎌（かま）をもっていた

ことを思い出しました。

＊もっとも時を恐れるのはヒト

です。ということは、

＊時は、ヒトがつくりあげた「表象という仕組み＝メカニズム」をも駆逐してくれる

のではないでしょうか。

　ただ、心配なのは、

＊「表象という仕組み＝メカニズム」とともに、ヒトも駆逐される

ということです。つまり、

＊時をじわりじわりと追いつめることで、ヒト自身がじわりじわり追いつめられる。

こともあると言えます。でも、

＊結論や結果を急いて、一気になくなる＝無くなる＝亡くなる＝滅亡するよりは、まし

ではないでしょうか。

　きょうの記事を、ちょっと読み返してみましたが、暑いせいか、熱いですね、あやういですね、やばそうです。こんなのに付き合わせてしまって、ごめんなさい。でも、本気なんです、これでも。えっつ？「よけい、やばい」ですか？ 納得。

＊

　このとちくるった文章にここまで付き合ってくださった方に、こころよりお礼を申し上げます。どうもありがとうございました。では、また。

　鎌をもつ 時の神待つ 子どもたち

09.06.26　こんなことを書きました（その 11）

◆こんなことを書きました（その 11）
2009-06-26 13:44:34｜言葉

「こんなことを書きました（その 10)」（2009-06-02〜2009-06-12）の続きです。今回は、2009-06-13 から 2009-06-25 に掲載した記事のダイジェスト版です。短い解説とキーワードが書いてあります。

＊「こんなことを書きました（その 10)」2009-06-13：2009-06-02 から 2009-06-12 に書いた記事のダイジェスト版です。

※ 2009-06-12 に終わった「テリトリー（1）〜（7)」の余波で、抑うつが悪化するという、「イエス・アイ・キャン」2009-02-27 を書き終えた直後と同じ失敗を犯してしまいました。またしても激しい「消えてしまいたい」状態に陥り、いったんはデイパックを肩に掛けて家を出ましたが、知らない間に後をついてきていたネコ（※うちの猫の名前です）が、テリトリーの境らしき側溝の端っこで鳴いた声を聞きつけました。振り返って、目が合ったとたん、もう駄目でした。深夜で、あたりに誰もいない路上にしゃがみ込み、おいおい声を立てて泣いてしまいました。アホは学習しない。アホは学習できない。そ

う痛感しました。ブログを再開するのに、数日かかりました。

＊「なわ＝わな」2009-06-18：「テリトリー（1）～（7)」で扱ったテーマの１つである、「名付ける」行為について、まだこだわっています。小学生の時に、校長先生が話してくれた、「禍福はあざなえる縄のごとし」という、ことわざをふと思い出したことをきっかけに、先の展開を考えずに、記事を書き出しています。いつもは用意した走り書きメモを見ながら、記事を書くのですが、それも役に立ちそうもないので、お先真っ暗な状態で見切り発車しています。「な」と「わ」の多重的＝多層的な意味（＝辞書に記載されている語義）と、それを読んで喚起されるイメージと戯れることで、ひたすら偶然性に身をまかせ、アドリブ＝即興で記事を書いています。結果的に、偶然性＝アドリブだけで記事を書くという実験になりました。読み返してみると、この記事で、「なわ＝縄」、プラスチック製のロープ、「わな＝罠＝輪状の縄」が出てきたのは、上述の事情があったからだと思われます。いつも変な記事を書いていますが、この記事を読むと、とりわけ変な印象をいだきます。キーワードは、「縄をなう」「縄をよる」「言葉の物質性」「言葉の抽象性」「一人称」「二人称」「符合」「符号」「付合（つけあい)」「鳴く」「泣く」です。直接書かなかったキーワードは、マラルメ、ジャック・デリダです。

＊「台風と卵巣」2009-06-19：「普遍性」がテーマです。概念に走らないで、あくまでも言葉の身ぶりと運動に身をゆだねるスタンスをとろうと、自分に言い聞かせています。とはいえ、それしか、できないだけなのです。それすらできないと「何もなくなってしまう」のを恐れているさまが、よく表れています。今回のテーマは、抽象度が高いため、具体的なイメージとして、言葉を引き寄せるのに相当苦労しています。右往左往しています。ようやく「つかえる」という、つかえる言葉にめぐりあってほっとしたところ、「普遍性」が結局「言葉」に収斂（しゅうれん）＝収束＝集束していくさまに行き当たり、呆気にとられています。あらためて読むと、いかにもアホがやりそうなことをしています。恥ずかしいです。キーワードは、「柳父章」「山岡洋一」「universality」「universe」「generality」「general」「genus」「generate」「ゲイ・サイエンス」「台風」「曼荼羅」「マクロコスモス／ミクロコスモス」「卵巣」「卵細胞・生殖細胞」「可能性」「表象」「比喩」「イメージ」「表象の入れ子構造」「でまかせ」「偶然性」「宙ぶらりん」「現代詩」「オーサー・ビジット」「コピーライター」「一般性」「汎用性」「万能」「国際標準」「共通性」「有効性」です。直接書かなかったキーワードは、「谷川俊太郎」です。

＊「出る」2009-06-20：言葉＝言語というトリトメのないものを、「普遍性」という切り口をツールにして思考する方法を模索しています。言葉＝言語という日本語が、多義的なために３つのレベルに分類するという工夫をしています。その事務的な作業をしながら、ソシュールという固有名詞を思い出し、アカデミックなギョーカイの「正しい」「正しくない」ごっこに巻き込まれたくないため、「ソシュールとは関係ない」と予防線を張っています。これは、明らかに自意識過剰な被害妄想です。言葉＝言語の３つのレベルを、読者に分かりやすいように、具体的に説明しようと努めています。学生時代にフランス語の授業で暗唱させられたフレーズ（※後述します）を、思い出して説明の素材

としてつかっています。最後に、肝心な個所にさしかかったものの、時間がなくなり、残念がっています。キーワードは、「真理」「法則」「掟」「word(s)」「language」「言語という仕組み＝体系」「アイロニー＝反語」「英国人」「ステレオタイプ」「一般化」「アントワーヌ・リヴァロール」「明晰でないものはフランス語でなない」「フランス語の普遍性についての論考」「中華思想」「中国」「台風」「宇宙」「台風の目」「隠喩的な構造をもつダジャレ＝オヤジギャグ」「宙ぶらりん」「マラルメ」「分かる＝分ける」「錯覚」「出る」「ぐちゃぐちゃ」「ごちゃごちゃ」です。直接書かなかったキーフレーズとキーワードは、「Ce qui n'est pas clair n'est pas français; Ce qui n'est pas clair est encore anglais, italien, grec ou latin.」「Discours sur l'Universalité de la Langue Française（1784）」「構造的隠喩」「渡部直己」「ジャン・リカルドゥー」です。

＊「うんちと言葉」2009-06-21：依然として「普遍性」がテーマです。ちなみに、これまでのように「普遍性（1）」「普遍性（2）」.....というタイトルの付け方もあたまにありましたが、マンネリを避けるために自粛しました。当初は、真理・法則・掟という言葉を素材に「普遍性」を論じるつもりだったのが、言葉＝言語自体が素材になってしまったため、再度、あたまの整理をしています。また、この日になって、ようやく、2009-06-14 から 2009-06-17 に記事が書けなかったことの弁解＝言い訳をする心の余裕がもてたようです。前日、最後で保留してしまったややこしいテーマについて、まず、自分の文章の「音読不可能性」を例にとって、読者に説明しようと努めています。自分がブログの記事を書くさいに、自分が慣れ親しんできた固有名詞を挙げることが一種の個人崇拝になることに、神経質なくらい気をつかっています。「テリトリー」シリーズを書いた後遺症だと思われます。言葉にしにくい、ややこしいテーマを、必死で言葉で説明しようとしています。言葉で、読者の生理的な部分に訴えるという戦略をとっています。具体的には、以前にも試みたことのある、読者に動作や動きを促すように呼びかけるという方法です。さらに、「うんち」を「出す」という日常的な生理現象と、「うんち」が「出る」、そして、その「うんち」が「運動」に回帰する、という日常的に目にする現象を例に取ることで、ややこしいテーマを体感してもらおうと、読者に働きかけています。誤解を招きやすい方法＝戦略だと反省しています。キーワードは、「アドリブ＝即興」「でたらめ」「被虐的史観」「ぐちゃぐちゃ」「ごちゃごちゃ」「ジャック・デリダ」「読みにくい」「ジル・ドゥルーズ」「何か」「口」「肛門」「universality」「universe」「generality」「general」「genus」「generate」「隠喩的な構造をもつダジャレ＝オヤジギャグ」です。直接書かなかったキーワードは、「構造的隠喩」「渡部直己」「ジャン・リカルドゥー」です。

＊「地と知と血（1）」2009-06-22：この日の記事の前編。「普遍性」「普遍的」という言葉の使用法をネット検索することで、その実相を観察するという方法を実践してみた結果を報告しています。「普遍性」「普遍的」が自然科学や数学の「内側」ではあまりつかわれていなくて、「外側」で「読み物」や「説明として」頻出している語であることを指摘し、いわゆる「いかがわしさ」のニュアンスをともなう点に読者の注意を向けようとしています。また、実験心理学を例に取り、数値化や統計を用いることで、科学性という属性をまとおうとしている傾向に対し、批判的な意見を述べています。統計用語の意味

を検討し、その胡散臭さを指摘しています。批判的な目は、数字と、数字を用いるヒトの思わく＝意図にも向かっています。最後に、村上陽一郎氏と、同氏の専門分野である科学史と科学哲学に触れています。キーワードは、「記述文法」「規範文法」「コーパス言語学」「言語能力（competence）」「コーパスへのアクセスとしてのネット検索」「数学・自然科学」「大衆科学」「科学ジャーナリズム」「疑似科学」「トンデモブログ」「トンデモ本」「一般性」「一般的」「ノーベル経済学賞」「有意性」「有意差」「有意水準」「学術論文の翻訳」「必然・必然性）」「偶然・偶然性）」「確率」「ギャンブル」「complex」「inferiority complex」「全米ライフル協会」「比喩・レトリック」です。直接書かなかったキーワードは、「チョムスキー」です。

＊「地と知と血（2）」2009-06-22：この日の記事の後編。２人の主要人物が劣等感および信仰という心のわだかまりと、自然科学とのあいだで、揺れる様子を描いたアレゴリー的作り話を、読者に提供しています。その話を通して、心理的なわだかまりが、ヒトの精神活動に大きく影響をおよぼす点を、読者に訴えようとしています。土地を名付けるというヒト特有の縄張り行動が、知識を蓄える活動、つまり、文化・文明という形で進展していく過程で、多くの争いが起こりたくさんの血が流れるという現実を「地・知・血」という同音異議の漢字でイメージ化しています。普遍性・世界標準・グローバル化という言葉が、さらに多くの血を流すことと同義である点に、読者の注意を向けようと努めています。そうした過程を打開する方法のとして、あえて「分けない」、「ごちゃごちゃぐちゃぐちゃ」でいい、「わけ分かんない」でかまわない、という選択肢もあるのではないか、と訴えるというより、反語的に負け犬の遠吠え状態で、小声で叫んでいます。キーワードは、「攻撃的行動」「科学史」「科学哲学」「出版・出版社）」「論理」「熱い」「テリトリー」「ホモ・サピエンス」「無知」「無恥」「鞭」「サイエンス」「知る」「選別」「排除」です。

＊「「あつい」と「わからない」」2009-06-23：テーマは、依然として「普遍性・普遍的」です。「訳が分からない」を「分けが分からない」と記述する「わけ」を語っています。「通じない」「分からない」「通じ合えない」「分かり合えない」を解消するのではなく、その状態をあえて「みとめる」「ゆるす」方法＝選択肢があるのではないかと、読者に問いかけています。メタな立場に立ちたい、つまり、他者や世界を俯瞰（ふかん）する行為を通じて、自己を正当化したいというヒトの欲望は切りがなく、決して満足させることはできないことを指摘しています。そこで、「わける＝わかる」ではなく、「さとる＝さようにうけとる＝あるがままにうけとる」という態度＝生き方を提案しています。とかくきな臭い「熱い」をこれ以上エスカレートさせないためには、「わからなくていい」のではないか、と問いかけています。キーワードは、「ネット検索」「コーパス」「宗教」「自然科学」「物理学」「自と他」「お釈迦様」「シャーマニズム」「科学史」「科学哲学」「劣等感」「嫌悪感」「恐怖感」「攻撃」「唯〇論」「宗教による科学の弾圧」「ガリレオ」「ぼーっとする」「暑い」です。

＊「ぼーっとする、ゆえに我あり」2009-06-24：デカルトの「我思う、ゆえに我あり」と

いうフレーズをきっかけにして、その意味と、そのバリエーションを列挙しています。話はＴＩＭＥ誌の文体の特徴にいたり、その他の例を挙げ、「一言語」がいかに普遍的であり得ないかを確認しています。そこから、言語という表象の仕組みの普遍性へと話を移しています。デカルトとチョムスキーに共通するといわれる、「言語という表象の仕組みの生得」というテーマに触れ、胡散（うさん）臭そうだけど、魅力的だという両義的な感想を述べています。また、「わかる」よりも、「わからない」＝「ぼーっとする」をあえて選びたいとする立場から、「我思う、ゆえに我あり」ではなく、「ぼーっとする、ゆえに我あり」と言いたいと述べています。英語の歌詞や日本語の歌詞を「聞き間違える」という「正しくない」「ぼけーっとした」スタンスを取り上げ、「ぼーっとする」ことのポジティブな面を、読者に体感してほしいと願っているようすがうかがわれます。キーワードは、『方法序説』「iPhone」「Howards End」「sarcastic」「irony」「ピーター・バラカン」『ロックの英詞を読む』「ＣＢＳドキュメント」「引喩＝ allusion」「いろいろな英語」「知覚」「意識」「カーペンターズ」「Don’t they know it’s the end of the world」「タモリ」「ボキャブラ天国」「absent-minded」「アホ」「坂田利夫」です。

＊「時の神＝あわいわあい（1)」2009-06-25：この日の記事の前編。テーマが、「普遍性」から「分からない」「通じない」「伝わらない」に移ってきていることに自覚的になっています。みんなが分かり合える、通じ合える、同じである、という現象がまれであり、むしろ、分かり合えない、通じ合えない、異なっているをポジティブにみとめ合う姿勢が求められるのではないかと、問いかけています。みんなが同じである国や社会の不気味さを指摘し、批判的な意見を述べています。1970 年の米国の空気を色濃く反映していた「セサミ・ストリート」という番組について触れ、異なる人たちが共存する共同体の可能性を模索しています。米国のファンダメンタリストたちの不寛容的な言動を非難してもいます。そうした敵対的で暴力的な傾向は、あらゆる宗教にみられると指摘しています。次に、文学、音楽、スポーツにおける普遍性と、世界における複数の文化圏について論じています。言語と親和性のあるジャンルに触れ、権力＝国家の支配体制にとって、言論と情報の統制が最大のカギとなっている点に、読者の注意を向けようと努めています。キーワードは、「ファシズム」「全体主義」「コンサート」「スポーツ観戦」「公民権運動」「マイノリティ」「ヒスパニック」「アーニーとバート」「同性愛」「近親憎悪」「人工妊娠中絶」「進化論教育」「ＥＳ細胞＝胚性幹細胞研究」「同性婚」「根本主義者」「原理主義者」「邪教」「異端」「無神論」「水掛け論」「クラシック」「ロック」「ポップス」「西洋音楽」「機会均等」「スペイン語」「ラテンポップス」「中国語」「エマージング市場」「中国政府」「ネット規制」「ケータイ規制」「旧ソ連の崩壊」「情報技術＝ＩＴ」「イラン」です。

＊「時の神＝あわいわあい（2)」2009-06-25：この日の記事の後編。言語との親和性が顕著ではないスポーツの普遍性について、論じています。スポーツだけでなく、宗教、芸術、学問、政治が、普遍性をそなえた、表象という仕組み＝メカニズムに基づくために、普遍的な広がりと浸透を見せている点と、最強の表象とも言える貨幣によってかんじがらめになっている現状に、読者の注意を促そうとしています。異なる者同士が付き合うためには、結論にいたるのを急ぐのではなく、ぎりぎりの線までぼーっとしている、共

通する点としない点の両方を確認し合うことも、選択肢としてあり得るのではないかと述べています。突然、ビョーキとも言える言葉の遊びに走り、普遍性の大和言葉系の言葉として「わ」を取り上げ、だじゃれと、めちゃくちゃなこじつけを展開しています。めちゃくちゃに見えるものの、本人はいたって本気です。最後に、ヒトが逃れることができない「表象という仕組み＝メカニズム」に対処するための方法として、森羅万象は変化のさなかにあるのだから、「時」と「間＝際」を引き延ばし、ずらすことにより、メカニズムおよび表象そのものの変質を待つという考え方を提案しています。この考え方については、今後さらに掘り下げたいと思っています。時間という言葉が気になってなりません。キーワードは、「国家間のガス抜き」「グローバルな経済活動」「共通性」「agree to disagree」「agree to differ」「ケース・バイ・ケース」「間（＝ま・あいだ・あわい・)」「際（＝さい・きわ)」「時間」「運動＝過程」「時の神クロノス」「鎌」です。直接書かなかったキーワードは、「ハイデガー」『存在と時間』「存在論的差異＝ Ontologische Differenz」「ジャック・デリダ」「différance」「déconstruction」「大森正蔵」『時間と存在』です。

以上です。

あとがき

あとがき

哲学がしたーい。誰々が何々と言ったなんて、関係なーい。自分の頭と体で考えてみたーい。インプットする暇などない。アウトプットに全力をあげよう。今ここにある手持ちのものを総動員して、言語、哲学、表象について、考えてみたい。哲学を庶民の手に！

うつを患いながらも、以上のような気持ちで、いわば憂さ晴らしに書き始めたのが、本書のもととなったブログでした（「うつせみのあなたに」というブログは、現在も開店いたしております）。いったん始めたら、そればかりを律儀に続ける——これこそ、まさに、うつになりやすい典型的な性格だと思います。

そうした性格の私は、ほぼ1年間にわたり毎日毎日（ときおりダウンもしましたが）、ブログ記事にしては長いものを書き続けたのでした。その結果、生まれたのが本書です。テーマは、人間の原点である「表象の働き」＝「代理の仕組み」——「何か」の代わりに、その「何か」ではないものを用いるという仕組み——です。

具体的には、言語、哲学、社会現象、表象文化が、私にとっての思考の対象になりました。今でも、そのスタンスは変わりません。そうした分野を、駄洒落を頻発し、遊び心を持ち、あくまでも素人の立場から、自由奔放に論じる。上述の「表象の働き」を、読み手に話しかけるように、なるべくややこしくならないように書きつづる（とはいうものの、ややこしくならざるを得ない部分もありますけど）——。それが、本書の一貫した態度です。

今思えば、心の病をかかえていたものの（現在もかかえています）、贅沢な時間を過ごした気がします。なにしろ、自分のいちばん興味のある、「「何か」の代わりに、その「何か」ではないものを用いる」という仕組みについて、考えることができたのですから。

『うつせみのあなたに　　第１巻～第１１巻』の各記事タイトル

第１巻

08.12.19 今日は誕生日

08.12.20 地図は現地ではない

08.12.21 消えてしまいたい指数

08.12.22 言葉に振りまわされる毎日

08.12.23 狂ったサル

08.12.24 あえて、その名は挙げない

08.12.25 遠い所、遠い国

08.12.26 横たわる漱石

08.12.27 信じてはいけない言葉

08.12.28 そして、話はお金に行き着く

08.12.29 匿名性の恐ろしさ

08.12.30 再び「消えてしまいたい指数」について

08.12.31 その点、ナンシー関は偉かった

09.01.01 私家版『存在と無』―序文―

09.01.02 論理の鬼

09.01.03 うつとあ・そ・ぼ、あるいは意味の構造について

09.01.04 haiku と俳句、ベースボールと野球

09.01.05 翻訳の可能性＝不可能性

09.01.06 ひとり歩きを言い訳の道具にしてはならない

09.01.07 名のないモンスター、あるいは外部の思考

09.01.08 見えないものを見る

09.01.09 読めないけど分かる言葉

09.01.10 聞こえるけど聞けない言葉

09.01.11 目は差別する

09.01.12 投資って何だろう？ お金って何だろう？

09.01.13 架空書評：狂った砂時計

09.01.14 ん？

09.01.15「ん」の不思議

09.01.16 あなたなら、どうしますか？

09.01.17 やっぱり、ハンコは偉い

09.01.18 架空書評：何もかもが輝いて見える日

09.01.19 こんなことを書きました（その１）

第２巻

09.01.20 それは違うよ

09.01.21 ま～は、魔法の、ま～

09.01.22 なぜ、ケータイが

09.01.23 お口を空けて、あーん

09.01.24 冬のすずめ

09.01.25 架空書評：彼らのいる風景

09.01.26 交信欲＝口唇欲

09.01.27 ケータイ依存症と唇

09.01.28 オバマさんとノッチさん

09.01.29 もしかして、出来レース？

09.01.30 カジノ人間主義

09.01.31 コラブログとモノブログ

09.02.01 架空書評：ビッグ・ブラザー

09.02.02 こんなことを書きました（その２）

09.02.03 １カ月早い、ひな祭り

09.02.04 神様になる方法

09.02.05 かつらはずれる

09.02.06 究極の武器はヒューヒューともしもしなのだ

09.02.07 ひとかたならぬお世話になっております

09.02.08 架空書評：ＰＤＳジェネレーションズ

09.02.09 １人に２台のテレビ

09.02.10 人面管から人面壁へ

09.02.11 マトリックス

09.02.12 こんなマヨじゃ、いやだ！

09.02.13 そっくり

09.02.14「東京」Œ 無限大

09.02.15 架空書評：九つの命

09.02.16 こんなことを書きました（その３）

第３巻

09.02.17 ああでもあり、こうでもある

09.02.18 差別化

09.02.19 飽きっぽくて、忘れっぽい

09.02.20 まぼろし

09.02.21 トリトメのない話

09.02.22 架空書評：奪還

09.02.23 おいしくない社会

09.02.24 あきらめない

09.02.25 最後のとりでを守る

09.02.26 やっぱり CHANGE なのだ

09.02.27 イエス・アイ・キャン

09.02.28=10.06.26 うつせみのあなたに

09.03.01 なぜ、お父さんがいないの？

09.03.02 女か男か？

09.03.03 ヒトは本を読めない

09.03.04 作者はいない

09.03.05 おくりびと vs. 千の風になって

09.03.06 毎度ありがとうございます

09.03.07 ゆうれいをはらう

09.03.08 こんなことを書きました（その４）

09.03.09 要するに、まなかな、なのだ

09.03.10 女心を男が歌う

09.03.10-09.03.12 でまかせしゅぎじっこうちゅう（前編）

09.03.13-09.03.15 でまかせしゅぎじっこうちゅう（後編）

09.03.16-09.03.25 うつせみのうつお

09.03.26-09.03.27 かわる（1）〜（5）

09.03.28-09.03.29 かわる（6）〜（10）

09.03.30 なる（1）〜（3）

09.03.31 なる（4）〜（6）

09.04.01 なる（7）〜（8）

09.04.02 なる（9）〜（10）

09.04.03 たとえる（1）〜（2）

09.04.04 たとえる（3）〜（4）

09.04.05 たとえる（5）〜（6）

09.04.06 たとえる（7）

09.04.07 たとえる（8）

09.04.08 たとえる（9）

09.04.06-09.04.09 でまかせしゅぎじっこうちゅう

09.04.10-09.04.16 うつせみのうつお

09.04.17 たとえる（10）

09.04.18 こんなことを書きました（その５）

第４巻

09.04.19 平安時代のテープレコーダー

09.04.20 言葉を奪われる

09.04.21「事実＝意見」＝両方ともでたらめ

09.04.22「人間＝機械」説（1）

09.04.23 4 月 23 日にギャグる

09.04.24「人間＝機械」説（2）

09.04.25「人間＝機械」説（3）

09.04.26 反「人間＝機械」説

09.04.27 あう（1）

09.04.28 あう（2）

09.04.29 あう（3）

09.04.30 あう（4）

09.05.01 あう（5）

09.05.02 あう（6）

09.05.03 あう（7）

09.05.04 こんなことを書きました（その６）

09.05.05 スポーツの信号学（1）

09.05.06 ドラマ信号論（1）

09.05.07 信号論から見た経済（1）

09.05.07 信号論から見た経済（2）

09.05.08 信号学的視線論（1）

09.05.09 信号学的視線論（2）

09.05.10 信号論（1）

09.05.11 もくじをつくりました

09.05.12 信号論（2）

09.05.12 信号論（3）

09.05.13 こんなことを書きました（その７）

第５巻

09.05.14 かく・かける（1）

09.05.15 かく・かける（2）

09.05.16 かく・かける（3）

09.05.16 かく・かける（4）

09.05.17 かく・かける（5）

09.05.18 かく・かける（6）

09.05.19 かく・かける（7）

09.05.19 かく・かける（8）

09.05.20 占い・占う

09.05.21 賭け・賭ける

09.05.22 書く・書ける（1）

09.05.22 書く・書ける（2）

09.05.23 こんなことを書きました（その８）

09.05.24 と、いうわけです（1）

09.05.24 と、いうわけです（2）

09.05.25 あらわれる・あらわす（1）

09.05.26 あらわれる・あらわす（2）

09.05.27 あらわれる・あらわす（3）

09.05.28 あらわれる・あらわす（4）

09.05.29 あらわれる・あらわす（5）

09.05.30 あらわれる・あらわす（6）

09.05.31 あらわれる・あらわす（7）

09.06.01 あらわれる・あらわす（8）

09.06.02 こんなことを書きました（その９）

第６巻

09.06.03 つくる（1）

09.06.04 つくる（2）

09.06.05 つくる（3）

09.06.06 つくる（4）

09.06.07 テリトリー（1）

09.06.08 テリトリー（2）

09.06.08 テリトリー（3）

09.06.09 テリトリー（4）

09.06.10 テリトリー（5）

09.06.11 テリトリー（6）

09.06.12 テリトリー（7）

09.06.13 こんなことを書きました（その 10）

09.06.18 なわ＝わな

09.06.19 台風と卵巣

09.06.20 出る

09.06.21 うんちと言葉

09.06.22 地と知と血（1）

09.06.22 地と知と血（2）

09.06.23「あつい」と「わからない」

09.06.24 ぼーっとする、ゆえに我あり

09.06.25 時の神＝あわいわあい（1）

09.06.25 時の神＝あわいわあい（2）

09.06.26 こんなことを書きました（その 11）

第 7 巻

09.06.27 空前の「純文学」ブーム

09.06.28「時間」と「とき」

09.06.29「揺らぎ」と「変質」

09.06.30 不自由さ（1）2010 年

09.06.30 不自由さ（2）2010 年

09.07.01 ぐるぐるゆらゆら（1）

09.07.01 ぐるぐるゆらゆら（2）

09.07.02 うたう

09.07.03 まつはいつまでも、まつ

09.07.04 あわいあわい・経路・表層（1）

09.07.04 あわいあわい・経路・表層（2）

09.07.05 マンネリズム・マニエリスム

09.07.06 こんなことを書きました（その 12）

09.07.07 いみのいみ

09.07.08 何となく

09.07.14 記述＝奇術＝既述

09.07.15 ３人のゲンちゃん

09.07.16 あつさのせい？

09.07.17 システムと有効性と比喩

09.08.01 気になるというか

09.08.02 もう１つ気になることが

09.08.03 さらに気になることが

09.08.04 できないのにできる

09.08.05 何もないところから

09.08.06 めちゃくちゃこじつけて

09.08.07 銃が悪いのではなく

09.08.08 どうにもならないときには

09.08.25 こんなことを書きました（その 13）

第８巻

09.08.11 たわむれる

09.08.12 なつかれる

09.08.13 げん・幻 -1-

09.08.14 げん・幻 -2-

09.08.15 げん・幻 -3-

09.08.16 げん・幻 -4-

09.08.17 げん・幻 -5-

09.08.18 げん・幻 -6-

09.08.19 げん・幻 -7-

09.08.20 げん・幻 -8-

09.08.21 げん・幻 -9-

09.08.22 げん・幻 -10-

09.08.30 こんなことを書きました（その 14）

09.08.23 げん・言 -1-

09.08.24 げん・言 -2-

09.08.26 げん・言 -3-

09.08.27 げん・言 -4-

09.08.28 げん・言 -5-

09.08.29 げん・言 -6-

09.08.31 げん・言 -7-

09.09.01 げん・言 -8-

09.09.XX げん・言 -9-

09.09.XX げん・言 -10-

09.09.XX げん・現 -1-

09.09.XX げん・現 -2-

09.09.XX げん・現 -3-

09.09.XX こんなことを書きました（その 15）

09.09.04-09.09.26 小品集（１）

09.09.27-09.10.23 小品集（２）

09.10.25-09.11.14 小品集（３）

第９巻

09.09.04 お墓参り

09.11.11 言葉とうんちと人間（言葉編）

09.11.12 言葉とうんちと人間（うんち編）

09.11.12 言葉とうんちと人間（人間編）

09.11.13 代理だけの世界（1）

09.11.14 代理だけの世界（2）

09.11.15 代理だけの世界（3）

09.11.19 代理だけの世界（4）

09.11.27 １年前の記事を読んで

09.11.28 今、考えていること

09.11.29 社会復帰はあきらめました

09.11.30 代理だけ

09.12.01-09.12.11 うつせみのあなたに（再録）

09.12.XX こんなことを書きました（その 16）

09.12.02 でまかせ・いず・む

09.12.03 もてあそばれるしかない

09.12.04 わかるはわかるか

09.12.05 翻訳の可能性と不可能性

09.12.06 わかるという枠

09.12 07 わかるはわからない

09.12.08 わかるはプロセス

09.12.09 ３つの枠

09.12.10 ちょっとないんですけど

09.12.11 あなたとは違うんです

09.12.XX こんなことを書きました（その 17）

第１０巻

09.12.06 ヒトいろいろ

09.12.07 信号としての石川君

09.12.08 コトバとチカラ

09.12.09 ごめんなさい

09.12.10 政治とは「分ける」こと

09.12.11 きな臭い話

09.12.08 ブログ廃人と呼ばれて

09.12.09 続・社会復帰はあきらめました

09.12.10 ブログと心中？

09.12.11 よくないなあ

09.12.12 素面でいたい

09.12.13 儀式

09.12.14 爪を切る

09.12.15 わける（1）

09.12.16 わける（2）

09.12.XX こんなことを書きました（その 18）

09.12.16 二句

09.12.19 ずらす

09.12.20 かえるのではなくてかえる

09.12.21 とりとめもなく

09.12.22 パラレル

09.12.23 日本語にないものは日本にない？（１）

09.12.24 日本語にないものは日本にない？（２）

09.12.25 日本語にないものは日本にない？（３）

09.12.26 日本語にないものは日本にない？（４）

09.12.27 日本語にないものは日本にない？（５）

10.01.12 かえるはかえる

10.01.13 かえるにかえる

10.01.14 もどるにもどれない

10.01.15 け＝＝く

10.01.16 まことにまこと

10.01.17 まことはまことか（前半）

10.01.17 まことはまことか（後半）

10.01.18 本物の偽物（前半）

10.01.18 本物の偽物（後半）

10.01.19 からから

10.01.20 2010 年 1 月 20 日にギャグる

10.01.21 こんなことを書きました（その 19）

第１１巻

10.01.22 夢の素（1）

10.01.23 夢の素（2）

10.01.24 夢の素（3）

10.01.24 夢の素（4）

10.02.02 うつせみのたわごと -1-

10.02.02 うつせみのたわごと -2-

10.02.03 うつせみのたわごと -3-

10.02.04 うつせみのたわごと -4-

10.02.06 うつせみのたわごと -5-

10.02.07 うつせみのたわごと -6-

10.02.08 うつせみのたわごと -7-

10.02.09 うつせみのたわごと -8-

10.02.10 うつせみのたわごと -9-

10.02.11 うつせみのたわごと -10-

10.02.12 うつせみのたわごと -11-

10.02.13 うつせみのたわごと -12-

10.02.14 うつせみのたわごと -13-

10.02.15 うつせみのたわごと -14-

10.02.16「外国語」で書くこと

10.02.17 揺さぶり、ずらし、考える

10.02.19 動詞という名の名詞

10.02.21 名詞という名の動詞（前半）

10.02.21 名詞という名の動詞（後半）

10-02-25 不思議なこと

10.02.27 はかる -1-

10.02.28 はかる -2-

10.02.XX はかる -3-

10.02.XX はかる -4-

10.03.XX こんなことを書きました（その 20）

10.03.04 代理としての世界 -1-

10.03.05 代理としての世界 -2-

10.03.06 代理としての世界 -3-

10.03.07 代理としての世界 -4-

10.03.09 代理としての世界 -5-

10.03.11 代理としての世界 -6-

代理としての世界（改訂版）(1)

代理としての世界（改訂版）(2)

代理としての世界（改訂版）(3)

代理としての世界（改訂版）(4)

奥付

奥付

うつせみのあなたに 第 6 巻

https://puboo.jp/book/17432

著者：星野廉
著者プロフィール：https://puboo.jp/users/renhoshino77/profile

感想はこちらのコメントへ
https://puboo.jp/book/17432

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/17432

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（https://puboo.jp/）
運営会社：株式会社 paperboy&co.

うつせみのあなたに　第６巻

版番号の予定

{{--
--}}

著　者　　書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社